

踊る技術の習熟と  
体感による舞踊運動の感情価との関係

15300213

平成15年度～17年度科学研究費補助金

(基盤研究(B)(2))

研究成果報告書

研究代表者 柴 真理子

神戸大学発達科学部教授

2006年3月(平成18年3月)

# 踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係

平成 15 年度～17 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (2) (研究課題番号 15300213)

## 目 次

<b>I, 研究概要</b>	2
1, はしがき	
2, 研究組織	
3, 研究経費	
4, 研究発表	
5, 研究の概要と総括	
<b>II, 体感からみた基本感情の設定 (8つの舞踊運動と舞踊用語の作成)</b>	
1, 舞踊における体感研究の意味	10
2, 舞踊の体感からみた基本感情の検討	16
<b>III, 「同じ舞踊運動を繰り返し踊ること」を内容に取り入れた実験授業</b>	
1, 踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察	21
2, 同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について	26
3, 同じ運動を繰り返し踊ることと体感について(2)―保育者養成カリキュラムにおける授業を事例として―	37
<b>IV, 舞踊運動の動作解析</b>	
1, DLT 法による舞踊運動の 3 次元動作解析	46
2, 舞踊運動における体感と物理量の変化	48
3, 3つの舞踊運動の variation の動作特性	55
<b>V, 舞踊運動の体感の日中比較</b>	59

## 付録：既発表論文から 5 編

1, 体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語(1)	67
2, 舞踊運動の体感の変化のプロセスとその意味	80
3, 身体表現―個性・共創・コミュニケーション	84
4, Bodily Sensation in Dance: its Formation and Cultural Difference	91
5, 踊る技術の向上と体感獲得の過程―舞踊経験の浅い学生の感情価に基づいて―	95

## 1, はしがき

本研究は、舞踊運動における基本感情を検証して、舞踊の経験の有無、あるいは障害に関係なく踊ることができる基本感情を表す舞踊運動を作成し、踊る技術の習熟とその舞踊運動の感情価の体感との関係を明らかにし、今後の舞踊表現の指導に資することが目的であった。

そのために、予備実験から始め、まず、体感からみた基本感情の設定・8つの舞踊運動の策定・8つの舞踊運動の妥当性の検証・舞踊用語の選定を行い、それらを用いて、「同じ舞踊運動を繰り返し踊ること」を内容に取り入れた実験授業1を実施し、繰り返し踊ることによる舞踊運動の変容と体感の変化の関係をみた。実験授業2は、舞踊運動の指導を伴う内容での授業実践で、ここでは、授業に「同じ舞踊運動を繰り返し踊ること」を組み込むことの有効性が明らかになった。

舞踊運動の変容を客観的にとらえるためにDLT法による舞踊運動の3次元動作解析を導入し、舞踊運動の解析の観点は他の運動とは異なる特異性があることが明らかになった。

また、日本と中国の大学生を対象に、舞踊運動の体感比較を実施し、そこから体感には文化差や性差が存在することが示唆された。

ここでの一連の研究を通して多くの多面的なデータを得ることができ、それらを元に主に舞踊学会で研究成果を発表してきた。しかし、得られた多くの成果を総合的に論議するのはこれからであり、そこでの論議の焦点は、舞踊運動の体感がもつ意味の探求にあり、舞踊運動の体感が現行指導要領にある「生きる力」、そして、次の指導要領に基本的な考え方として据えられる「言葉の力」をはぐくむ一つの具体的な方法であることを鮮明に浮かび上がらせることにある。

## 2, 研究組織

研究代表者	柴 真理子	神戸大学発達科学部教授
研究分担者	前田 正登	神戸大学発達科学部助教授
	米谷 淳	神戸大学大学教育推進機構教授
	小高 直樹	神戸大学発達科学部教授
	西 洋子	東洋英和女学院大学教授 (平成 15~16 年度)
研究協力者	坪倉紀代子	十文字学園女子大学教授
	山田 敦子	高知大学教授
	猪崎 弥生	中京女子大学教授
	原田 純子	大阪女学院大学準教授
	塚本 順子	天理大学助教授

## 3, 交付決定額 (配分額)

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	8,000,000	0	8,000,000
平成 16 年度	3,300,000	0	3,300,000
平成 17 年度	3,100,000	0	3,100,000
総 計	14,400,000	0	14,400,000

#### 4, 研究発表

##### 【学会誌等】

- 1, 柴真理子・坪倉紀代子・猪崎弥生・原田純子・塚本順子「体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語(1)」神戸大学発達科学部研究紀要 第12巻第2号 pp.113-126 2005.2
- 2, 柴真理子「身体表現—個性・共創・コミュニケーション」共創シンポジウム2004 コミュニティの共創に向けて—その技術とシステム論—講演集 pp.9-15. 2004.8. 主催:(社)計測自動制御学会 SI 部門共創システム部会
- 3, 原田純子・柴真理子・猪崎弥生・塚本順子「踊る技術の向上と体感獲得の過程—舞踊経験の浅い学生の感情価に基づいて—」体育科教育学研究 21(2) pp.31-44. 2005.8.
- 4, 柴真理子「舞踊運動の体感の変化のプロセスとその意味」バイオメカニズム学会誌 vol.29, no.3 pp.124-128. 2005.8.
- 5, Kiyoshi Maiya, Mariko Shiba, and Kiyoko Tsubokura “*Bodily Sensation in Dance: its Formation and Cultural Difference*” Proceedings of The First International Workshop on Kansei pp.110-113. 2006.2.

##### 【口頭発表】

- 1, 柴真理子「舞踊における体感研究の意味」第55回秋季舞踊学会大会 2003.12.7.
- 2, 塚本順子「舞踊の体感からみた基本感情の検討」 同上
- 3, 原田純子「踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察」 同上
- 4, 前田正登「DLT法による舞踊運動の3次元動作解析」 同上
- 5, 柴真理子「同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について」  
第56回秋季舞踊学会大会 2004.12.4.
- 6, 小高直樹「舞踊運動における体感と物理量の変化」 同上
- 7, 前田正登「3つの舞踊運動のvariationの動作特性」第57回秋季舞踊学会大会 2005.11.27.
- 8, 坪倉紀代子「同じ運動を繰り返し踊ることと体感について(2)—保育者養成カリキュラムにおける授業を事例として—」 同上
- 9, 米谷淳「舞踊運動の体感の日中比較」第57回秋季舞踊学会大会 2005.11.26.

# I. 研究の概要

## 1. 研究概要と総括

本研究は、舞踊運動における基本感情を検証して、舞踊の経験の有無、あるいは障害に関係なく踊ることができる基本感情を表す舞踊運動を作成し、踊る技術の習熟とその舞踊運動の感情価の体感との関係を明らかにし、今後の舞踊表現の指導に資することが目的であった。

このような目的を掲げる研究には、専門とする研究分野の異なる研究者とプロジェクトを組むことが有効であると考え、従来から共同研究を進めてきた心理学実験測定の実験家や感性工学の実験家と、新たにバイオメカニクスを専門とする研究者を研究分担者とした。また、舞踊運動の作成、体感評価実験、実験授業には舞踊学を専門とする研究者に協力を求めた。

そして、次のような手順で研究を進めた。

### 1) 体感からみた基本感情の設定

#### (1) 予備実験

舞踊運動の体感からみた基本感情を設定するために、柴らのこれまでの研究で得られた舞踊に関する24の感情語を内包する24の舞踊運動を作成し、これに松本の7種の舞踊運動(7motives)を加えて、31の異なる感情を内包する舞踊運動を実験材料として準備した。そして、この31の舞踊運動を舞踊家に踊り、その体感を記述することを求めた。その体感の記述と4人の舞踊研究者自身もそれらの舞踊運動を踊り、体感を得ながら議論を進め、この時点で、31の舞踊運動を、明確に異なる体感を得ることのできる舞踊運動として20の舞踊運動に絞り、第一次体感実験の実験材料とした。

このようにして作成した20の舞踊運動を舞踊経験のあるダンス部の学生16人に踊り、その体感を感情語5つ以内で記入することを求めた。そしてそれぞれの舞踊運動の体感から得られた感情語の親近性を見る為にコレスポネンス分析を行なった。その結果、20の舞踊運動は8つの異なる感情群の性質を有するグループに分類できることが、統計学的に明らかとなった。

#### (2) 8つの舞踊運動の策定

舞踊運動の表現性の研究において重要なことは、実験材料としての舞踊運動の策定である。人間の運動は無限に創り出すことが可能であるが、舞踊研究においては、その目的に応じて、何を手がかりに舞踊運動を創り出すのかを明確にする必要がある。

本研究では、予備実験の結果から得られた8つの異なる感情群の性質を有する舞踊運動を策定するにあたって次のような条件を設定し、第1段階として4名の舞踊研究者(柴・猪崎・原田・塚本)が、設定条件に基づいて8つの舞踊運動を創り、第2段階として舞踊家に8つの舞踊運動の体感のチェックを求め、8つの舞踊運動が異なる体感をもたらすものであることを確認した上で、本研究の実験材料とすることとし、その舞踊家を踊り手としてスタジオでプロのカメラマンにより撮影を行った。

＜舞踊運動の設定条件＞

- ① 8つの舞踊運動は、「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討」から得られた8つの異なる感情群の性質を代表するものとして表1に示す感情を内包するものであること。
- ② 快—不快、緊張—弛緩、興奮—沈静という3つの次元の特性に基づいて、舞踊運動を創ること。
- ③ 表3に示すように操作的に設定されたコアとなる運動特性に基づいて舞踊運動を創ること。

注：8つの異なる感情群の性質を有するグループに入る複数の舞踊運動に共通な特質を筆者らが抽出し、コアとなる運動特性として設定した。

### (3) 8つの舞踊運動の体感評価実験（8つの舞踊運動の妥当性の検証）

策定した8つの舞踊運動は、舞踊家のみならず、舞踊に熟練していない学生にも8つの異なる体感をもたらすのかどうかを実験的に明らかにすることによって、8つの舞踊運動が舞踊における基本感情を表すものとして妥当であるかどうかを検証した。

27名（m14名，f13名）の学生を被験者に、それぞれの舞踊運動を3回VTRで呈示し、被験者はそれを見ながら動き、3回見た後は、VTRを見ないで5分間練習をした。被験者全員が踊れるようになったことを確認した後に、実験者の指示で評価用に踊り、踊った直後にその体感を感情語5つ以内で自由に記述することを求めた。またその後それぞれの舞踊運動を1回踊り、その体感を松本のチェックリスト2にある用語から5語以内選択することを求めた。

その結果、いずれの方法によっても被験者は8つの舞踊運動からそれぞれ特徴的な感じを体感しており、このことから8つの舞踊運動は体感の異なる舞踊運動であると言える。

### (4) 舞踊用語の選定

上記の8つの舞踊運動の体感評価実験から、設定した8つの舞踊運動はそれぞれ異なる体感をもたらす舞踊運動であること、しかし、それと同時に親近性のある舞踊運動もあり、8つの舞踊運動はその親近性から6つのグループにまとめられ、また感情語は5から7つのグループにまとめられることが推測された。このことは、体感による基本感情を8つとした場合、それらの感情を想定して創られた舞踊運動を踊ることによって異なる体感を得ることはできるが、それらを絞り込み、体感による基本感情を6つにすることが可能であることが示唆された。また、体感評価に用いた感情語も5から7つのグループにまとめられると推測されることから、ここでは、体感による基本感情を8つから6つ絞り込むこととし、以下のように6つのグループを構成する舞踊用語を選定することとした。

6つの基本感情の感情語グループ

group	感情語
1	<b>楽しい</b> ・ 嬉しい ・ 喜び
2	<b>やさしい</b> ・ あたたかい ・ 幸せな
3	<b>穏やかな</b> ・ のびやかな ・ 優美な
4	<b>厳かな</b> ・ 神聖な ・ 静謐な（静かな）
5	<b>悲しい</b> ・ 寂しい ・ 冷たい
6	<b>怒り</b> ・ 苦しい ・ 怖い

注；bold・italic は代表語を表す

### 2) 「同じ舞踊運動を繰り返し踊ること」を内容に取り入れた実験授業

同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係をみるために「同じ舞踊運動を繰り返し踊ること」を内容に取り入れた実験授業を3段階で実践した。なお、これに先立ち予備実験を実施した。

#### (1) 予備実験

予備実験とした授業では、20の舞踊運動の中から2つの舞踊運動を実験材料として、舞踊経験の浅い学生に、3回の授業でそれらを踊り、体感を記述することを求めた。その結果、踊る技術が段階的に変化し、それに伴って体感も変化していくことが認められた。

#### (2) 実験授業1

8つの舞踊運動の中から『怒り』『悲しい』『楽しい』を内包する3つの舞踊運動を実験材料として、舞踊経験の浅い学生を対象に、実験授業を行った。学生に5回の授業でそれらの舞踊運動

を踊り、その体感を本研究で作成したチェックリストから5語以内で選択し、且つ、その体感の強度を4段階で示すことを求めた。その際、踊り方がどのように変わるのかを物理量の変化として捉え、今後、人間の行う評価をその物理量の変化と照合することにより、舞踊運動の変化を多面的に捉えるために、本実験では、5回の実験のうち、1回目、3回目、5回目には、一般のビデオカメラでの撮影に加えて、DLT法による舞踊運動の3次元動作解析用に、被験者の舞踊運動を4台のカメラで撮影した。

また、この体感評価とは別に、毎回の授業記録にも「3つの舞踊運動を踊ってみて気づいたこと」という項目を設け、5回の体感実験が終わった日には「3つの舞踊運動を練習し、毎回、それぞれの舞踊運動の体感を記録してきました。5回反復する過程で、あなた自身は、あなたの動きがどのように変化し、体感がどのように変化してきたと感じるか。できるだけ詳しく書く。」という項目を設けた。そして授業のまとめとして「人間にとっての舞踊の役割と意義」というテーマでのレポートを求めた。

その結果、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによって、体感がどのように変化していくか、そのプロセスについて、5回の体感評価実験から以下のことが明らかになった。

①同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによる体感の変化は次の3つのプロセスを経る。

第1段階…動きを覚えることに必死で、体感を意識する余裕がない

第2段階…動きを覚えてスムーズに踊れるようになり、踊りながら自分の気持ちや気分を感じ取れるようになる

第3段階…自分のリズムで踊り、自分らしさを表現できる

②初心者が既成の舞踊運動を自らの舞踊運動として踊るためには、踊る（練習）回数を4～5回とすることが適当である。

そして、また、授業記録やレポートから、この過程で被験者は多くの気づきを得ていることが知られ、今回の実験授業で得られた結果を詳細に検討し、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることにより得られる「知」の在り方の特性を解明することが新たな課題として浮上し、そこに舞踊における体感研究の意味を認められた。

### (3) 実験授業2

実験授業1では、3つの舞踊運動について指導者が指導することなく、被験者である学生が日にちを変えて、5回繰り返し練習し踊るなかで3つの舞踊運動の踊り方がどのように変化し、その変化が体感にどのような変化をもたらすのかを、その両者の関係について明らかにした。

そこで次に、実験授業2では、3つの舞踊運動について指導者が舞踊の構造にのっとなって、指導のポイントを抑えた指導を5回行い、被験者である学生の舞踊運動と体感がどのように変化し、どのような気づきを得られたかを明らかにし、今回は保育者養成カリキュラムにおける授業の中で、昨年の実験材料の素材を利用する授業を組み立てた。そこでは、指導者が実験材料である舞踊運動を舞踊の構造に基づいて指導のポイントを抑えた指導を5回実施し、同じ舞踊運動を指導を受けつつ繰り返し踊ることが、どのような体感の変化や自らへの気づきをもたらすかを明らかにし、「同じ舞踊運動を繰り返し踊る」という内容を授業に取り入れることの可能性をみることに目的であった。

授業の記録については、指導者である筆者自身が毎回、授業記録を作成すると同時に、被験者である学生には①毎授業後の記録②6ヵ月後の記録を求めた。授業は毎回、固定ビデオで撮影し、また体感チェック時には、被験者2人づつ、舞踊運動の撮影を行った。

その結果、学生には動きを繰り返すことからの身体への意識、気づき、運動への理解、他人へ

の理解・共感が生まれており同じ舞踊運動を繰り返すことの授業形態の有効性を立証でき、また4～5回の繰り返しの結果与えられた動きを自分の動きとして動けるようになっているということは、先行研究の結果との一致が見られた。

そして、**見る** **見せる** **見られる** という経験は、自身のからだ、運動を客観視することにつながり、それがさらに他人の身体を客観視することになることであり、それは子どものからだや運動を分析する目を育てることにつながるということを学生たちは自覚していることがあきらかになった。従って、同じ舞踊運動を繰り返すことは、保育者養成プログラムの身体表現に関する新たな一つの方法として提示しうると考察された。

### 3) 舞踊運動の動作解析

#### (1) DLT法による舞踊運動の3次元動作解析

本研究のテーマは「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」であり、その踊る技術の習熟の度合いをみる方法として3次元DLT法による動作解析を導入した。3次元DLT法による動作解析を導入するのは、複数の踊り手の舞踊運動を3次元DLT法により動作を解析することによって客観的に捉えられる運動の特徴と、踊り手自身の主観的な体感の特徴を比較するためである。

ところで、動作解析には多くの解析の観点があり、従来、スポーツにおける動作については多くの研究がなされ、それぞれのスポーツの特性を捉えるのにふさわしい分析の観点を研究者が共有している。それに対し、舞踊運動に関する動作解析はさまざまな機種を用いて研究が進められてきているが、その分析の観点も研究者によって様々であり、そういった観点からの解析が真に舞踊運動の特性を捉えることになるのか検証がなされていない。また、舞踊運動の撮影方法、そして解析の観点、方法について詳細に検討された研究は少なく、このような研究の成果を蓄積していくためには、これらを検討すると同時に、その解析が舞踊研究のどのような面に貢献するのかが明らかにする必要がある。そこで、ここではまず、3次元DLT法を用いて舞踊運動の動作を多面的に解析し、3次元の動作解析が舞踊研究にどのように貢献するのかを検討した。

その結果、舞踊運動が他の一般的な運動と異なり、3次元動作解析の対象として特異なものであることを指摘し、動作解析にあたっては、撮影カメラの台数や配置に工夫が必要であること、そして、そのような撮影の結果得られた画像による3次元の動作解析は舞踊研究への貢献が期待されることを述べた。それと同時に、実際に撮影した20種類の舞踊運動に3次元DLT法を適用した結果、身体各部（阿江のモデルによる身体の23点）や身体重心の座標、それら測定点の移動軌跡、速度変化などを得たが、動作分析によって可能となる多くの観点のうち、舞踊運動の分析にとって意味のある分析の観点は何か？それぞれの舞踊運動において動きの焦点（重要なポイント）は異なるので、どの舞踊運動でも同じように加速度や位置座標などを求めればよいわけではないことが明らかになり、各舞踊運動の動きのポイントについて、舞踊研究者とバイオメカニクスの研究者が共同して、分析の観点を検討していくことの意義が確認された。

#### (2) 舞踊運動における体感と物理量の変化

「DLT法による舞踊運動の3次元動作解析」の継続である本研究では、まず、舞踊運動の動作解析において共通に分析するべき観点として、舞踊運動の時間、身体各部の移動距離や速度等の物理量に着目し、それらの分析結果をどのように表示するのかを検討するとともに、典型的な舞踊運動の変容を取り上げて、それらの物理量による裏づけを試みた。さらにそれらを踏まえて、あらためて舞踊分析への3次元動作解析の導入の意義と、舞踊運動における体感という主観的指

標に関する実証研究への応用可能性について考察した。

その結果、これまで述べたような物理的指標によって舞踊運動を観察した場合、その一般的な特性を捉えることが十分可能であることが示唆されたと言えるだろう。本研究は、もともと、舞踊運動における体感という主観量を、物理量という客観的なものへ翻訳可能であるかどうか、また可能だとすればどのような変換原理が成り立ち得るのか等について探ることが目的であった。もちろんその目的が達成されたわけではなく、その端緒についたばかりであるが、少なくとも身体各部位に関する3次元位置情報の時系列データの分析は、踊り手自身の舞踊運動の大きさに対する体感（主観的距離）との関係を実証的に論じていくうえで極めて有効な手法となると言って決して過言ではない。

### (3) 3つの舞踊運動の variation の動作特性

「DLT法による舞踊運動の3次元動作解析」において、動作分析によって可能となる多くの観点のうち、舞踊運動の分析にとって意味のある分析の観点は何か？という課題が残され、「舞踊運動における体感と物理量の変化」では、その課題を踏まえて、舞踊運動の動作解析において共通に分析すべき観点として、舞踊運動の時間、身体各部の移動距離や速度等の物理量に着目し分析した結果、舞踊運動の一般的な特性を捉えることが可能であることが示唆された。

ここでは、上述の2つの研究結果を踏まえて、舞踊研究者が舞踊運動をビデオ映像で詳細に観察し、舞踊運動の特性を抽出するための物理的なパラメーターについて検討した。その結果、舞踊運動の特性を抽出するための物理的なパラメーターは、**身体各部位の高さの時間変化**である、との仮説を導出するに至った。そこで、その観点から『楽しい』『悲しい』『怒り』を内包する舞踊運動の動作解析を行い、そこから得られたそれぞれの舞踊運動の動作特性が、もともと舞踊研究者がそれらの舞踊運動を作成する際にコアとした運動特性を捉えているのかをみた。その結果、舞踊運動の特性を抽出するには、身体核部位の高さの時間変化が有効な指標となりうることが明らかになった。

### 4) 舞踊運動の体感の日中比較

海外での調査研究では、中国（上海中医薬大学）とノルウェー（スタヴァンガー大学）で、体感評価実験を行った。中国での被験者は舞踊経験の無い男女学生であり、他方、ノルウェーでの被験者は舞踊専攻の男女学生であった。ここでは、中国で得たデータをもとに、「舞踊運動の体感の日中比較」をテーマに掲げた研究について報告する。

本研究では体感に及ぼす文化差の影響を検討するために、日本人大学生と中国人大学生を対象に、体感評価実験を実施し、両者の舞踊運動に対する体感と認知構造を比較検討した。本報告は分析1と分析2から成り、分析1では、日本人（女子32名）、中国人（女子7名）、中国人（男子8名）のそれぞれ評価結果を因子分析して評価項目間の関係を比較し、分析2では、3つのデータセットをひとまとめにして主成分分析を行い、得られた主成分をもとに8つの舞踊運動の体感を比較した。

その結果、各群（日本人女子・中国人男子・中国人女子）ともによく似た変数（評価項目）間の関係性を示しているが、細部をみると文化差や性差があることがわかり、舞踊運動を体感する場合には、文化によって基準のもつニュアンスの違いのようなものがあることが示唆された。

中国人女子と中国人男子の比較から性差の存在が推察されたが、中国人のデータ数は十分とは言えないので、このような性差についてさらに実験を行って検討することの必要性が認められた。

以上の1)から4)の手続きを経て、得られた知見から、「同じ舞踊運動を繰り返し踊ることは、

舞踊運動の変容とその舞踊運動に関する体感の変化をもたらし、更に、自分へのまた他者への様々な気づきをもたらすことが明らかになった。

このことは、「舞踊における体感研究の意味」において、柴が

筆者の意味する『体感』は、ひとまず、広辞苑の意味を借りて、①の意味（身体に受ける感じ）を通して②の意味（自分の身体に対するやや漠然とした感覚。内部感覚の統合によって形成され、身体的自我の基礎を成す）が機能するというように説明しておきたい。ただし、『体感』に関する実験では、被験者には「踊るという実体験を通して身体に受ける感じ」「自分が踊ることによって身体で感じとった感じ」と説明している。これは広辞苑の①の意味であるが、このように説明された『体感』についての被験者の回答の中に必然的に②の意味が出てくるであろう。即ち、踊ることの『体感』（①の意味）を問えば、そこに自己の存在（②の意味での体感）を認識できると考えられる。

と書いたそのことが検証されたことを意味すると言えよう。

今後は、中村雄二郎の〈体性感覚〉、メルロ＝ポンティの〈身体図式〉、ベルグソンの〈運動図式〉といった考え方を踏まえて、舞踊運動の体感の意味の考察を深め、また、マイネルや金子らの運動の習熟に関する論議の中で舞踊運動の習熟は他の運動に対してどのように特異なものであるのかを明確にしていく必要がある。

また、「同じ舞踊運動を繰り返し踊ること」をどのように体系的に課題に取り入れて授業（セッション）を実践するのかその内容を検討し、それに沿って実践を積み重ね、学習者の学びを常に分析していくことも必要である。

このように、舞踊においては、理論と実践のインタラクティブを念頭においての研究が必須であり、そうすることによって、「舞踊における体感研究の意味」で述べた、舞踊運動の体感が生きる力をもたらすことの現代的意義を鮮明に描きだすことができるであろう。

また、異なる文化や性による体感の比較は、緒についたところであるが、その体感の比較から原初的なコミュニケーションの成立に必須である身体による認知構造の相違を明らかにすることが可能であると思われる。

最後に、舞踊運動の体感は、現在の指導要領にある、これからの変化の激しい社会を生き抜くために、学校を出たあとも生涯学び続けていく上で基礎となる力と位置づけた**生きる力**をもたらすことをみてきた。ところが平成18年2月9日の新聞によれば、約10年ぶりに全面改訂される時期学習指導要領に、学校のすべての教育内容に必要な基本的な考え方として「言葉の力」を据えるという。この「言葉の力」が出てきた背景には、「生きる力」という抽象的な概念への理解が進まないという事情があり、原案では「言葉は、確かな学力を形成するための基盤。他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための手段で、知的活動や感性・情緒の基盤となる」と説明されているという。確かに現代は、「言葉の力」が弱体化していると窺われ、言葉は、そこに説明されている機能をもつもので、人間にとって重要であることに異論はないが、言葉の力にばかり頼る教育にならないことを、即ち、体験的理解を欠き、体験の理解に偏重することのないことを願うばかりである。

鯨岡が言うように、コミュニケーションには感性的コミュニケーションと理性的コミュニケーションがあり、前者が原初的コミュニケーションである。自らの身体を投げ、感性を十分に働かせること、これが理性的コミュニケーション（言葉や数字）の前提である。自らの存在意義や他者の存在意義について言葉で語るだけでなく、からだで感じとること、このことの重要性を、舞踊教育に携わるものは、声を大にして主張し続けなければならない。主張するためには前述したように、理論と実践のインタラクティブを念頭においての研究が必須であることを肝に銘じて、この科学研究費補助金を受けての研究のまとめとしたい。

## 舞踊における体感研究の意味

柴 眞理子（神戸大学）

### I. はじめに

筆者らは「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」というテーマで平成 15 年度から 3 年間の予定で科学技術研究補助金の交付を受けている。この研究におけるキーワードは『体感』である。

筆者は 1995 年に舞踊運動の体感による感情価に関する研究に着手した<sup>1</sup>。その当時は『体感』という言葉がマスメディアに視聴することはほとんどなかったが、21 世紀に入って『体感』という言葉はテレビコマーシャルや雑誌、各種のパンフレットなど様々なメディアに登場している。

広辞苑によれば、『体感』には、①身体に受ける感じ、②自分の身体に対するやや漠然とした感覚。内部感覚の統合によって形成され、身体的自我の基礎を成す、という二つの意味がある。マスメディアに登場する『体感』がどちらの意味で使われているのかは明白でないが、いずれにしても『体感』は時代の要請であると言えよう。

筆者の意味する『体感』は、ひとまず、広辞苑の意味を借りて、①を通して②が機能するというように説明しておきたい。ただし、『体感』に関する実験では、被験者には「踊るといふ実体験を通して身体に受ける感じ」「自分が踊ることによって身体で感じとった感じ」と説明している。これは広辞苑の①の意味であるが、このように説明された『体感』についての被験者の回答の中に必然的に②の意味が出てくるであろう。即ち、踊ることの『体感』（①の意味）を問えば、そこに自己の存在（②の意味での体感）を認識できると考えられる。

本研究の目的は、筆者らのこれまでの「体感による舞踊運動の感情価」に関する研究と、舞踊の実践的活動の事例を取り上げ、そこから舞踊における体感研究の現代的意義について述べ、「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」というテーマを掲げた研究の目指す意味を明らかにすることにある。

### II. 「みえの世界」からの動きの感情価に関する研究

「動きの感情価」に関する研究の第 1 報<sup>2</sup>は、1972 年に、東京教育大学の松本千代栄 教授（現在は、お茶の水女子大学名誉教授）によってもたらされた。松本は、舞踊における身体や運動を「身体や運動それ自体の認知だけでなく、それ以上のものとして価値づける人間の機能は、社会集団の中で無言のコミュニケーションや評価を可能にしている機能であり、身体によってなされる表現文化の創造と鑑賞を成立させる基底の働きをなしている」と捉え、その身体運動と感情の連関について「表現の独自性の基底には、ある共通性質が潜在する」という仮説を立て、その仮説を実証する方向で研究を進めた。松本は、運動の表現性に運動／感情の型（M-Pattern）と感情の質（F-Quality）という 2 つの層を認め、舞踊運動の感情価をこの 2 つの面から捉え、『運動／感情の型』とは、運動に表現性をもたらすより基底にある素型的な性質を表わし、『感情の質』とは運動の型を基盤に、運動のより表層に明らかになる感情を表わすとしている。そして舞踊用語に関する研究と動きの感情価に関する研究を累積する中で舞踊の感情を表す用語は次第に洗練され、感情の型を表すチェックリスト 1（表 1）、感情の質を表すチェックリスト 2（表 2）という 2 つのチェックリストを作成した<sup>3</sup>。

以上のような松本らの「動きの感情価」に関する研究は、舞踊表現と享受という立場から身体運動と感情の連合関係を解明するために、その感情価を「みえの世界」からとらえている。

表1. Check list 1

1 スピードのある	10 ゆっくりした
2 アクセントのある	11 なめらかな
3 不規則な	12 規則的な
4 直線的な	13 曲線的な
5 拡大的な	14 縮小的な
6 バランスのとれた	15 アンバランスな
7 強い	16 弱い
8 軽い	17 重い
9 急変的な	18 持続的な

表2. Check list 2

1 軽快な	2 明るい	3 楽しい	4 やわらかい	5 やさしい
6 流れるような	7 悲しい	8 暗い	9 粘った	
10 さりげない	11 日常的な	12 普通の	13 安定した	
14 威厳のある	15 重厚な	16 かたい	17 冷たい	
18 機械的な	19 躍動的な	20 迫力のある	21 大きな	
22 賑やかな	23 興奮的な (苦しい)	24 ユーモアのある		
25 優美な	26 華麗な	27 暖かい	28 静かな	29 寂しい
30 弱々しい	31 自然な	32 落ち着いた	33 単純な	
34 厳かな	35 神聖な	36 深い	37 鋭い	38 威嚇的な
39 攻撃的な	40 歓喜の	41 勇壮な	42 生命感あふれた	

### III、「体感による舞踊運動の感情価」

「みえの世界」からの接近は、ある運動がどのようにみえるか、換言すれば、他者にどのような印象が受容されるかというものである。これに対し、受容される運動を行う者は、自分自身の体感によって、その運動の印象を受容する。このように、運動を行うものとみる者の両者があって、そこにコミュニケーションが成立するわけであり、「舞踊におけるコミュニケーション」の立場から身体運動と感情の連合をみるには、両者の立場からの感情価の研究が不可欠であると考えられる。しかし、これまでは「みえの世界」からの感情価が研究対象であり、「体感」による感情価の体系的な研究は殆どみられなかった。そこで、筆者は、「みえの世界」からの研究成果を基盤に、舞踊運動を行う者が、その舞踊運動をどう体感しているかという観点から身体運動と感情の連合を明らかにし、更に、みえと体感による感情価を比較するという目的を掲げ、3つの仮説をたてて実験を行い研究を進めてきた<sup>4567</sup>。

3つの仮説とは、以下の通りであった。

- ①舞踊運動を行った場合、運動者はその舞踊運動から一定の感情を体感するであろう。
- ②舞踊運動と感情の連合についての体感には、舞踊における感性が影響するであろう。

ここでは舞踊の感性の要因の一つとして舞踊経験をとりあげる。

従って、仮説は「舞踊の体感には、舞踊経験による相違と、舞踊経験に関係なく共通に体感される連合関係があるだろう。」となる。

- ③鑑賞者が捉えた舞踊運動と感情の連合関係と、運動者が体感した舞踊運動と感情の連合関係について、比較検討することにより、運動者と鑑賞者における動きのコミュニケーションのメカニズムの一端を明らかにすることができるだろう。

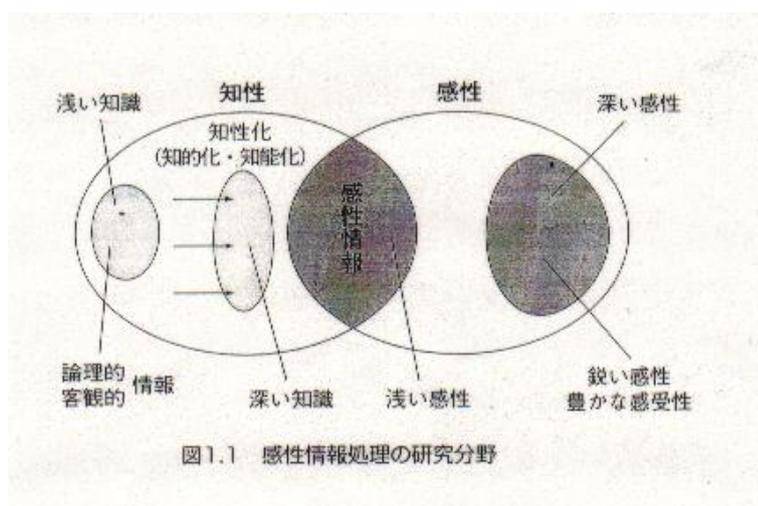
一連の研究では、仮説1と2を検証するために、舞踊家と舞踊未熟練者である学生を被験者に、「みえの世界」からの感情価に関する代表的な研究である松本の「舞踊研究：課題設定と課題解決学習Ⅱ-運動の質と感情価」を基盤にした実験を実施し、また仮説3に対しては、舞踊家の体感と、松本のみえによる舞踊運動の感情価の研究結果を引用して、これらの結果の比較検討を行い、仮説の検証を試み、そこでは以下のことが明らかにされた。

まず、舞踊運動の体感結果から、Dancer 群、Student 群の被験者は共に、7種の舞踊運動の型の特徴的な感情価の体感を共有し、運動の質に関しては、Dancer 群は、実験に用いた松本の7

motives すべての運動の質を体感できたのに対し、Student 群では、Solemn Mv., Natural Mv., Lonely Mv. という3つの舞踊運動は、類似した質を持つ舞踊運動として体感され、これらは学生被験者にとってあいまいな体感しか抱けなかったことがわかる。このように、学生被験者では一部あいまいな体感がみられたが、それを除いては、運動の型、質共に、体感の共有がみられ、仮説1をほぼ実証することができた。

また、7種の舞踊運動のみえと体感による感情価の照合結果から、運動の型に関しては、D群、S群ともに、みえと体感の一致度は高いが、Dancer 群は Student 群に比較し、1つの舞踊運動に対してダンサー同志で類似の体感をもつ傾向を示し、運動の質に関しては、Dancer 群の体感は7 motives が持つ本来の運動の質の体感でありみえの感情価との一致度もかなり高いのに対し、Student 群では、みえと体感が一致しない舞踊運動もみられた。しかし、松本の作成した7種の舞踊運動は、踊手と鑑賞者の双方に類似した感情価をもたらし、本研究の限界内で、体感による感情価とみえによる感情価はかなり共通であることがわかり、このことは、仮説3を詳細に検証できたと言えるものではないが、仮説3の検証に繋がるものであると推察された。

そして、Dancer 群と Student 群の体感の比較から、舞踊運動の「運動の型」の体感については、舞踊経験の違いの影響がほとんどみられないが、「運動の質」の体感には舞踊経験が影響していると考察された。



(辻三郎「感性情報処理とは」から引用)

筆者は、既に松山<sup>8</sup>の感性情報の概念に依拠し、「運動の型」とは物理的特徴量との対応が比較的容易である低次感性情報であり、「運動の質」とは、多角的な低次感性情報の相互作用から成る高次感性情報であることをみてきた<sup>6</sup>。松山によれば、感性情報とは人間の持つ感性に対して刺激や影響を与える情報であるから、この情報を受け取る度合が強ければ感性が強いと言えるであろう。従って、本実験の結果から、舞踊運動熟練者は、高次感性情報を捉える感性が強く、低次感性情報の把握には舞踊の感性の強さは、影響しないとみられ、これらのことから仮説2の一端を検証することができた。

ここまでの研究では、運動の型も被験者の体感のみによって捉えたが、型については運動分析が必要であり、体感と分析結果を照合することによって、上述のような体感の差異は舞踊運動の実現度の違いとどのような関係にあるのかを検討することができると考えられ、運動分析と体感の照合が今後の課題として残された。

#### IV、体感研究の現代的意義

筆者は「ダンスはコミュニケーション」という立場から身体運動と感情の連合をみるには、「体感」からの視点が必要であることを主張してきた。この主張自体に、体感研究の一つの意味がある。

一方でそのような研究を進め、他方で学校教育における正課や課外の舞踊教育や保健室登校の生徒への舞踊教育とともに、精神病院に入院中の患者さんと舞踊の活動を実践し、また研究プロジェクトのメンバーの一人である西は更に心身に障害をもつ子どもたちと舞踊の活動を実践し、それぞれの成果とその意味について研究を進めてきている。例えば、精神病院に入院中の無為自閉の患者さんがダンスのセッションに参加するようになって、表情やからだの動きが現れ、そこから感情が感じられるようになったことが主治医によって報告<sup>9</sup>され、また障害のある子どもが鳥の羽ばたきをイメージすることによって、本来滑らかに動かないはずの腕が、弧を描くように滑らかに動くようになったこと<sup>10</sup>などを成果の一例としてあげることができる。

このような心身に障害を抱えた人々との実践を通して、舞踊運動の実践が身体と感情を目覚めさせ、またスムーズな動きにつながっていくことが少しずつではあるが明らかになってきている。換言するならば、実際に踊りつつ、その舞踊運動の感じをからだで感じる、即ち「体感」の体験が無為自閉の患者さんの感情を目覚めさせたのである。

無為自閉の患者さんの踊りに感情の表れを認めた医師が感動するのはなぜか。そして、筆者らが質の異なる舞踊運動ということ念頭において舞踊の指導をするのはなぜだろうか。

このことを考えることが舞踊運動における「体感研究」のもう一つの意義である。そのためには人間にとって「感情」とは何か<sup>1</sup>を問わなければならない。心理学者の濱らによれば、名著『人及び動物の表情について<sup>11</sup>』を著わしたダーウィンを改組とする「進化論学派」の研究者たちは、「各感情は人間が生存していく上で必要であるため、進化の過程を経て残ってきたものである」と考え、濱<sup>12</sup>らはこの考えを推し進めると「感情は普遍的なものであり、その感情により生じる表出およびその解釈は各民族、各文化に共通の要素をもつと考えられる」と言う。

感情が人間の生存上、不可欠だとすると、無為自閉の患者さんに感情の表れを認めた医師が感動するのは、感情の表れに患者さんの「生きる力」の回復の兆候を感じ取るからであるだろう。そして、踊るという体験の累積は、感情の表れにとどまらず、日常的行動にも変容をもたらすようになり、そのことは、多様な感情を体感し表現することが人間らしい生き方に繋がっていると考えられる。

「生きる力」は文部科学省が新学習指導要領で目指すものであり、「これからの変化の激しい社会を生き抜くために、学校を出たあとも生涯学び続けていく上で基礎となる力<sup>2</sup>」である。

---

<sup>1</sup>心理学における感情を巡る論議では、基本感情は研究者によって基本感情という考え方そのものに、また基本感情の数、内容の捉え方も多様である。その中で、進化論学派は基本感情説を唱え、例えば、プルチックは「感情は進化という観点から考えるべきであり、現存する種のもつほとんどすべての特性は、生存していく上で何らかの価値をもっている。もし価値のない特性があったとすればそれは自然淘汰されていく」という考えのもとに感情の立体構造モデルを提示している（『感情心理学への招待』p34）が、研究者によって基本感情の数、内容ともに異なっているのが現状である。以上のように基本感情を特定することは困難であるが、我々の生存にとっては複数の感情が不可欠であることはわかる。

<sup>2</sup> 「生きる力」

これからの変化の激しい社会を生き抜くために、学校を出たあとも生涯学び続けていく上で基礎となる力。当然「学力」もあり、豊かな人間性や健康・体力もある。子どもたちが生涯を通じて自ら考える力を育むためには、知識や技能に加えて、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含めた「確かな学力」必要。 文部科学大臣 河村建夫

現代は、精神的に病んだ人のみならず、多くの大人や子どもがストレスや不安を抱え、それが不登校というような形に表れている。それは「生きる力」が弱体化していることを意味していると言え、その原因の一つとして、バーチャルな体験や体験の認知が、体験的認知を、そして体感を隅に押しやるような社会環境を挙げることができるだろう。昨今、各メディアで「体感」という言葉がとりあげられていることを既に述べたが、マスメディアは「生きる力」の回復を「体感」という言葉にこめていると言えるのではないだろうか。

舞踊運動の体感による感情の回復、このことは、舞踊の実体験が生きる力をもたらすことを意味し、そこから、生きる力を育むためには、舞踊においてどのような体感の体験が必要であるのかを探求するという課題がもたらされる。

この課題に取り組もうとする時、これまでの動きの感情価に関する研究の成果が生きてくることは言うまでもないが、残された課題も多い。

筆者はこれまで、松本の7motivesを手がかりにして舞踊表現の指導や研究を行ってきたが、7motivesは、舞踊経験の浅いものには必ずしもふさわしい舞踊運動ではないこと、また、自らが踊る舞踊表現の指導にあたっては、「みえ」から捉えた感情価に基づくのだけではなく、舞踊運動を行う者自身の体感による感情価から舞踊運動の特性を明らかにし、その特性に基づいた指導が不可欠であると考えられる。

また、多様な感情のうち、舞踊運動で体感することがふさわしい感情はどのようなものであるのか、またそのような感情を体感できる舞踊運動の特質はどのようなものであるのかという点、そしてそれらは年齢や舞踊経験、或いは障害の有無によって相違があるのか、あるとしたらどのような相違なのかを体系的に解明していく必要がある。

このように舞踊における体感研究を体系的に進めることは、生きる力を育む舞踊活動を、その対象者に応じて豊かに展開していくための源となると考える。

【文献】

---

- <sup>1</sup>柴真理子；感性情報の抽出に関する基礎的研究①体感による運動の感情価-舞踊熟練者を対象に  
平成8年度ATR受託研究報告書. PP. 1-14. 1996. 3.
- <sup>2</sup>松本千代栄・川口千代；動きの感情価に関する研究. 東京教育大学体育学部紀要 第11巻  
pp. 66-75. 1972
- <sup>3</sup>松本千代栄；舞踊研究：課題設定と課題解決学習Ⅱ-運動の質と感情価日本女子体育連盟紀要  
'87-1, pp. 53-89. 1987
- <sup>4</sup>柴真理子；感性情報の抽出に関する基礎的研究①みえと体感による舞踊運動の感情価-踊熟練者  
と未熟練者を対象に-平成9年度ATR受託研究報告書. PP. 1-12. 1997. 3.
- <sup>5</sup>柴真理子；体感による舞踊運動の感情価-舞踊経験の浅い学生を対象に-ITE Technical Report  
VOL. 21, NO. 28 pp. 37-42 1997. 5
- <sup>6</sup>Mariko Shiba；“Extraction of Kansei Information in Dance Movements,”  
Proceedings , ATR Workshop on Virtual Communication Environments  
-Bridges over Art/Kansei and VR Technologies- pp. 68-88 1998.
- <sup>7</sup>柴真理子；体感による動きの感情価 ～舞踊経験者と未経験者の比較：神戸大学発達科学部研  
究紀要 第10巻第2号 pp.173-181 2003. 3
- <sup>8</sup>辻三郎編；『感情の科学』サイエンス社 1997.
- <sup>9</sup>柴真理子・田中朱美；精神病院入院中の患者に対するダンスセラピーの展開とその検討：人体  
科学第2巻第1号 pp. 37-47, 1993. 4
- <sup>10</sup> 西洋子・柴真理子；身体表現活動の場での共振の発現可能性：表現文化研究第1巻第1号  
pp. 23-30, 2001. 11
- <sup>11</sup> Darwin, C.; The expression of the emotions in man and animals. Chicago: University of  
Chicago Press. 1965
- <sup>12</sup> 濱治世・鈴木直人・濱保久『感情心理学への招待』サイエンス社 2001

## 舞踊運動の体感からみた基本感情の検討

塚本 順子(天理大学)  
原田純子(大阪女学院短期大学)  
猪崎弥生(中京女子大学)  
西 洋子(東洋英和女学院大学)  
柴真理子 , 前田正登, 小高直樹(神戸大学)

### 1, 研究目的

この研究は、「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」というテーマに基づく一連の研究の中に位置するものである。共通するキーワードは「体感」であり、舞踊運動と感情の関連を「体感に」照らし合わせて探る、つまり舞踊運動の体感から得られた基本感情を設定しようというのが本研究の目的である。鑑賞者が捉えた舞踊運動と感情の関連と、踊り手が体感した舞踊運動と感情の関連を比較検討することは、人間同士のコミュニケーション機能を探ることや、身体と感情の統合あるいは人間性の豊かさにつなげていく試みなどということから考えても、様々な分野にとって非常に意義のあることだといえる。

### 2, 研究方法

#### (1) 対象とする舞踊運動の設定

松本の 7 motives の 42 語と、柴らのこれまでの研究で得られた感情語に基づいて作成された 24 の舞踊運動の合計 31 について、舞踊家（石川氏：各種コンクールに入賞）に踊ってもらいその体感を得た。その体感の記述と 4 人の舞踊研究者での討議により、20 の舞踊運動に絞り、今回の実験材料とした。

(24 の舞踊運動は、「移動－伸びる－縮む－回る」という一連の運動を基本に、24 の感情語それぞれにふさわしく時間性、空間性、力性を 24 の変化させることによって作成した。)

表 1. 20 の舞踊運動

M1. 力強い	M2. やさしい	M3. むなしい	M4. 激しい	M5. 明るい
M6. 粘った	M7. 鋭い	M8. 大きい	M9. 静か	M10. 楽しい
M11. 嬉しい	M12. 暗い	M13. こわい	M14. 苦しい	M15. 厳かな
M16. 悲しい	M17. 喜び	M18. 嫌悪	M19. 固い	M20. 攻撃的な

#### (2) 体感評価実験

これら 20 の舞踊運動を舞踊経験のあるダンス部の学生 16 人に踊らせ、その体感の記述を求めた。手順としては、初めに全員でビデオを師範として振り覚えさせた後、練習を行ない、一人ずつ踊りすぐその場でその体感の記述を求めた。その体感とは、それぞれの舞踊運動を踊った時に感じられるものを感情語 5 つ以内で記入することを求めた。

#### (3) 結果の処理

それぞれの舞踊運動は、運動者にどのように感じられたのかについて統計的処理を行ない検討した。統計処理には SPSS11.5J,Categories を用いた。それぞれの舞踊運動の体感から得られた感情語の親近性を見る為にクロス分析を行なった。

### 3. 結果と考察

#### (1) 2グループに分類された感情語

図1に示したように、今回の20の舞踊運動は統計学的に大きく分けて2グループに分かれることが読み取れた。

第1グループはM15.厳かな, M9.静かな, M8.大きい, M2.優しい, M5.明るい, M10.楽しい, M11.嬉しい, M17.喜びが含まれる。

第2グループはM3.むなしい, M6.粘った, M12.暗い, M13.こわい, M16.悲しい, M14.苦しい, M18.嫌悪, M1.力強い, M4.激しい, M7.鋭い, M20.攻撃的な, M19.固いであった。

これらを見てみると、第1グループは明るい快感情のものであるのに対して、第2グループは暗い不快感情のグループであると考えられる。統計上からみても、人間の大きな対極の感情に2分されたといえる。

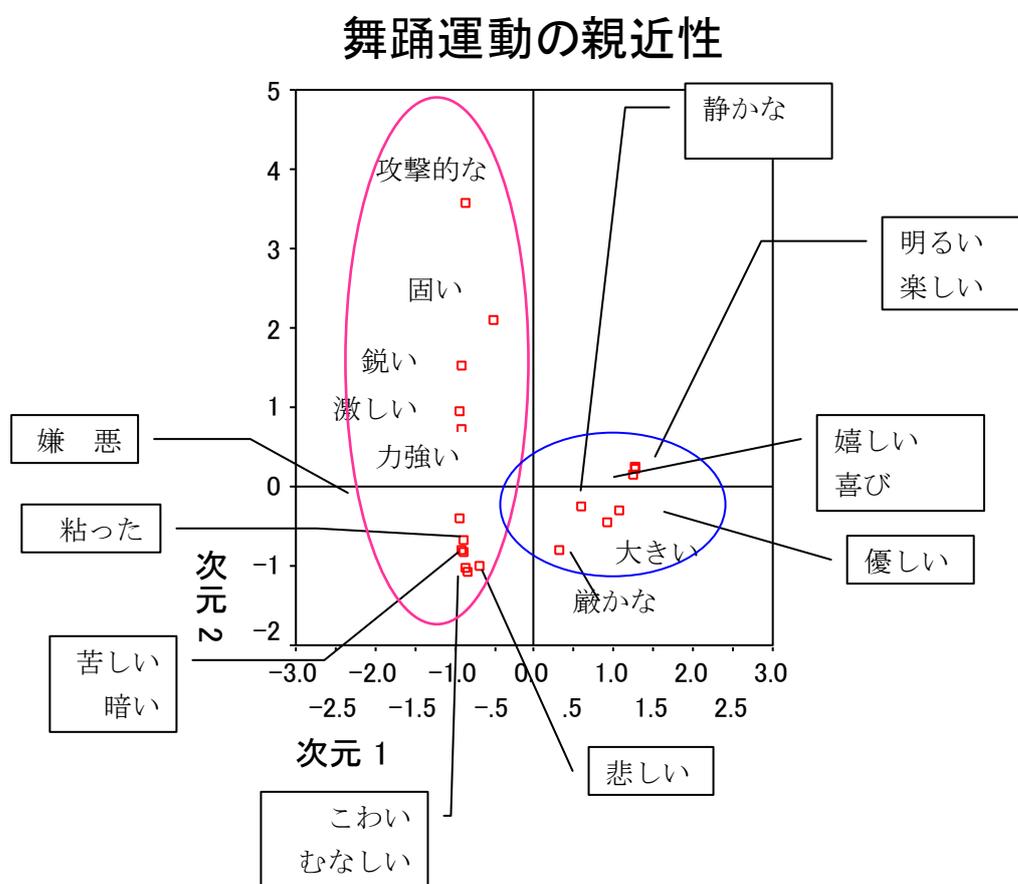


図1. 舞踊運動の親近性

#### (2) 第1グループ内の感情語と舞踊運動の近親性

さらに第1グループ間でのこれらの感情語と舞踊運動の近親性を見る為、コレスポネンス分析をおこないその結果を示したものが図2である。これをみると、M5.明るい, M10.楽しい, M11.嬉しい, M17.喜び間で近親性があり, M2.優しい, M8.大きい, M9.静かな, M15.厳かなのそれぞれについては独立した要素だと読み取れる。つまり、第1グループ間でみると、5グループにわかれるといえる。

次に、感情語についてみてみると、図3に示すように楽しい・心が弾む・明るい・軽やか・かわいい・包み込む等の感情語が近く、穏やか・浮遊感・開放感が近いことがわかった。

これらがどのような要因によるものかについて検討した結果、第 1 次元では興奮と沈静の対極の要素が、第 2 次元では弛緩と緊張の対極の要素がこれらの要素の近親性を決定する要因ではないかと考える。

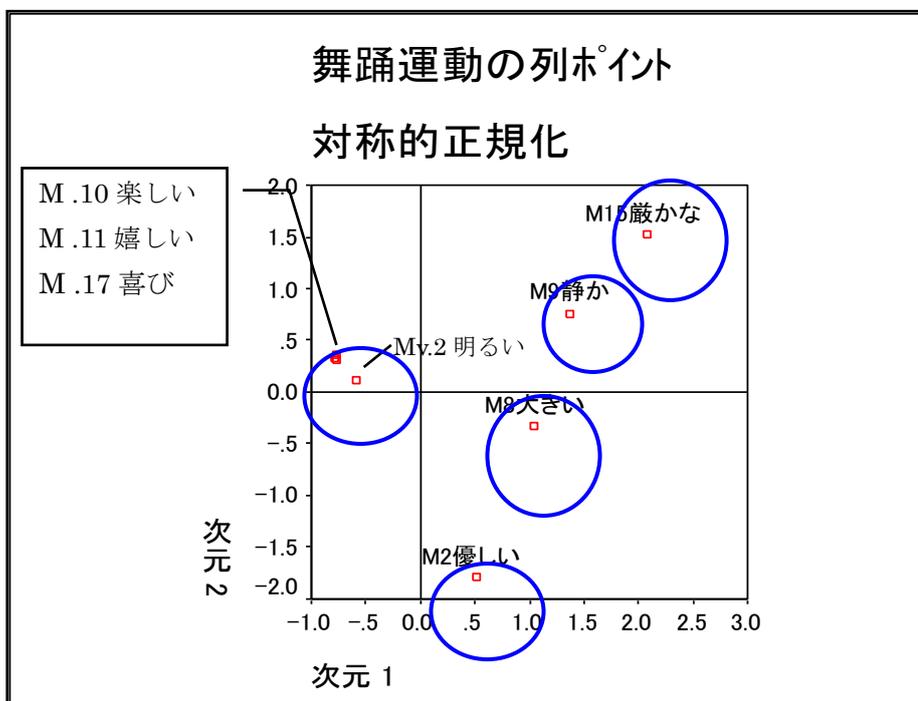


図 2. 第 1 グループの舞踊運動の親近性

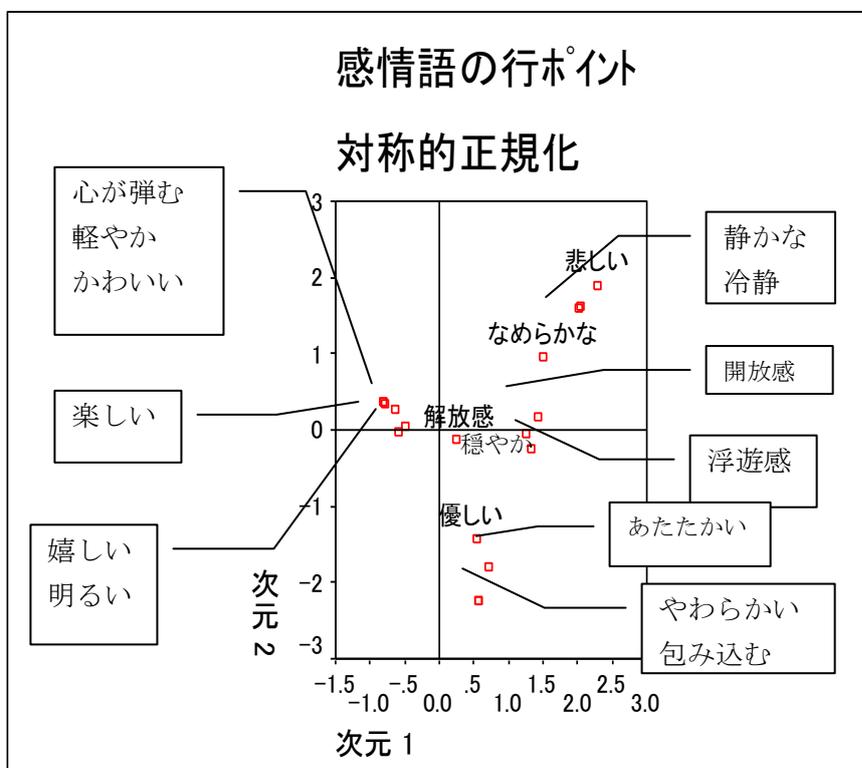


図 3. 第 1 グループの感情語の親近性

(3) 第 2 グループ 内の感情語と舞踊運動の近親性

第 2 グループ 間での舞踊運動の近親性を見る為、対応分析により示したものが図 4 である。これをみると M12.暗い, M3.むなしい, M16.悲しい, M13.こわい, M14.苦しい, M6.粘った, M18.嫌悪が 1 グループとして, M1.力強い, M4.激しい, M7.鋭いがもう 1 グループとして, M20.攻撃的なと M19.固いというとおおよそ 3 グループに分類されることが考えられる。

次に図 5 に示したように, 感情語については, 速い・切る・強い・激しい・怒り・憎い等の感情語が近くにあり, もがく・暗い・痛い・悲しい・苦しい・切迫感等が近くにあることがわかった。

これらがどのような要因によるものかを検討した結果, 第 1 次元では弛緩と緊張の要素がかかり, 第 2 次元では興奮と沈静の要素がそれぞれの近親性を決定していると推察する。

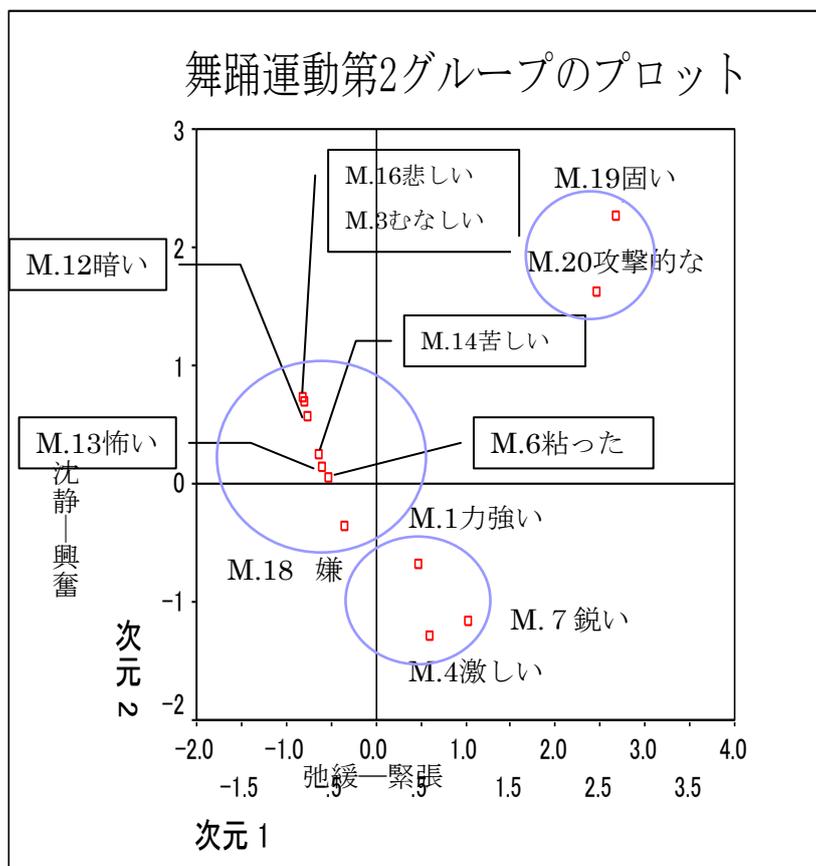


図 4. 第 2 グループの舞踊運動の親近性

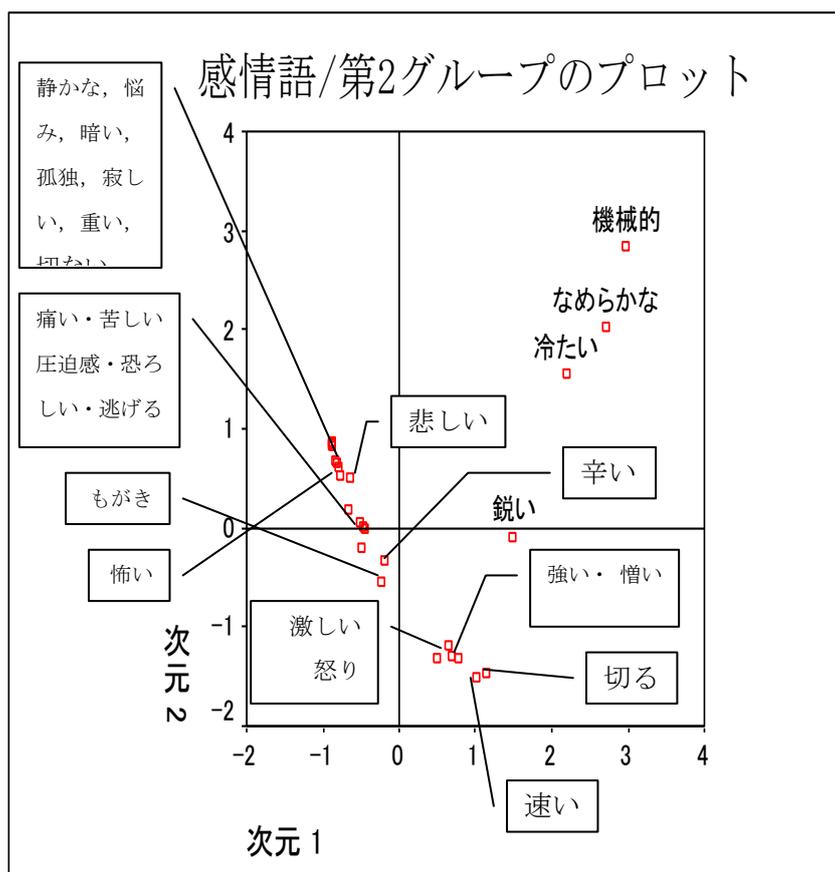


図 5. 第 2 グループの感情語の親近性

#### 4.まとめ

以上の結果から、今回の研究で設定した舞踊運動は 8 つの異なる感情群の性質を有するグループに分類できることが、統計学的に明らかとなった。この研究では、先の研究で発表した体感による舞踊運動の感情価の関係に関する一連の研究の中に位置づくものである。本研究では、舞踊運動を体感したことからどのようなものが感じ取られているのかを明らかにすることで、舞踊運動における基本感情を設定することが目的であった。結果として今回の研究で設定した舞踊運動が 8 つのグループに分類でき、つまり舞踊の基本感情として 8 つの感情群を設定することができた。今後はこの 8 グループの感情群と動きの連関について、それぞれに共通して内包される感情的質と動きの質を明らかにすることが、次の課題だと考える。

舞踊はそもそも身体を含む全ての総和として捉えるべきであることはわかってはいるが、あらゆる要素が混在し、経験的には詳細に捉えにくい。仮に、経験的にそれらが捉えられたとしても多くの舞踊教育に携わるこれからの指導者に瞬時に伝えていくのは、困難だといえる。舞踊運動と感情の連関については、多くの人をもっとも関心のあることであるにもかかわらず、松本や柴の研究を除けばほとんどなされていないのが現状である。舞踊を全体的総和としてとらえつつも、ディテールな研究を積み重ねて舞踊に切り込んでいくことが、具体的な実践・指導に役立つと考える。このような視点からそれらを基盤に具体的に教育やセラピーなどのあらゆる分野で実践し、展開していく方法論へとつなげていく研究を継続していきたいと考える。

## 踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察

原田純子（大阪女学院短期大学）

柴 真理子（神戸大学）

塚本順子（天理大学）

### 1. はじめに

創造的な舞踊活動は豊かな感情体験ができる場である。そして、舞踊活動の場で様々な感情体験をすることは、人間として感情を豊かに、また感性豊かに生きてゆくことに繋がると考え、我々は動きと体感に関する研究を重ねている。そこで本研究では、踊る技術の習熟と動きの体感に関する考察を行った。

### 2. 研究目的

本研究の目的はひと流れの舞踊運動を繰り返し練習することによって、踊るときの体感がどのように変化するか、またそれとともに動きの上で何が変化し上達するかを明らかにすることである。そして最初は単なる動きの羅列であったものが、練習を繰り返すうちにひとつの流れを持つ舞踊運動となる過程を捉えることを試みた。

### 3. 研究方法

課題として設定した舞踊運動は、柴他の先行研究によって作成された32種類の舞踊運動の中から、今回の被験者である舞踊経験の浅い学習者にとって、習得が比較的容易であろうと考えられる3つの舞踊運動「大きい」「楽しい」「激しい」である。ただし、本研究では舞踊運動の練習を、通常授業内での課題としたため、日によって出席者の数が異なる等でデータが十分に得られないこともあり、今回は舞踊運動1「大きい」と2「楽しい」を分析の対象とした。

被験者は神戸大学発達科学部・舞踊系運動方法論実習の2単位目を受講している学生（大学2年生）15名である。舞踊運動の練習と記録は、ビデオを師範として振り覚え後に、15分の練習をし、その後ひとりずつ踊り、その動きをビデオに収録した。学習者は、踊ったすぐ後に感情語で体感を記録した。実施期間は2002年10月10日～11月17日である。

### 4. 分析方法

#### 4.1. 踊る技術の習熟度の評価

表1：踊る技術の評定尺度

得点	評価の観点
1	動きがひとつずつバラバラで踊りとしてのまとまりがない
2	踊りとしての流れは見えるが、少々まとまりに欠ける
3	動きがひとつの流れをもち、踊りとしてまとまっている
4	ひと流れの動きを自分の間 <sup>注1</sup> で踊ることができる
5	動きのテクニックを超脱し、踊りの中で自分の個性を表現できる

まず『踊る技術の習熟』についての評価は、「運動がひとつの流れをもって、舞踊運動としてつながっている」ことを基準の3点とし、5段階で評価した（表1）。評価はビデオを見て、舞踊研究者4名による合議により行った。『ひと流れの動きを持つこと』を基準点3として評価を行なったのは、本授業が、ひ

とつひとつの運動技術の向上，つまり高く跳べるとかつま先が伸びているということの上達よりも，舞踊運動として全体の表現感をつかみ，それをひと流れのまとまりを持って動くことを目的としていたためである。

#### 4.2. 感情語の変化と舞踊運動の習熟の関係についての統計的処理

踊った後に記録した体感の感情語を，舞踊運動との近さを見るためにコレスポンデンス分析により統計処理を行なった。

#### 4.3. ふりかえりの記述の分析

授業の一番最後に学習者（被験者）が記録した体感の変化に関する「ふりかえり」の記述を KJ 法にて分類，整理し，分析した。

### 5. 結果と考察

#### 5.1. 舞踊運動の習熟

##### 5.1.1. 舞踊運動「大きい」の評価

表 2：舞踊運動「大きい」の評点の変化

被験者	1回目	2回目	3回目
M1	4	4	3
M2	4	4	4.5
M3	2	3	3
M4	2	3	3
M5	2	3	3
M6	3	3	3
M7	2	1	2
M8	3	3	3
M9	2	3	4
M10	2	2	3
F1	2	2	3
F2	2	3	3.5
F3	3	3	3.5
F4	3	3	3
F5	2	3	3

4名の舞踊研究者が評価した舞踊運動「大きい」の習熟（得点の変化）は，表 2 および図 1 に示す通りである。これを見ると，練習を重ねても習熟が見られないと評価されたのは2名（M1とM7）で，そのほかの被験者は練習を重ねるに従って，動きにまとまりがみられるようになっていた。

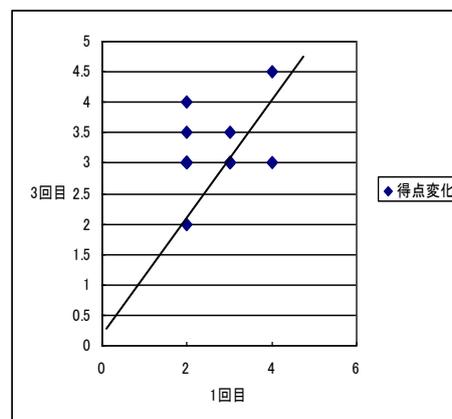


図 1：舞踊運動「大きい」の評価得点散布図

表 3：舞踊運動「楽しい」の評点の変化

被験者	1回目	2回目	3回目
M 1	2.5	3	3.5
M 2	1	2	2
M 3	2	3	3.5
M 4	2	2.5	2
M 5	2	3	3.5
M 6	1	2	2
M 7	2	3	3
M 8	2	3	3
M 9	1	2	2.5
F 1	1	2	2
F 2	1	3	3.5
F 3	2	3	2
F 4	3	3	4
F 5	3	3	3.5

### 5.1.2. 舞踊運動「楽しい」の評価

同様に、表 3 および図 2 に舞踊運動「楽しい」の得点変化を表した。1 回目から 3 回目の得点変化が、1 点から 2 点が 3 名、2 点から 3 点が 2 名、2 点から変化なしが 2 名いたので、プロットされている点は 9 点である。

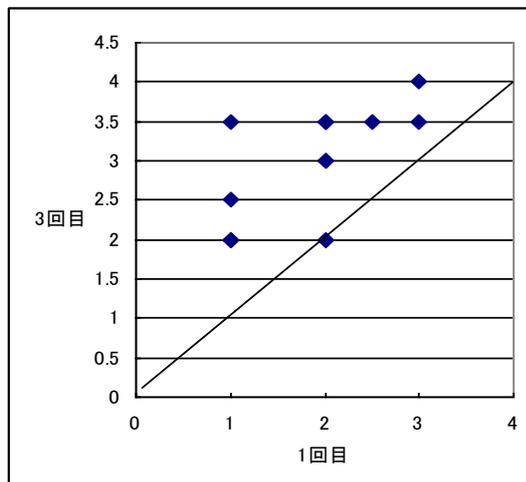


図 2：舞踊運動「楽しい」の評価点の変化散布図

この舞踊運動の最初の振りはスキップで比較的容易であろうと考えて設定したが、回転しながらスキップすることと、そこに腕の動きをつけることが難しく、全体的に脚と腕の動きの共応が滑らかでなかった。また、それに続くジャンプをリズムよく行なうのが難しかったようで、1 回目はほとんどの被験者が 3 点に達していない。練習を重ねることで、このジャンプのリズムはつかめるようになってきているが、スキップの際の腕の動きに不自然さがあるために、全体として自分のリズムで踊れるというところまでは達していなかった。したがって、脚と腕の動きを共応させ、ひとつの流れをもって踊るにはさらなる練習の積み重ねが必要と考えられる。

以上より、運動の技術がある程度身についた後に、踊りの質感を捉えて、舞踊運動としてひとつの流れをもって踊ることができるようになるのであろうことが推察される。

### 5.2. 感情語の変化と舞踊運動の習熟の関係についての統計的処理

次に、踊った後の体感として記録した感情語については、舞踊運動 1「大きい」では 1 回目に 38 語、2 回目に 28 語、3 回目に 45 語の感情語を得た。それをコレスポネンス分析により、舞踊運動との近さを見たものが図 3 である。

これを見ると 1 回目では大まかに「ゆったりとした」動きの感じを捉えているが、2 回目には「楽しい」という少し質の異なる感情が体感されていることが分かる。これについては、1 回目は師範のビデオを見た時の印象に影響されて運動の大まかな特徴を捉え、2 回目は動きができたことに対する「楽しさ」が表れているのではないかと推測した。3 回目に至ってようやく「伸びやか」「やわらかい」といった、この舞踊運動から期待した感情が体感されている。

このことから、舞踊経験の浅い学習者においては、さらに練習を積み重ねることで体感の深まりを得、動きが変化していくのではないかと推察した。

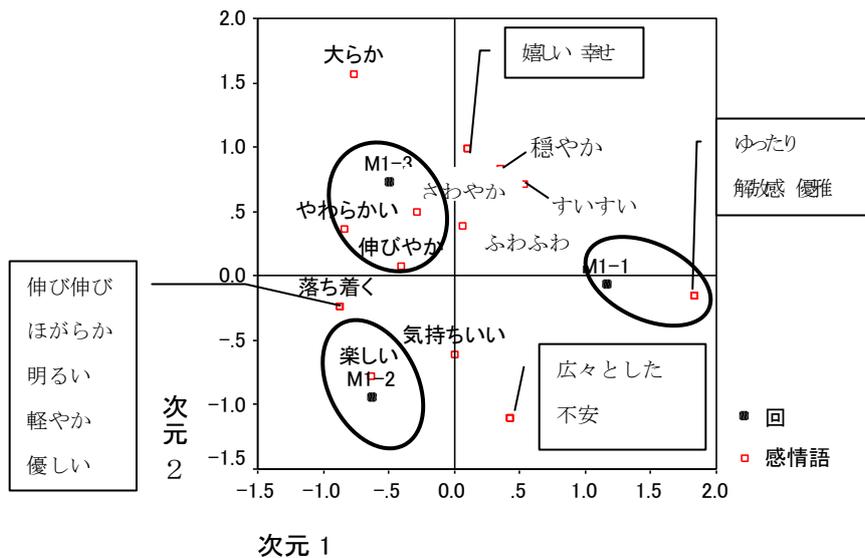


図 3：舞踊運動「大きい」と感情語の親近性

次に舞踊運動 2「楽しい」の感情語は、1 回目に 27 語、2 回目に 40 語、3 回目に 42 語であった。感情語と舞踊運動の布置図を図 4 に示した。

この運動では、いずれの回も被験者の 3 分の 2 が「楽しい」という感情語を書いているが、統計的に処理すると 1 回目では近くに位置する感情語がなく、2 回目になって「軽やか」「さわやか」「ふわふわ」「躍動感」などの語が近くに位置していることが分かる。そして、3 回目で運動のもつ本来の質感として「弾む」感じが体感されている。

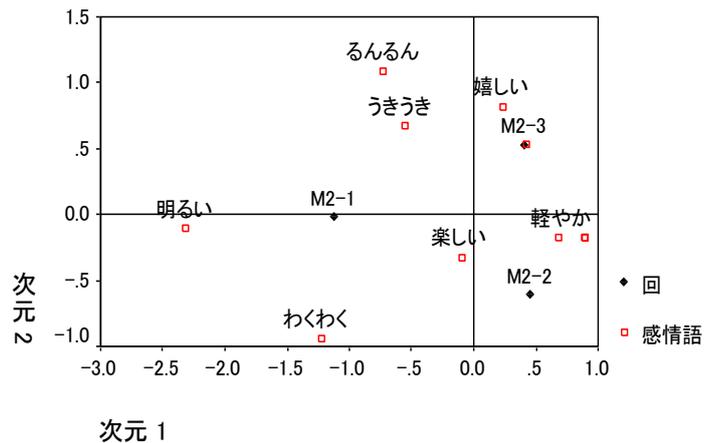


図 4：舞踊運動「楽しい」と感情語の親近性

1 回目で体感が特定されないのは、先の動きの評価でも出てきたように、舞踊運動そのものの振りの難しさが原因ではないかと推察する。この舞踊運動においてもまた、まずは、振りを大まかに自分のものにしてから、体感を深めるという段階的な習熟の過程が読み取れるといえよう。

### 5.3. 「ふりかえり」の記述の分析

最後の授業において被験者が記録した「体感についてのふりかえり」の記述を KJ 法にて整理分類した。記述総数は 52、被験者 15 名分であった。

これらの記述から、最初は舞踊運動を単独の動きの羅列として認識していたものが、練習を重ねるにしたがって、動きの流れを意識するようになっていく変化が読み取れた。また、自分が考えたり感じたりしたイメージを動きにする難しさを感じながらも、舞踊運動を繰り返し練習することで、それが動きに現れるようになってきたり、さらに自分の周りの空間を意識して動けるようになったと感じている被験者もいた。さらに、自分の気持ちや感情を動きの中に投じたり、呼吸を

意識して踊ると気持ちよく踊ることができるというような気づきも見られた。なかには、模範の動きを超えて独自の動きに発展させる楽しさを記述している被験者もあり、多くが舞踊運動で自分自身を表現することの楽しさを見出していた。

練習を重ねたことについては、「自分の中にある感じが変化していくことがよく分かった」や、「練習の積み重ねによって自己表現ができるようになることは同時に、自分自身に素直に耳を傾ける作業であると感じた」と記していた。

## 6. 結論

以上 3 つの側面から、舞踊運動の習熟と体感の変化を捉えたが、その習熟過程を、図のような段階モデルで想定した。練習を重ねるにしたがって体感がより確かなものとなり、そのことがまた舞踊運動の習熟につながっていくという段階的な習熟過程を想定したものである。

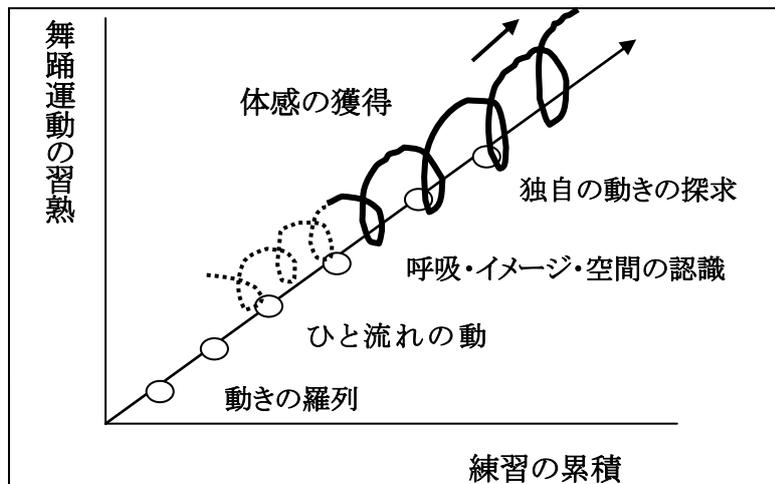


図 5：舞踊運動の段階的習熟と体感に関する想定モデル

このような舞踊運動の段階的習熟を念頭に、実際の授業場面において、舞踊経験の異なる学習者に対して課題設定を行なうとすれば、初心者に対しては簡単な舞踊運動から、また舞踊経験が豊かな学習者に対しては少し難しい課題から取り組むことによって、舞踊運動を単なる動きの羅列として踊るような動きのテクニクに偏重するのではなく、どのような学習者においても十分に体

感を得ながら独自の表現を追及する段階を辿り、踊る技術を習熟させていくことが可能ではないかと推察した。

今回は、3回の練習と収録に留まったが、この段階的習熟を仮説として、練習をもっと長期間繰り返してゆくと、動きがどのように変化していくのか、また学習者がどのように成長してゆくのかを探ることは今後の課題であり、研究を継続中である。

## 同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について

柴真理子，米谷淳（神戸大学）

坪倉紀代子（十文字学園女子大学）

山田敦子（高知大学）

### 1. はじめに

筆者らが科学技術研究補助金の交付<sup>1</sup>を受けて「舞踊運動の習熟と体感による感情価の関係」をテーマに研究を継続している。そこでは、舞踊運動における基本感情を検証して、それらの基本感情を表す舞踊運動を作成し、踊る技術の習熟とその舞踊運動の感情価の体感との関係を明らかにし、今後の舞踊の指導に資することが目的である。

第 55 回舞踊学会大会において、柴らは、この研究の一環として「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討<sup>1</sup>」と「踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察<sup>2</sup>」及び、舞踊運動の物理的特性を捉える方法を探って「DLT 法による舞踊運動の 3 次元動作解析」の 3 つの研究発表を行った。

そこでは、運動者の体感から、8 つの異なる感情群の性質を有するグループに分類できることが統計学的に明らかになり、また、舞踊経験の浅い学生に、日にちを変えて、同じ舞踊運動を踊ることを 3 回求めた結果、踊る技術が段階的に変化し、それに伴って体感も変化していくことが認められた。

これらの結果を踏まえて、8 つの基本感情を設定して、それらの基本感情を内包する舞踊運動を創り、また、6 つの語群からなる舞踊運動の感情チェックリストを作成<sup>3</sup>した。

本研究ではこれらの舞踊運動とチェックリストを用いて、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによって、体感がどのように変化していくか、そのプロセスを明らかにすることが目的である。

### 2. 研究方法

本研究は、最終的には舞踊教育やダンスセラピーなど、舞踊指導に資することを意図している。そこで、学生による体感評価実験は、神戸大学発達科学部の舞踊系運動方法論実習 I の授業内容の一つとして実施した。学生には、1 回目のオリエンテーションで授業の進め方について説明をし、実験を含む授業になることへの了解を得ている。

#### 2.1. 体感評価実験

##### 2.1.1. 被験者および実験日時

被験者；神戸大学発達科学部舞踊系運動方法論実習 I の履修学生 2 回生 13 名<sup>2</sup>（m6 名，f7 名）

実験日時；平成 16 年 5 月 27 日，6 月 3 日，10 日，17 日，24 日の 5 回。

舞踊系運動方法論実習 I の第 5 回目から 9 回目までを体感実験にあてた。なお、全体の授業内容は以下の通りである。

<sup>1</sup> 基盤研究 B（2）課題番号 15300213

<sup>2</sup> 受講生は 17 名であったが、全回出席した学生のデータを対象とした。

### 授業内容

- 1, ・太陽への祈り 舞踊運動課題<大一小> ビデオ撮影・鑑賞
- 2, 舞踊運動課題<走る―止まる><押す―引く>3 組で見せ合い一言プレゼント
- 3, 舞踊運動課題<走る―跳ぶ―つかむ> ビデオ撮影・鑑賞  
\* <踏む―とびだす> (来週の自習の為に)
- 4, イメージ課題<花火>自習 ビデオ撮影・鑑賞
- 5, 体感による3つの舞踊運動の感情価(以下体感実験) 1 回目  
・分析用ビデオ撮影
- 6, ①体感実験 2 回目・ビデオ撮影 ② <風> 回り方・走り方
- 7, ①体感実験 3 回目・分析用ビデオ撮影  
②舞踊運動 1 の体感からデッサン ビデオ撮影・鑑賞
- 8, ①体感実験 4 回目・ビデオ撮影  
②舞踊運動 2 の体感からデッサン ビデオ撮影・鑑賞
- 9, ①体感実験 5 回目・分析用ビデオ撮影  
②舞踊運動 3 の体感からデッサン
- 10, 舞踊運動課題<離れる―寄る> 連手で, 手を離して
- 11, 個人創作 自習
- 12, 個人作品の発表と評価 ・ビデオ撮影

#### 2.1.2. 実験材料

「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討」の結果を踏まえて作成した8つの舞踊運動（やさしい・楽しい・激しい・力強い・大きい・悲しい・固い・静かな、を想定）の中から、快不快感を代表する「楽しい」「悲しい」を想定した舞踊運動と、それらの舞踊運動との舞踊運動の特性の異なりという観点から「怒り（激しい）」を想定した舞踊運動を、本実験の実験材料として選択し、それらの舞踊運動を「舞踊運動1（怒り）」「舞踊運動2（悲しい）」「舞踊運動3（楽しい）」と呼ぶことにした。なお、この実験材料の踊り手は、舞踊家であり、それをVTRに録画したものを呈示刺激とした。

#### 2.1.3. 実験手順

舞踊運動がどのように変わるのかを物理量の変化として捉え、今後、人間の行う評価をその物理量の変化と照合することにより、舞踊運動の変化を多面的に捉えるために、本実験では、5回の実験のうち、1回目、3回目、5回目には、一般のビデオカメラでの撮影に加えて、DLT法による舞踊運動の3次元動作解析用に、被験者の舞踊運動を4台のカメラで撮影した。

動作分析用の撮影を行う当日は、事前に4台のカメラの設定をはじめとして撮影条件の整備を行い、事後にキャリブレーションを行った。

第1回目には、被験者にこの実験の意図、体感の説明、体感評価の方法について説明を行った。動作解析用の撮影を行う日には、被験者は、動作解析用撮影のために必要とされる部位にマーキングを行った。

第1回目は、ビデオで「舞踊運動1」をみて、学生がビデオをみずに自分で踊ることができるまで練習を行った。全員が踊ることができるようになった時点で練習を止め、ひとりず

つ順番に踊ることを求め、それを撮影した。その際、他者の踊りをみたりしないように指示し、被験者には自分自身の踊りに集中するように指示した。被験者は踊り終わった後（撮影が終わった後）に、体感評価を行った。第 1 回目は、初めての舞踊運動なので、被験者全員が「舞踊運動 1」の体感評価を終えてから、「舞踊運動 2」を全員一緒に練習するというように進めた。

第 2 回目からは、「舞踊運動 1」の体感評価を終えた被験者は、ビデオで「舞踊運動 2」をみて、ビデオをみずに自分で踊ることができるまで練習を行い、順番に体感評価を行った。

#### 2.1.4. 体感評価の方法

体感評価にあたっては筆者らが作成したチェックリスト<sup>4</sup>を用いた。評価用紙を配布し、被験者には、舞踊運動を踊ってどのような感じがしたか、その体感を筆者らが作成したチェックリストから 5 語以内で選択し、選択したそれぞれの語について体感の強さを 4 段階でこたえることを求め、またチェックリストにない体感については自由に記述することを求めた。

また、この体感評価とは別に、毎回の授業記録にも「3つの舞踊運動を踊ってみて気づいたこと」という項目を設け、5回の体感実験が終わった日には「3つの舞踊運動を練習し、毎回、それぞれの舞踊運動の体感を記録してきました。5回反復する過程で、あなた自身は、あなたの動きがどのように変化し、体感がどのように変化してきたと感じるか。できるだけ詳しく書く。」という項目を設けた。そして授業のまとめとして「人間にとっての舞踊の役割と意義」というテーマでのレポートを求めた。

<チェックリスト> \*横に並ぶ 3 語は類似の感情を表すもので 3 語で 1 群を成す。

- |         |          |               |
|---------|----------|---------------|
| 1, 楽しい  | 2, 嬉しい   | 3, 喜び         |
| 4, やさしい | 5, あたたかい | 6, 幸せな        |
| 7, 穏やかな | 8, のびやかな | 9, 優美な        |
| 10, 怒り  | 11, 苦しい  | 12, 怖い        |
| 13, 悲しい | 14, 寂しい  | 15, 冷たい       |
| 16, 厳かな | 17, 神聖な  | 18, 静かな (静謐な) |

#### 2.2. 舞踊運動の変容の評価

繰り返し同じ舞踊運動を踊ることによる同一人の舞踊運動の変化がみられるように、3つの舞踊運動、それぞれについて、一人の被験者の第 1 回目から第 5 回目までの映像をつなぎあわせ、ビデオテープを編集した。舞踊運動の変容の評価は実験者による評価と被験者自身による評価を実施した。

##### 2.2.1. 実験者による評価

評価者；山田敦子，坪倉紀代子

評価の時期；平成 16 年 7 月～9 月

評価方法；山田・坪倉が、それぞれ、第 1 回目から第 5 回目までの映像を連続してみ、そこにみられる舞踊運動の変化を自由記述でとらえた。その結果について 2 人に柴を加えて協議し、

転換点 1 …運動が細切れの状態から流れがでてきた段階

転換点 2 …舞踊運動が自分のものになってきた段階

という 2 つの転換点を設定し、山田・坪倉が改めて映像をみ、この 2 つの転換点をチェックした。

### 2.2.2. 被験者自身による評価

評価の時期；平成 16 年 10 月

評価方法；被験者自身に、各舞踊運動について、被験者の 5 回分をまとめて編集したビデオを見せ、舞踊運動の転換点 1 と 2 について自己評価を求め、更に、「自分の舞踊運動をみて、全体的にどのような変化がみられたか」の記述を求めた。

## 3. 結果と考察

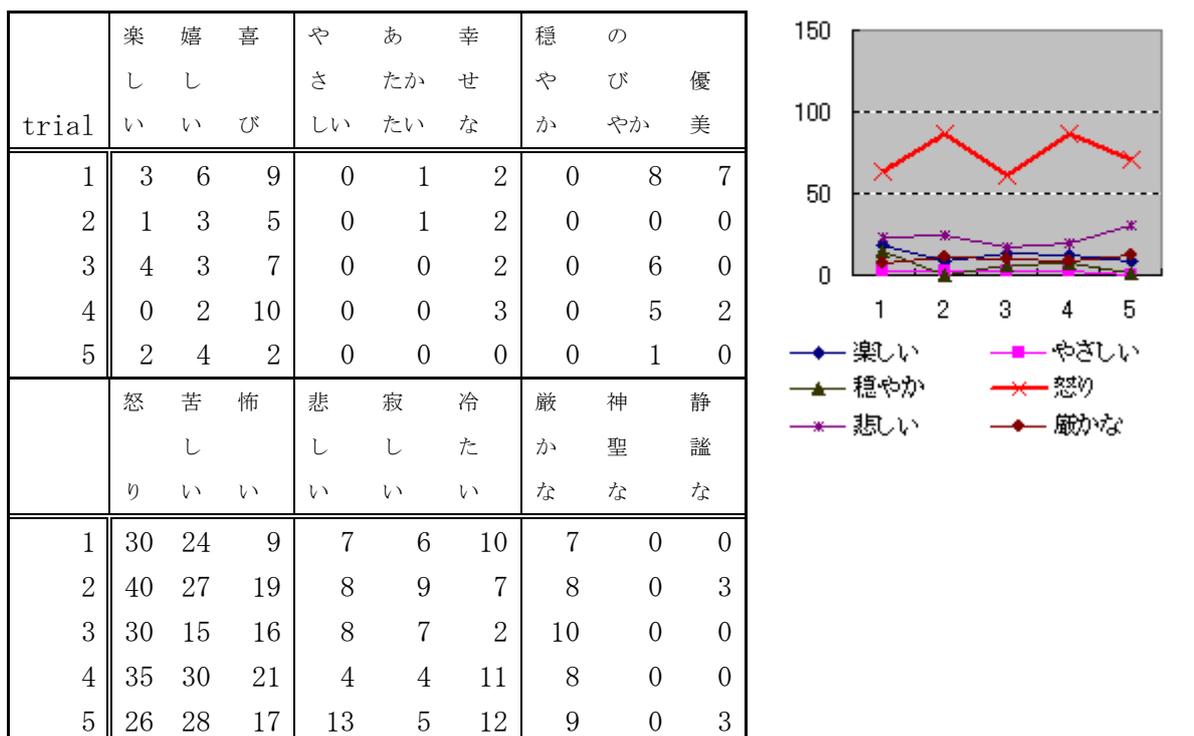
### 3.1. 舞踊運動の体感の変化（感情語選択・強度 4 段階）の変化

#### 3.1.1. 被験者全員の体感の平均的推移

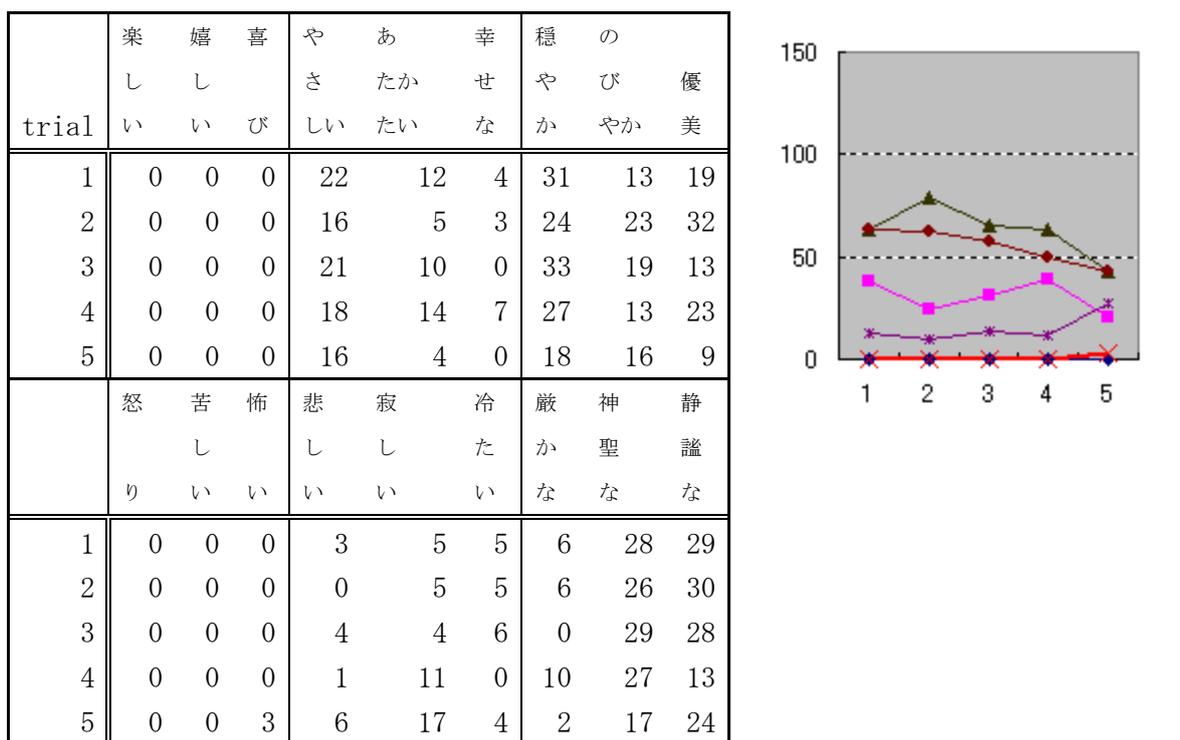
図表 3.1～3.3 に、被験者全員の体感の平均的推移を表した。左側の表には、チェックリストの 18 語それぞれに対する被験者全員の合計得点を示し、右側には 6 つの語群の合計得点をグラフに示した。グラフの縦軸は合計得点を、横軸は実験の回、即ち、1 回目から 5 回目を表す。

これらの表から、舞踊運動 1 は「怒り」「苦しい」「怖い」という体感得点が高く、これら 3 語からなる「怒り」語群の得点が毎回、高くなっており、舞踊運動 1 は体感が「怒り」に集中する舞踊運動であることがわかる。また舞踊運動 3 では「楽しい」という体感得点が高く、それに「喜び」「嬉しい」が続き、これら 3 語からなる「楽しい」語群の得点が毎回、高くなっており、舞踊運動 1 は体感が「楽しい」に集中する舞踊運動であることがわかる。しかし、舞踊運動 2 では、「穏やかな」「優美な」「神聖な」「やさしい」「楽しい」等の体感得点の高さが毎回変動している。また、感情語群でみると「穏やかな」「厳かな」が体感得点が高い傾向にある。このように、舞踊運動 2 は他の 2 つの舞踊運動に比べて、体感が分散していることがわかる。これらのことから、今回実験材料とした 3 つの舞踊運動はそれぞれ異なる体感をもたらす舞踊運動であると言える。

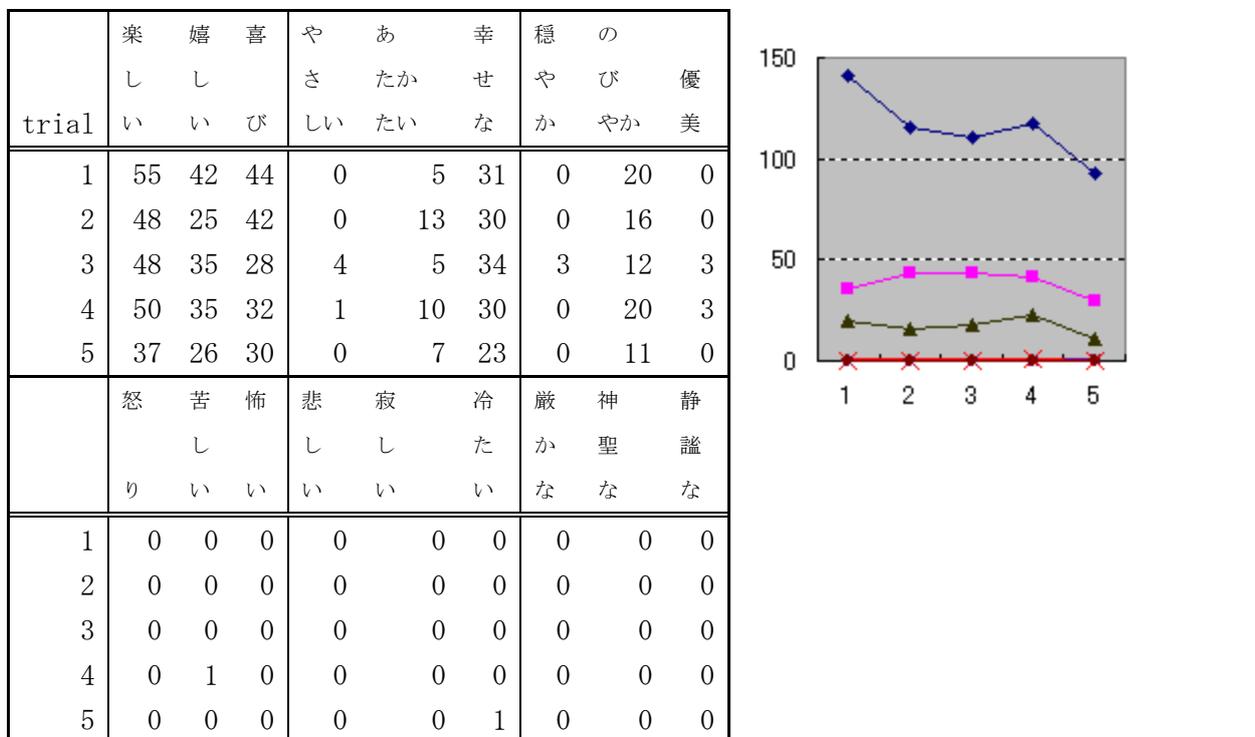
図表 3.1 舞踊運動 1 の得点 (13 名分)



図表 3.2 舞踊運動 2 の得点 (13 名分)



図表 3.3 舞踊運動 3 の得点 (13 名分)

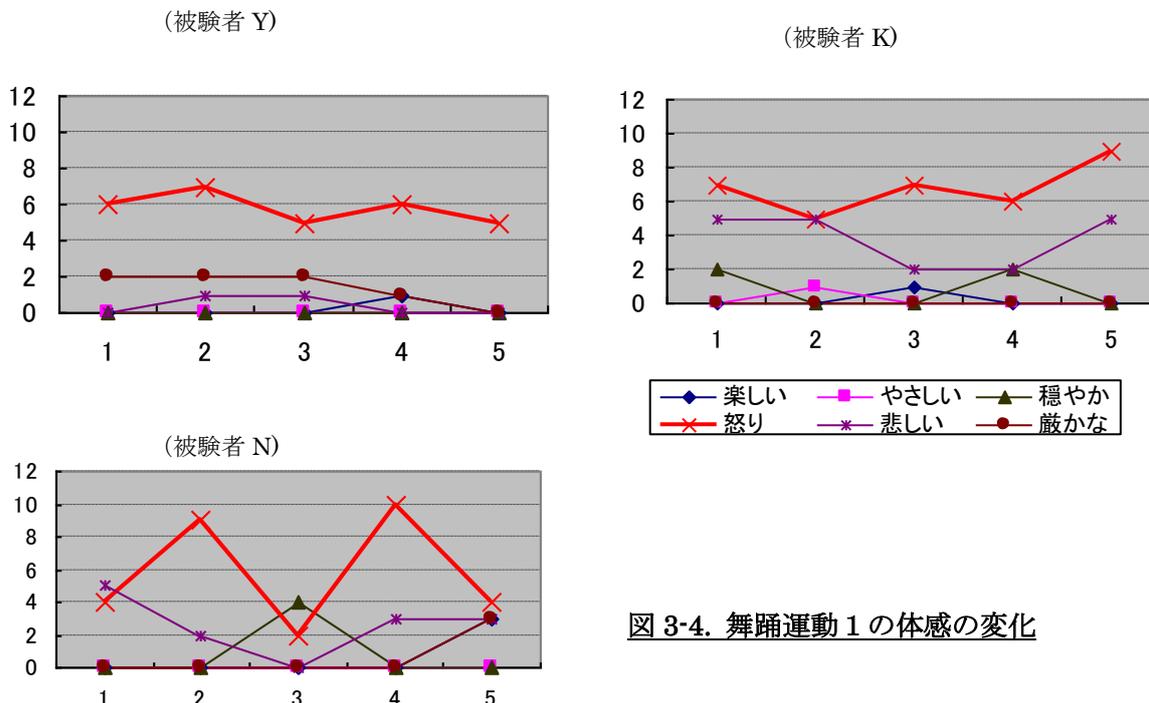


3.1.2. 個人毎の体感の変化

5回の体感評価の過程で、13名の被験者の体感はどのように変化し、またその変化を自らはどのように捉えているのかをみていく。ここでは3つの舞踊運動それぞれについて3名分の体感得

点の変化と、5回の体感実験を終えて「自分自身の動きがどのように変化し、体感がどのように変化してきたと感じているか」に関する記述をとりあげる。

### 3.1.2.1 舞踊運動1について



#### 踊り方の変化

- ・初めは速く激しく踊ることに重点をおいていたので動きが硬かった。しかし回数を重ねるごとに手を伸ばしたり縮めたりする動作は素早くそれでいて大きく分かりやすくすることを意識するようになったし、「静」と「動」のメリハリをつけて踊るようになった (M. Y)

#### 体感の変化

- ・最初から最後まで感じ方はあまり変わらなかった (Y. M)
- ・最初は「怒り」「憎しみ」→回数を重ねるごとにそれだけで「苦しみ」や「自己との葛藤」などといった気持ちがでてきた (N. T)
- ・最初は「怒り」などだったがだんだん「開放感」「あきらめ」など感情に広がりが出てきた (S. F)

#### 両者の関係の変化

- ・はじめのうちは単に暴れているだけのように感じたが反復していくうちにただ激しく動いているだけではうまく表現できなくなってきた (S. H)

図 3-4.には、3名のデータのみを示したが、13名分のデータを同様に処理した。その結果を18語を3語ずつから成る語群でみていく。

1回目の体感が「怒り」群で始まり、5回目まで「怒り」群というように、「怒り」が5回を通じて他の感情語群より強く、一貫して体感している被験者が13人中8人であった。また4人は1回目は「怒り」以外の感情語群の体感であったが、5回目には「怒り」語群の体感が最も強

くなった。

1 回目から 5 回目まで「怒り」語群の体感がどのように変化したか、その変容のパターンを、「怒り」語群の強さの変化からみると、図 3-4 に示した被験者 Y と N のように、1 回目から 2 回目は上がり、2 回目から 3 回目は下がり、3 回目から 4 回目は上がり、4 回目から 5 回目は上がる、或いは下がるというジグザグパターンが多くみられた。

### 3.1.2.2 舞踊運動 2 について

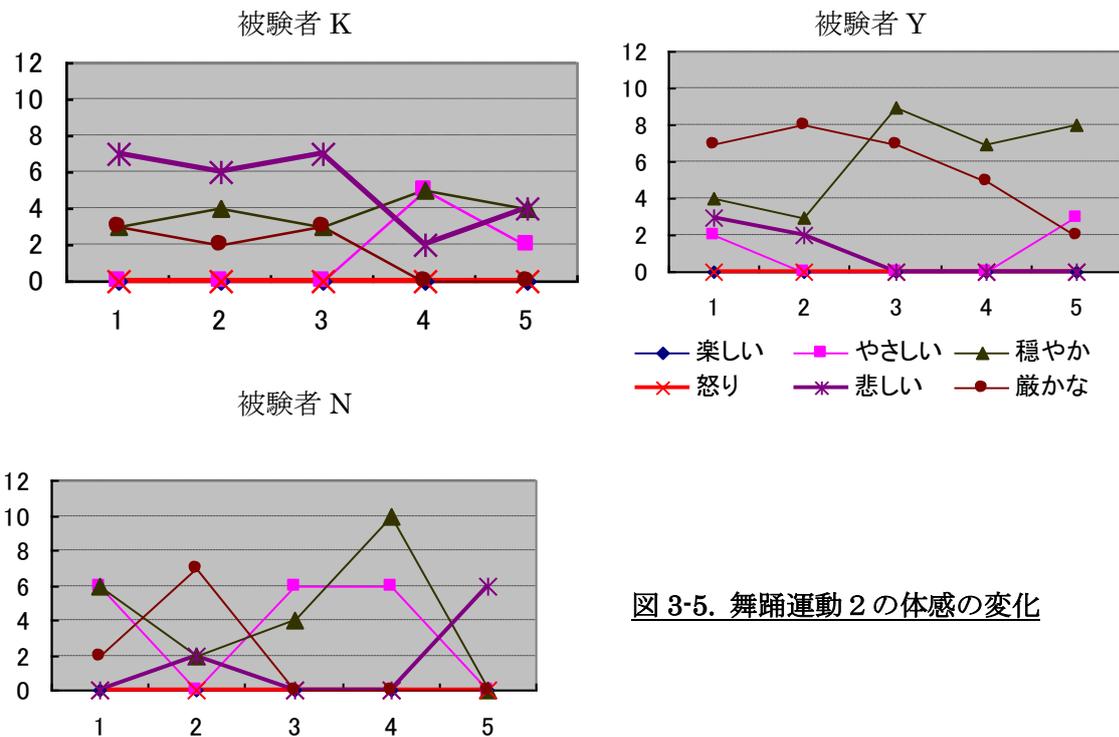


図 3-5. 舞踊運動 2 の体感の変化

#### 踊り方の変化

- ・最初はゆっくり大きな動きをするのが難しかったが、少しずつ気持ちよく動けるようになり、ひとつひとつの動きを丁寧にする意識が高まってきて最後にはスムーズに一連の動きができた (H. D)

#### 体感の変化

- ・体感があまり一定したことはなかった。「神聖」「やさしさ」「穏やかさ」を感じたときもあれば、「悲しみ」や「苦しみ」に満ちているようにも感じた。(S. T)

#### 両者の関係の変化

- ・ゆっくりなだけにとても難しかった。初めはただゆっくりと時間に身をまかせるようにだけ踊っていたが、回数を重ねるにつれて自分という存在を感じながら踊るようになった。例えば手を上に大きく広げる時は自分を外は解放するようにまた体を縮ませる時は自分の心の中をのぞくようなイメージをした。4, 5 回目は「うまく」踊ろうという考えは全くなく本当に踊りながら体感していたのでとても気持ちよく踊れた。(M. Y)

13名の1回目の体感は「厳かな」群5名、「穏やかな」群4名、「やさしい」群3名、「悲しい」群1名で、5回目は「厳かな」群4名、「穏やかな」群5名、「やさしい」群1名、「悲しい」群3名と多様であり、1回目から5回目まで一貫して同じ語群の感情語の得点が一番高い被験者は僅か1名であり、それは「厳かな」群である。また6名は1回目と5回目は同じ語群の得点が高く、2～4回目までは他の語群が高くなっている。ちなみにその6名の1回目と5回目の高得点の語群を示すと、「穏やか」－「穏やか」2名、「穏やか」－「やさしい」1名、「厳かな」－「厳かな」2名、「悲しい」－「悲しい」1名である。

筆者らは、この舞踊運動を「悲しい」を内包する舞踊運動として設定したのであるが、被験者は「悲しい」を体感する傾向になく、6つの語群のうち「楽しい」語群と「怒り」語群を除く、「やさしい」「穏やかな」「厳かな」「悲しい」語群の感情の強さが個人毎に、また、個人内で毎回、変動していることがわかる。

### 3.1.2.3 舞踊運動3について

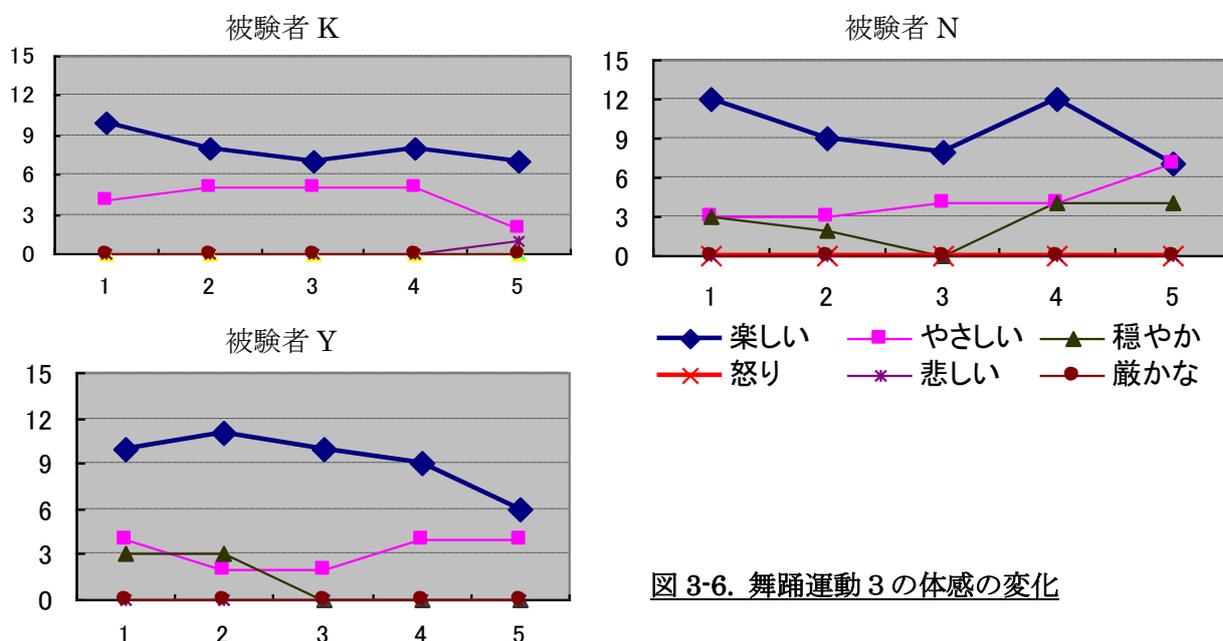


図 3-6. 舞踊運動3の体感の変化

#### 踊り方の変化

- ・最初のステップがリズムカルになり、そのときの表情が自然に笑顔になった (S. K)
- ・最初は最も踊りやすい運動だった。しかし、だんだん単純さに飽きた。味気のない動きだと思った。自分の動きに関しても上達はほとんどみられないと思う (H. D)

#### 体感の変化

- ・最後まで体感は変わらなかった (S. H)
- ・「楽しい」「幸せな」「嬉しい」などが5回を通してずっと同じだった (S. F)

#### 両者の関係の変化

- ・初めのうちはただ楽しくリズムカルに踊っているだけだった。しかし回数を重ねるごとに自分の呼吸を感じながら踊れるようになり楽しさだけでなく何故か嬉しさも感じていた。 (M. Y)

被験者全員が、1 回目から 5 回目まで「楽しい」語群の得点が他の感情語群の得点より高く、一貫して「楽しい」体感を得ていることがわかる。そして、被験者は、「楽しい」語群にある感情を最も強く感じながら、「やさしい」語群や「穏やかな」語群の感情も感じていることがわかる。また、5 回を通じて「楽しい」語群の体感の変動の幅は狭い。

体感の変容のパターンを、「楽しい」語群の強さの変化からみようとしたが、5 回を通じて「楽しい」語群の体感の変動の幅は狭く、かつ 13 人のそのパターンが全員、異なる。しいて言うならば、図 3-6.の被験者 K と N のように「楽しい」語群のピークが 1 回目、或いは 4 回目に、また底は 3 回目、或いは 5 回目に多く見られる。

### 3.2. 体感と転換点の関係

図 3-7.には、被験者 M.K (f) の 3 つの舞踊運動について、転換点 1 と 2 が 1 回目から 5 回目のどこにあるかを、実験者 2 名と被験者自身が評価した結果を示した。

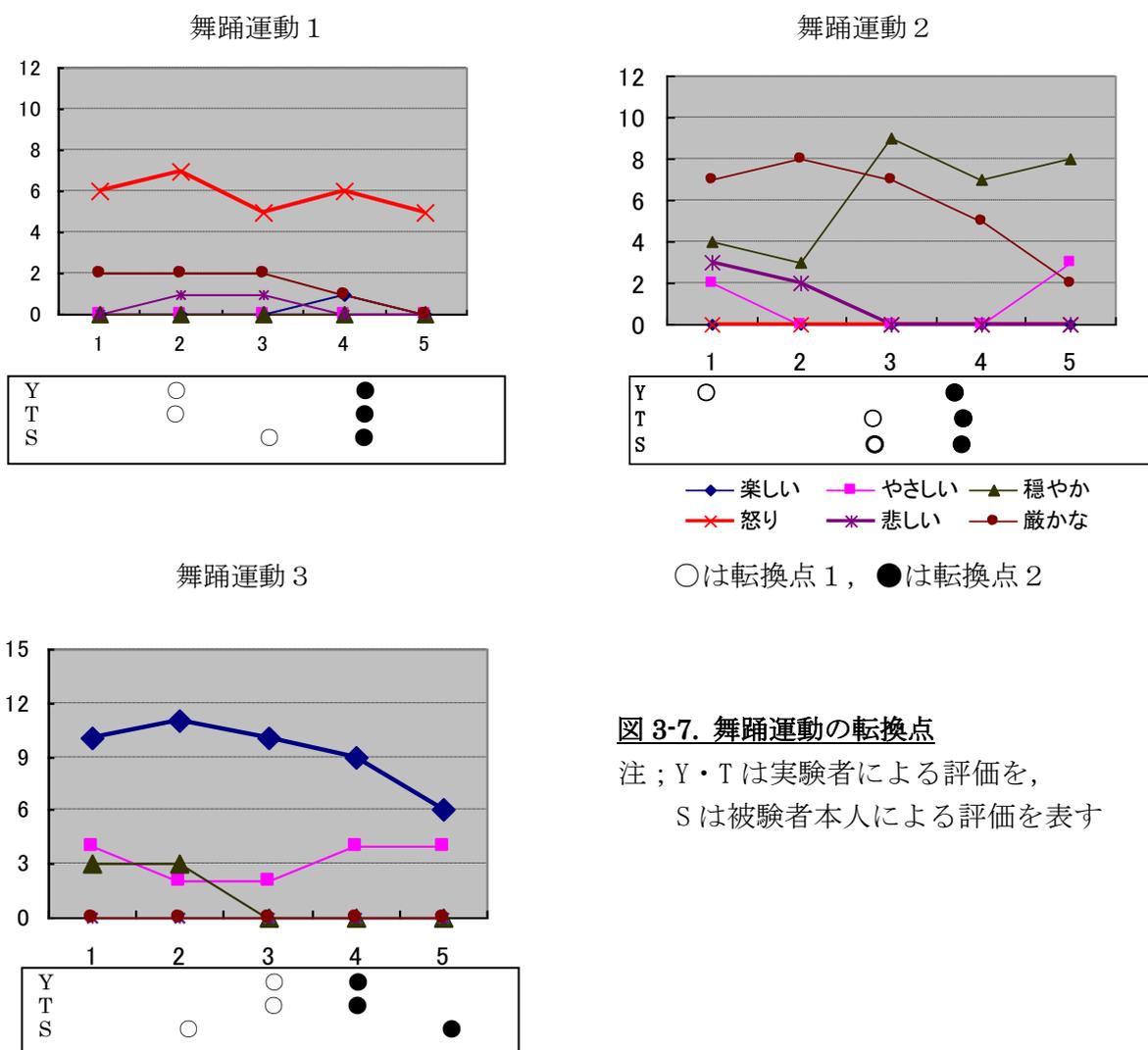


図 3-7. 舞踊運動の転換点

注；Y・T は実験者による評価を、  
 S は被験者本人による評価を表す

他の 1 2 名の被験者についても同様な評価を行い、そこから、2 回目から 3 回目に転換点 1、即ち「運動が細切れの状態から流れがでてきた段階」に、また 4 回目から 5 回目に転換点 2、即ち「舞踊運動が自分のものになってきた段階」に到達する傾向がみられた。また、既にみたように同じ舞踊運動を踊るという体験を重ねるのに平行して、筆者らが想定したそれぞれの舞踊運動の感情価が右肩あがりとならなかった。これは学生の記述に見られるように、繰り返し踊る中で

体感の幅が広がってくるのではないかと考えられる。特に、ゆっくりした舞踊運動2では、感情語が毎回変化しており、ゆっくりした舞踊運動では、体感が移行しやすいと推察される。

### 3.3. 同じ舞踊運動を繰り返し踊ることから得たもの

同じ舞踊運動を繰り返し踊るといふ課題に取り組む学生に求めた授業記録や5回の体感実験終了直後に求めた「5回反復する過程で、自分自身の動きがどのように変化し、体感がどのように変化してきたと感じるか。できるだけ詳しく書く。」という課題のミニレポートに書かれた記述をKJ法で分析した結果、学生が同じ舞踊運動を繰り返し踊ることから得たものとして大きく3つをあげることができる。ここでは、それぞれ代表的な記述を掲載する。

#### ①運動と表現

3つの舞踊運動を踊ってみて気づいたことはこのような動きもあったのかということだ。我々が普段しないような動きを取り入れることによって「神秘的」とか「厳かな」といった表現もできるのだということに気づいた (K.M)

#### ②自己受容・自己理解

決められた同じ踊りをしていても、その時の気分や、踊りに対する慣れなどにより自分の内側からでてくる感情に微妙ではあるが、ズレを感じた。しかし、どの時に感じた感情も実際に感じたもので、違和感はなかった。つまり、その時の状況によって変わる自分の内側の部分を自然に受け入れることができ、自分のことを理解することができる。普段の生活ではこういったことを感じることは難しいが、舞踊によって、より自分の内側に目が向けられることによって、そういった感情の変化にも気づくことができ、また自分の新たな一面を発見できる。(T.O)

自分だけの自分のためのリズムを見つけて、心から気持ちよく踊ることができるようになりたい(Y.S)

#### ③他者理解

それぞれの人の感性や想像力を見ることができてなかなか面白いものだった。同じ舞踊運動でも全く感じ方が違い、表現の仕方も違ったものになっていた。しかし、これこそが個性というものであり、もし皆がまったく同じ感じ方、同じ表現をするならば、この授業というものは全く意味を成さなかったであろう (S.H)

## 4. 総括

本研究の目的は、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによって、体感がどのように変化していくか、そのプロセスを明らかにすることであった。5回の体感評価実験からそのプロセスについて以下のことが明らかになった。

#### ①同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによる体感の変化は次の3つのプロセスを経る。

第1段階…動きを覚えることに必死で、体感を意識する余裕がない

第2段階…動きを覚えてスムーズに踊れるようになり、踊りながら自分の気持ちや気分を感じ取れるようになる

第3段階…自分のリズムで踊り、自分らしさを表現できる

#### ②初心者が既成の舞踊運動を自らの舞踊運動として踊るためには、踊る(練習)回数を4~5回とすることが適当である。

ここでは、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによる体感の変化のプロセスを明らかにしてきた

が、その過程で得られた結果は、筆者らの研究目的を超えており、示唆に富むものであった。今後は、今回の実験授業で得られた結果を詳細に検討し、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることにより得られる「知」の在り方の特性を解明することが新たな課題となる。

- 
- <sup>1</sup> 塚本順子・原田純子・猪崎弥生・前田正登・柴真理子他；舞踊運動の体感からみた基本感情の検討，第 55 回舞踊学会大会，2003. 12.
  - <sup>2</sup> 原田純子・柴真理子・塚本順子；踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察，第 55 回舞踊学会大会，2003.12.
  - <sup>3</sup> 柴真理子・坪倉紀代子・猪崎弥生・原田純子・塚本順子；体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語（1），神戸大学発達科学部研究紀要 第 12 巻第 2 号，pp. 113-126. 2005.

## 同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について (2)

### —保育者養成カリキュラムにおける授業を事例として—

坪倉紀代子 (十文字学園女子大学)

柴 眞理子 (神戸大学)

山田敦子 (高知大学)

#### 1. 研究目的

異なる基本感情を内包すると想定された舞踊運動を踊ることの意味と、舞踊運動を繰り返し踊ることの意味を検証することは先行研究<sup>1</sup>からの継続課題である。

今回は保育者養成カリキュラムにおける授業の中で、昨年の実験材料の素材を利用する授業を組み立てた。そこでは、指導者が実験材料である舞踊運動を後述する方法で指導し、同じ舞踊運動を指導を受けつつ繰り返し踊ることが、どのような体感の変化や自らへの気づきをもたらすかを明らかにし、「同じ舞踊運動を繰り返し踊る」という内容を授業に取り入れることの可能性をみるのが目的である。

本研究で対象とする保育者養成カリキュラムの授業は、1年次から3年次まで実技を主体とした「表現演習」「身体表現Ⅰ,Ⅱ」「身体表現論」「身体表現論演習」から続く4年次のカリキュラム「卒業研究ゼミ」の授業である。

これまでの授業は、学生の記述から次のように概観できる。

- \* 身体と心を解きほぐし、変身したり、いろいろなものを使って動きやあそびを楽しむ
  - \* 個々の自由な発想を大切に、好きなように表現するその場限りの動き
  - \* 自分の身体の状態に意識はなく、動きを意識して動くということはない
- とあるように、毎回違う題材を元に行う、いわば一過性の授業であった。

本研究の授業形態は、“舞踊運動を繰り返し踊ること”をベースに

- (1) 動きの中で自身のからだに気づくこと。また動き続ける中で他者の身体をも感じとることをもっと明確な形で授業の中に取り入れていく
- (2) 自身が動く中で自分の身体を感じ、意識し、運動を分析し、発展展開させていく力をつける

こととした。

#### 2. 研究方法

##### 2.1. 実験授業の実施

被験者：十文字学園女子大学・人間生活学部・幼児教育学科4年次学生10名

期間：2005年 5/9 ～ 5/27 の6回

題材：先行研究における3つの舞踊運動を用いる

◇舞踊運動1：＜楽しい＞を想定

快—やや緊張—やや興奮

コアとなる運動特性（弾む・軽やかな）

- ◇舞踊運動 2：＜悲しい＞を想定  
不快—弛緩—沈静  
コアとなる運動特性（縮小的）
- ◇舞踊運動 3：＜怒り＞を想定  
緊張—興奮  
コアとなる運動特性（急变的）

授業組み立てのポイントは以下に示すとおりであり、詳細な授業内容は、資料 1に示した。

- \* 舞踊運動の原型の確認をする
- \* 与えられた動きが正確にこなせるようにする
- \* 各舞踊運動を最小の運動単位に分け、それぞれを繰り返し練習する
- \* 飽きずに繰り返すための工夫をする
  - ① 運動の要素をポイントに（時間，空間，力性）変化を加える
  - ② 人数の変化，人と関わる要素を加える  
繰り返しながら，“他とのコミュニケーション”＝“他者の存在を感じ  
とること”をひとつの大きな要素とした。（今までの授業の中には全く  
出てきていない要素）
- \* 動きながら仲間が意識できるようにする  
↓  
動きを止めずに子供と一緒に活動ができるようにする  
表現＝コミュニケーション … 他を感じること
- \* 全身のコントロールと細部への意識

## 2.2. 授業の記録

授業の記録については、指導者である筆者自身が毎回、授業記録を作成すると同時に、被験者である学生には①毎授業後の記録②6ヵ月後の記録を求めた。授業は毎回、固定ビデオで撮影し、また体感チェック時には、被験者2人ずつ、舞踊運動の撮影を行った。

## 3. 結果と考察

ここでは、被験者の記録を中心に報告する。

### 3.1. 毎授業後の記録

#### 3.1.1. 分類基準

まず、KJ法により学生の記述を分析し、分類基準を以下のように定めた。

- ① 毎授業後の記録については、本研究において実施せられた学習法が明確になるようにするために、

- **学習法を＜繰り返す＞＜一つ一つの動きに分ける＞の2点とする**

そして学習法の中に分類できない、

- **被験者が動くことで気づいた事項を**

＜人と動く＞＜身体＞＜運動＞＜変化連続＞＜気持ち・感じ・表現＞  
＜音楽・その他＞の6項目に分類する

- ② 最終回(5.27)については

●<はじめは…>—<繰り返しの学習法>—<今は…>という、被験者の時系列の要素で分類する

3.1.2. 本授業形態の特徴と被験者の学習内容との関係 (資料2.3.を参照)

被験者の毎授業後の記録の分析結果から、以下のことが、それぞれの授業に共通している点としてあげられた。

- ① 第1に、繰り返すことや一つ一つの動きに分けることでそれぞれの運動がもたらす体感をより強く感じさせることになった。つまり、“できるようになった” “動きがわかった”などの運動そのものがもたらす身体の快感と、“どんどん楽しくなっていった” “違う世界へ行ってしまったように” “感情が出しやすかった”など運動によって引き起こされる感情をより明確に強く意識していった過程が読み取れる。
- ② 次に、一つ一つの動きにわけ、その運動を習得させるために“繰り返すための工夫”をした。たとえば、方向、リズム、速さの変化、腕の動きを考え付け加える、移動を加えてみる、一部分強調するところを決めその前後の動きを工夫させたり、というこれらの“繰り返すための工夫”が運動の構成要因への理解と興味の持続を呼び起こす結果となっている。この運動の構成要因への理解は、子どもたちの遊びを分析し発展・展開させていくための重要なポイントと考える。そのことをいつの間にか、非常に具体的に彼女たちへ、彼女たちの実感を伴った体験として実現できているといえる。
- ③ 第3に、人との関係のバリエーションを加えたことで、資料2,3の《人と動く》《身体》の項目に多くの記述が見られるように

自分の身体・運動を意識する→ 自身が動きながら 他を見る、他を感じる → 改めて、自分を意識する
---

というひとつの流れが生まれ、一人で動くことから得られないつまり“少し違った感じ、嬉しいような、動きを共有する気持ちを楽しんでいた”という記述にあるように、保育における身体表現の活動を、複数の人数で行うことの意義を気づかせることにつながっていると言えよう。

3.2. 本実験授業の有効性 (資料4.5.を参照)

資料4.5.は、この実験授業を終えた後に、3週間の4年次教育実習を経て、約半年後の11月18日の時点でこの実験授業を振り返って

(質問1) この授業で得たこと、感じたこと

(質問2) 保育者になるにあたって、この授業は役立つものであったか？

という2つの問いへの回答をまとめたものである。

主に資料4に基づいて、**本実験授業の有効性**を以下のようにまとめられる。

- ① 毎回の授業後の記録、また6ヵ月後この授業を振り返っての各質問の答えの中で学生は動きを繰り返すことの効果を見出している。繰り返すことからの身体への意識、気づき、運動への理解、他人への理解・共感が生まれており運動を繰り返すことの授業形態の有効性を立証

し得たと言えよう。

- ② 各資料（資料1から資料5）からもわかるように、この授業からの気づきはたくさん生まれている。気づきが生まれたということは、意識が生まれるということを意味し、体感が明確な運動を素材として用いた授業の有効性が示唆された。従来、舞踊運動の評価がその“見え”の観点からの比重が重かったように思われるが、今回の結果を受けて、もっとこの体感をキーワードにしての授業の組み立てがあっても良いのではないかと考える。
- ③ 資料4の《身体・意識》《一つ一つの動きに分ける・運動・変化》の各記述に見られるように、4～5回の繰り返しの結果与えられた動きを自分の動きとして動けるようになっているということは、先行研究の結果との一致が見られた。
- ④ 見る 見せる 見られる という経験は、自身のからだ、運動を客観視することにつながり、それがさらに他人の身体を客観視することになる。即ち、子どものからだや運動を分析する目を育てることにつながるということを学生たちは自覚している。従って、保育者養成プログラムの身体表現に関する新たな一つの方法として提示しうると考える。

### 3. おわりに

本研究では、学生による授業記録に基づいて、「同じ舞踊運動を繰り返し踊る」ことを組み込んだ授業の有効性をみてきた。筆者自身、このような授業を初めて実施し、毎時間、固定カメラで撮影した自身の授業をビデオでみて、指導者自身の問題と課題を新たに見出したので、本研究のおわりにあたって、そのことについて触れておきたい。

ビデオを見て、とにかく急がせすぎている事に気づく。学生は“じっくり”できたといってくれているが、言葉（筆者の指示の）として飲み込んだものを吟味したり咀嚼する時間があるべきで、そうすればもっとゆったりした満足のいく体感が得られるのではないかと推察される。

“保育者になるにあたって、この授業は役立つものであったか”の質問に対して学生は《子どもが自由感を持って心を動かして遊び込む》ことの必要性（資料5）を述べているが、全く同じことがこの授業にもいえる。学生に時間をゆだね、自らの心が動くまでもう少しゆったりした時間の中で、身体と動きを楽しむ余裕を持たせられたら…と思った。揺り動かす—それも強烈に揺り動かす—ことに気をとられすぎているのではと、自らの授業のビデオを見ながら振り返りつつ強く思った。現実には与えられている時間はあまりにも短いですが、そんな中で、学生が“じっくり納得がいくまで追及していくことができた”と感じてくれているのは救いである。

今後は、本研究ではふれなかった体感チェックの結果とここで得られた結果を照合し、どのような指導のもとに行った「同じ舞踊運動を繰り返し踊る」ことを組み込んだ授業が、どのような体感をもたらし、またその体感を通してどのような自分と他者への気づきがえられたのかを詳細に検討すること、そしてそこからまた「同じ舞踊運動を繰り返し踊る」ことを組み込んだ体系的な授業のあり方を考案し、実践していくことが課題である。

---

<sup>i</sup> 柴真理子・坪倉紀代子・山田敦子・米谷淳；同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について。第 56 回舞踊学会大会。2004.

< 授業内容の概要 >

資料 1

	授 業 内 容	備 考
① 5/9	各自でウォームアップ 3つの舞踊運動 原型の動きの練習 — ビデオ撮影 “雨”を題材に（前回の指導案作成の授業を発展させて）	シューズ履いたまま…すごい音
② 5/13	w-up ローテーションで全員がリーダー (18分間) ラスト：寝た態勢で“バター”を題材に <b>舞踊運動1 (楽しい) を利用して</b> (27分間) 動きを分けて練習 輪唱、腕の動きを加える、移動する方法、リズムの変化、 方向の変化、B-A-B-C（組み合わせて自由に）	この日から裸足 45分間動き続ける 最後へとへとになっている
③ 5/16	w-up ローテーションで全員がリーダー (18分間) <b>舞踊運動2 (悲しい) を利用して</b> (40分間) バランスが崩れるところを練習 うまくいかないところは、からだをどう意識するか 動きのタイミング、方向、回数を自由に繰り返す まわりで同時に動いている人を意識するよう	細かく分けての練習より一流れの動きの中でタイミングのとり方を工夫 ラスト：ほおっておけばいつまでも動き続けられるのではという状態
④ 5/20	w-up ローテーションで全員がリーダー (27分間) <b>舞踊運動3 (怒り) を利用して</b> (28分間) 動きを分けて練習 オリジナルの動きを ①できるだけゆっくり、レガート、スローモーションに ②ゆっくりだけどはっきりリズムを刻んで ③合わせようのないメチャクチャな曲に対応しながら	アップに懲りすぎてこの段階で疲れてしまっている 最後の身体を放り出して大きなジャンプへの箇所ができない 二人組：真似する 自由にリアクション 分けた動きの回数も自由に
⑤ 5/23	w-up 真似っこゲーム 手だけ～全身へ (18分間) 間違ったところからメチャメチャ踊り ビデオで3つの舞踊運動の原型を確認<M1、M2、M3> そのそれぞれについて以下の課題で練習 (68分間) ① 原型 ② 歯切れよく、アクセントをつけて ③ ノーアクセント、レガート ④ 1ヶ所強調する部分を作る 3つの運動の中からひとつ <b>選び</b> 課題を動き分けながら動き続ける。順番、移動は自由に 同じ運動を選んだ人でグループになり、構成	前回長過ぎたので課題を与えてのアップにする 過激にメチャメチャ踊りを楽しむ グループになってからは、もっと時間が欲しかった
⑥ 5/27	w-up カルタ取り、鏡拭き、身体でにらめっこ 舞踊運動1, 2, 3について ビデオを見ながら原型の動きを確認 各自練習 ビデオ撮影 体感チェックリストおよび感想の記入	最後に1回目と6回目のビデオ鑑賞 自身のビデオを見ての感想を記入

② 5/13 M1を利用して	③ 5/16 M2を利用して	④ 5/20 M3を利用して
<p>《繰り返す》</p> <p>H 何回も繰り返すごとにどんどん楽しく気持ちよくなっていった</p> <p>I 身体の色々な部分を意識して動くことができたので、動いた！という満足感があった</p> <p>B 何度もやったので、自然と動きも入ってくる</p> <p>《一つ一つの動きに分ける》</p> <p>J 一つの流れを3つに分けて行ったことで、一つ一つの動きがとても面白く感じられた</p> <p>G ひとつ流れとしてではなく、一つ一つの動きをしてみて、…考えて動いていたように思う</p> <p>《人と動く》</p> <p>A 移動の時ぶつからないように、人の動きを見た</p> <p>B 周囲の子はどのようにやっているのかと見ることができた</p> <p>D みんなと交差するときは、相手のことも考え動くことが目のやり取り、判断で1回でできたことに驚いた</p> <p>F グループに分け、変化を加えることで、また少し違った感覚、嬉しいような、動きを共有する気持ちを楽しんでいた</p> <p>H 周りの子を意識しながらタイミングを計ったりすることが大変ではあるけれども、達成感が味わえた</p> <p>J 人数の変化によってすごく楽しめた</p> <p>《身体》</p> <p>H 目線や姿勢をほんの少しだけでも意識することで、動きも自然とダイナミックになっていった</p> <p>F 全身の頭からつま先までを意識することで、身体が自然と軽くなったように感じた</p> <p>E 動くことは体の一部分だけを動かすだけではなく、他の部分も連動しているのだと思った 足：3 姿勢：3 腕：2 目線：2 お腹：1 全身、身体、連動：5</p> <p>《運動》</p> <p>C 簡単な1つの動きでも、回転したり、</p> <p>G 細かい動き（ステップや腕など）が意識された</p> <p>G ただ動くのではなく、どうしたら音がたたないか考えたり</p> <p>《変化・連続》</p> <p>A 1つの動作でも、色々な動きができる</p> <p>G 3つの動きをいろいろ広げていて（リズム、方向、グループごとなど）、ただその動きをやるだけでなく、色々なことができるということを知りました</p> <p>J リズムの変化や音楽の有無、要素が増えていく楽しさを感じた</p> <p>《音楽・その他》</p> <p>A できな～い、難しいとわめきながらも、笑顔でできた</p> <p>B リズムも足音も皆と一緒にになり、またやりやすくなった。</p> <p>D 音楽があるだけで楽しさが倍増した</p> <p>B 「間違えないように…」など、考えながら動いていた</p> <p>G やってみて、相変わらず自分はカタいなあと感じた</p>	<p>《繰り返す》</p> <p>C 首を伸ばすのが気持ちよくて、その動きを何回もやった</p> <p>《一つ一つの動きに分ける》</p> <p>B 好きな部分だけやってよかったので気持ちがよかったです</p> <p>B 好きな順番で動いてよかったので気持ちよかったです</p> <p>A 初めの両手をパッと上にあげたところ…この部分が一番好き</p> <p>《人と動く》</p> <p>B 友達はずごく感じました</p> <p>D みんなの様子を見て、みんなのいる場所に行こうか、考えてみた</p> <p>G 友達を見つけて、後ろをついて回ったりした</p> <p>I 空気が静かであり音などを出さないようにということを感じた</p> <p>《身体》</p> <p>B 全体的（全身）にくまなく集中させて神経をいきわたらせるのは大変でした</p> <p>《運動》</p> <p>B 「立っている」というのも意識してみました</p> <p>B 「立っている」というものだけなのに難しかったです</p> <p>G 歩き方に注意した。</p> <p>《気持ち・感情》</p> <p>C 助けを求めているような何か不安を抱えていて、どうしようかと悩んでいて友達に助けを求めているような気持ちで動いた</p> <p>D 悩んでいた。</p> <p>E 動いていて「無」でした</p> <p>F 悲しさから少し穏やかな気持ちへと変わっていった</p> <p>G カラに閉じこもったり、悩んだり…という感じ</p> <p>H 自分の意志というか、自分をものすごく持っていたと思う</p> <p>I 終わってからもちょっとボーッとしてしまって、少し違う世界に行っていたような気がした</p> <p>J 気持ちがどこかに置かれているみたい</p> <p>F 今日の動きは、自分が表現者としての意識があり、指の先まで感情がこもっていた</p> <p>《音楽》</p> <p>G 音楽のせいもあって、ゆっくりゆっくり動いてみた</p> <p>I 音楽と動きから静かな感じ、厳かな感じがした</p> <p>J 動きと音楽の中に自分が沈んでいるようだった</p>	<p>《運動・一つ一つの動き》</p> <p>B 今日は今までよりも“つかむ”“投げる”などの動きを意識して動いていたように感じました</p> <p>I ゆっくりゆったりして動いて動きがわかった</p> <p>I この動きはあまり好きではなかったけれどできるようになった</p> <p>《人と動く》</p> <p>D 友だちと一緒に同じ動きをやるのが楽しめた</p> <p>E 二人（もしくは三人）で組んで、自由に動いていく運動が面白かった</p> <p>F 友だちと表現することができるようになった</p> <p>G 3人組を組んでやるっていうことが、とても楽しかった</p> <p>H 友達とペアになって動いてみると、より一層力が入った気がする</p> <p>《身体》</p> <p>A 体全体で表現できるようになった。</p> <p>B 首を意識する様になってから色々なモノ（風景）が見えてきた</p> <p>G 首の動きは意識していないと、水平に保とうとしていたように思う</p> <p>《変化》</p> <p>C 激しい運動だったけれど、ゆっくり動くと違った感じがした</p> <p>《気持ち・感情・表情・表現》</p> <p>C スカッと激しい動きだから、動いた後スカッとしました</p> <p>E 今までやった舞踊運動の中で一番感情が出しやすかったです</p> <p>F 感情がこもりやすい表現をしていて、とても気持ちいい</p> <p>E 動いていて言葉（「ハッ！」「やあ！！」など）が出てきてしまった</p> <p>D あまり表現できずに、苦手だったが好きになった</p>

資料3.

⑥ 5/27 M1 (楽しい)	⑥ 5/27 M2 (悲しい)	⑥ 5/27 M3 (怒り)
<p>&lt;はじめは&gt;</p> <p>A ただ覚えるのに必死で</p> <p>D 最初は真似することに一生懸命になっていて、自分の動きに不安や迷いがあったけど、</p> <p>F 最初は動きを覚えることで、いっぱいになっていた</p> <p>G 全体を見て真似る形をとっていたので『なんとなく』感がすごく出てしまっていたように思う</p> <p>J 3年の時ビデオを撮ったときは、この動きがとても難しく感じられたけど</p> <p>&lt;繰り返す学習法&gt;</p> <p>B 部分的に練習していったことで、回を重ねていくごとに楽しくなっていました</p> <p>C 回数を重ねたから、体が自然に動くようになった</p> <p>D どんどん自分なりに動けるようになっていき、練習しただけはあると思った。</p> <p>H 回数をこなすほど、どんどん楽しくなっていた</p> <p>I 練習していくとリズムが合うようになり</p> <p>F 回を重ねるごとに軽やかなはずんだ感じが増していった</p> <p>J 何回繰り返しても Movement 2は楽しくて</p> <p>&lt;今は…&gt;</p> <p>A この動きをこう表現したいと思うように</p> <p>B 何となく流れて踊っていたときよりも、自分でも「こう動く」「注意する」ということを考えながら踊ることができました</p> <p>C 自分の動きに注意して動くことができた</p> <p>E 動きなどを気にしながら行うのはとても技術があることなのだったと思った</p> <p>F 姿勢や足音に気を付けるなど、自分の身体を意識して表現することにつながっていった。</p> <p>F 自分の身体を意識することで、感情がこめやすくなった</p> <p>G 細かい部分(姿勢や各部の動き)にも意識して取り組むことができた</p> <p>H 足音を立てないように注意して踊るだけで動きが全然違ったので驚いた</p> <p>J 意識して一つでもできるようになると、もっとその動きが楽しく感じられるようになった</p>	<p>&lt;はじめは&gt;</p> <p>A 初めは細かい部分を良く見ずにやっていたが</p> <p>F 前は静かや穏やかという思いが強かったが</p> <p>H 最初は身体の軸など何も考えないで動いていた。</p> <p>H フラフラしてしまいスムーズに動けなかった。</p> <p>&lt;繰り返す学習法&gt;</p> <p>H 何回も練習することで、身体のラインを気にしながら動くことができた</p> <p>I 何回かこの動きを練習してみて、動き方をちゃんとわかってから動くのと、まだあまりわからない時に動くのでは、自分の中で「ここを気をつける」や「このような気持ちで」と考えられるような余裕が出てくるか出てこないかという違いがある</p> <p>H 何回も何回も練習したけれども、最後の首を上げてそのまま座っていく(下がっていく)ところがどうしても肩が上がってしまい難しかった…。</p> <p>A 1つ1つを確認していくと、ここでは顔を上げる、ここでは手の位置が違うなど沢山見えてきた</p> <p>&lt;今は…&gt;</p> <p>A 動きが丁寧になり、力を入れる所、抜くところがわかってきて、バランス良く表現できるようになった</p> <p>B 最初にやったときよりも、この動きでは特に「のびる」ということを考えながらやるようになりました</p> <p>B 3つの中で1番自分の身体について考えながら、自分の身体と会話しながら動くことのできるものだと思う</p> <p>C 自然に動けるようになると、感情の方が強くなってくるので、前よりも気持ちが暗くなった</p> <p>D 最初よりも目線に気をつけるようになってるのが、自分でもわかった</p> <p>E 静かな動きなので、他のムーブメント2や4よりもずっとずっと1つの動きを大事にしながら動こう(動かなきゃ)と思っていました</p> <p>F 最後のしゃがんだ姿勢のときに腹筋を意識し、背中を丸めることで、とても沈んだ感じがした</p> <p>G 今でもまだふらついている部分もあるが、最初の頃に比べればだいぶ変わってきたように思う</p> <p>G このムーブメント6では意識して取り組むことの大切さを学んだ</p> <p>J この動きは、自分の気持ちをどう持つかによって、動きに対する感じ方が全然異なり</p> <p>J ゆっくりとした動きほど緊張感を持って動かないと崩れっぱなしになるのだとわかりました</p>	<p>&lt;はじめは&gt;</p> <p>A 初めは腕だけ動いている感じだった。ジャンプの動きも、身体がかたいのでそることができなかった</p> <p>H 最初は勢いでそのまま動いていたけれども、</p> <p>&lt;繰り返す学習法&gt;</p> <p>G 今日の練習ではジャンプの仕方を変えてみて跳びやすくなり</p> <p>H だんだんと一つ一つの動きにメリハリをつけていけたのではないかと思う</p> <p>&lt;今は…&gt;</p> <p>A 感情を入れてやると、動きがさらに激しくなった</p> <p>B 身体と話している暇はなく、部分だけ(1つほど)は頭におくことができ意識しましたが、1つ考えると他の指先など意識できませんでした</p> <p>B ジャンプは自分がどの位跳んでいるのか、どの様に跳んでいるのか良くわかりませんでした</p> <p>B 1回目にやった時よりは、動きが大きくなっている様な気がします</p> <p>E 自分がどんな風にジャンプしているかは、鏡を見れないので、どんななのかもわからなくて、多分、だいぶ自分のイメージとはかけ離れているだろうと思ったしジャンプすればするほど、自分のイメージとかけ離れていった</p> <p>F 身体全部、頭も使った最初の頃の動きをすることで、前よりも怒りという思いが手足だけでなく、全身で表わせるようになった</p> <p>G 腰が反れない為(←かたい)無理に反ろうとして痛くなり、着地もバランスが悪くなってしまっていた</p> <p>G 腕の振り思い切り迷いもなくできたことなのだったと思った</p> <p>F 姿勢や足音に気を付けるなど、自分の身体を意識して表現することにつながっていった。</p> <p>F 自分の身体を意識することで、感情がこめやすくなった</p> <p>G 細かい部分(姿勢や各部の動き)にも意識して取り組むことができた</p> <p>J 意識して一つでもできるようになると、もっとその動きが楽しく感じられるようになった</p> <p>J ずっとずっと1つの動きを大事にしながら動こう(動かなきゃ)と思っていました</p> <p>F 最後のしゃがんだ姿勢のときに腹筋を意識し、背中を丸めることで、とても沈んだ感じがした</p> <p>G 今でもまだふらついている部分もあるが、最初の頃に比べればだいぶ変わってきたように思う</p> <p>G この動きでは意識して取り組むことの大切さを学んだ</p> <p>J この動きは、自分の気持ちをどう持つかによって、動きに対する感じ方が全然異なり</p> <p>J ゆっくりとした動きほど緊張感を持って動かないと崩れっぱなしになるのだとわかりました</p> <p>G きれいに「見せる」ということは本当に難しいと感じた</p> <p>I 首を意識しただけで自分がやっていると感じた違和感が少しなくなった</p> <p>J きっと感情をめいっぱい込めると動きやすくなると思います</p>

<前期ゼミ授業を振り返って 05. 11. 18.>

資料 4

前期ゼミ授業で得たこと・感じたこと	保育者として役立つと思われる点
<p><b>《繰り返す》</b>            * 同じ動きを繰り返すことの楽しさ            * 繰り返し動くことでなんとなく動きがわかってきて、動けるようになった            * 苦手な動きこそ何度もやってみる必要があるということを学んだ            * 一つ一つの動きの特徴みたいなものが見えてきた            何度も繰り返すことで動きが自分に馴染んでくる</p> <p><b>《身体・意識》</b>            * 自分の身体を意識すること            * 自分の動きを意識することで動き方が変わる            * 身体の細部（手足、指先）まで意識する事が大事            * 見せる…姿勢や目線、身体の細部の動きなどを意識            * 自分の身体が最大の材料であることを痛感  <b>《人と動く》</b>            * 人の身体を意識すること            * 一つの動きを何人かで共有することの楽しさ            * 構成…一つの運動から隊形や流れを考え、実践し、調整を行いながら一つの作品を作る            その過程や見せ方</p> <p><b>《見せる⇔見る⇔見られる》</b>            * 客観的に動きを見つめてみることの重要性            鏡、ビデオの効果、            じっくりやること（繰り返すことの）の効果</p> <p><b>《一つ一つの動き分ける・運動・変化》</b>            * 運動の習得…習得までの練習方法（過程）            細部の動きの追求など            * 運動に対するアプローチ方法…速さを変える、音楽を変える、動きに強弱を付ける、姿勢など            * 一つの動きでもテンポや組み合わせを変えていくと質が変わることを知った</p> <p>※練習することで動きがスムーズに、きれいになる。            きれいに動くことは、嬉しかった。沢山動いて楽しいという楽しさとは違った楽しさを得た</p>	<p>* 動きを見て、実際にやって、体感してから、それを感情に置き換えるという授業から、言葉ではなく身体で表現した子どもなりのサインを見つけることができると思う</p> <p>* 動きによって感じるものが違うということがわかったので、保育者になったときに子どもたちが何か動いているときに、まず「どのようなことを感じているのだろう」と考えることができるし、それに共感できるのではないかと思う</p> <p>* 子どもは誰よりも保育者の動きを良く見ている</p> <p>* 子どもから常に見られている存在として、保育者が身体への興味を高めていく必要がある</p> <p>* 身体への意識がとても大切なことであるのに気付くことの出来る授業だった</p> <p>* 動きを「見せる」意識…姿勢や目線、動きが変わった</p> <p>* 保育中の立ち振る舞い・姿勢は「見られている」ということを常に意識している必要があると思う            ↓            授業の中で「見せる」「見られている」この二つの体験ができたことは今後役立つものである</p> <p>* 運動に変化を加えることで長い時間何回も繰り返していたが、飽きずに動き続けることが出来た            ↓            新しいものを取り入れる際、どう導入し展開、継続させていけばよいかを考える手立てになると思った</p> <p>* ひとつの動きを色々バリエーションを考えてやってみたので、その変化のさせ方が自分でも子どもとの遊びの中でやっていくことができるのではないかと思う</p>

< 保育者として役立つ点はどういうところか？ > 記録者：H

- \* 何かを真似するといっても、表現の世界は無限であることを改めて学びました(真似が出来たから終わりではなく、そこからどんどん広がり、又広げていけること)

↓

子どものイメージがもっともっと広がるように言葉掛けをしていくことが大切だと思うので、自分の心が動くとおりに言葉掛けをして、共にイメージを受け止めていくことが大切だと思います。でも、受け止めてあげすぎることによって共倒れしないようにしていかなければ…と思います。

- \* それぞれが自分のペースで自分の感情を元に動いているが、その中でも周りを意識していくこと、協調性も大切なことを学びました

↓

一人一人の個性を大切にしていくことは何よりも大切ではあるけれども、個性を伸ばしながら、見出しながらそれと同時に仲間を意識させることも大切だと思います(集団生活を送る中で)

- \* 何回も何回も同じ動きを繰り返すことで、どんどん心がほぐれていくことを実感できました

↓

自由に身体を動かすこと、そのものになりきることは子どもの特徴がより表現されるものだと思うので、子どもと触れ合い、子どもの心をほぐす為に身体表現を活用することは幼児教育に必要なことだと思います。

- \* 自分の好きな運動を選び、グループに分かれて構成した授業を終え、基本の動きは決まっていたとしても、自由に表現できることがとても開放感があり、満足感を得られました

↓

子どもが自由に遊ぶ、表現するということは、本来「遊び」は自由であり、自由であるところの遊びにわざわざ自由をつけるのは何故だろう…と思いますが、子どもが自由感を持って心を動かして遊び込むということは必要なことだと思います。子どもの遊びに保育者が勝手に区切りをつけて「自由」である遊び「自由でない」遊びとしているのを考えていきたいと思います。←なんだか上手く言えなくてごめんなさい…。

- \* 5月9日のビデオと5月27日のビデオを見比べて、自分もまだまだ成長していることを再確認出来ました

↓

自分の動きを究めていくことはもちろん、周りからの刺激などを得て日々成長していくことを実感しました。子どもと共に日々成長し、自分自身にも磨きをかけていくことが保育者には必要なことだと思います。上記に挙げたように、身体表現は無限であると同時に、保育者にもこれで良いということはないと思うので、共通点があると思いました。

## DLT 法による舞踊運動の 3 次元動作解析

前田正登，柴真理子，小高直樹（神戸大学）  
猪崎弥生（中京女子大学）  
塚本順子（天理大学）  
西 洋子（東洋英和女学院大学）  
原田純子（大阪女学院短期大学）

### 【緒言】

舞踊運動の体感はいくまでも主観的なものである。そこで複数の踊り手の舞踊運動を 3 次元 DLT 法により動作を解析することによって、客観的に捉えられる運動の特徴と主観的な特徴を比較することが本研究の目的である。これまでも、舞踊運動に関する動作解析は、さまざまな機種を用いて研究が進められてきている。しかし、舞踊運動の撮影方法、そして解析の観点、方法について詳細に検討されて研究は少なく、このような研究の成果を蓄積していくためには、これらを検討すると同時に、その解析が舞踊研究のどのような面に貢献するのかを明らかにする必要がある。本研究では 3 次元 DLT 法を用いて舞踊運動の動作を多面的に解析し、3 次元の動作解析が舞踊研究にどのように貢献するのかを検討する。

### 【舞踊運動への 3 次元 DLT 法の適用】

画像による動作分析法は、スポーツバイオメカニクスの分野で最も基礎的で有効な手段である。この研究方法では、対象となる運動が撮影された映像から、それぞれの画像ごとに「デジタイズ」という、身体各部の画像上における座標値を得る操作をすることになる。一旦、デジタイズの操作により身体各部の座標値を数値として得てしまえば、その後の分析は様々な演算により研究目的に適った情報に加工することが可能となる。したがって、動作を測定することの「精度」は、デジタイズ操作を含めて、映像の鮮明さに依存すると言っても過言ではない。

一般的な身体運動は、身体各部位の動きが一平面内で行われることは少なく、空間（3 次元）的な動きとなる。このような対象を扱う動作分析法の 1 つに 3 次元の DLT 法（Direct Linear Transformation）がある。本研究の対象となる舞踊運動も全て空間的な動きで構成される運動なので、動作分析として 3 次元 DLT 法を用いる。

### 【分析対象としての舞踊運動の特異性】

対象が舞踊運動であることで、一般的な運動対象と異なる点を対処方法とともに以下に挙げる。

- ◇ 被験者が移動する範囲が広い上に、手や足などの細部の動きにも注視しなければならない。  
⇒撮影エリアを広範囲に設定しつつ、細部まで判別できる鮮明度を確保する。
- ◇ 被験者の運動の方向が単一の方向でなく、カメラ映像の死角が多くなる。  
⇒カメラの台数を増やし、あるカメラでの死角は別のカメラで網羅する。

これらを考慮した結果、撮影カメラの台数及び配置は図 1 のような設定になる。

### 【「舞踊運動の動作分析」への期待】

20 種類の舞踊運動に 3 次元 DLT 法を適用した結果、身体各部（阿江のモデルによる身体の 23 点）や身体重心の座標、それら測定点の移動軌跡、速度変化などを得た。（図 2 参照）

しかし、以下に挙げる舞踊研究者の要望を十分に満たすものではなかった。

- 20種類の舞踊運動は、それぞれで分析項目が異なる。
- 単に数量の比較ではなく、それらを図やグラフなどにして視覚的にわかりやすく表現する。
- それぞれの舞踊運動の「質」に関わる量を明示する。(感情価の数量化)

動作分析によって可能となる多くの観点のうち、舞踊運動の分析にとって意味のある分析の観点は何か？それぞれの舞踊運動において動きの焦点(重要なポイント)は異なるので、どの舞踊運動でも同じように加速度や位置座標などを求めればよいわけではない。各舞踊運動の動きのポイントについて、舞踊研究者とバイオメカニクスの研究者が共同して、分析の観点を検討していく必要がある。

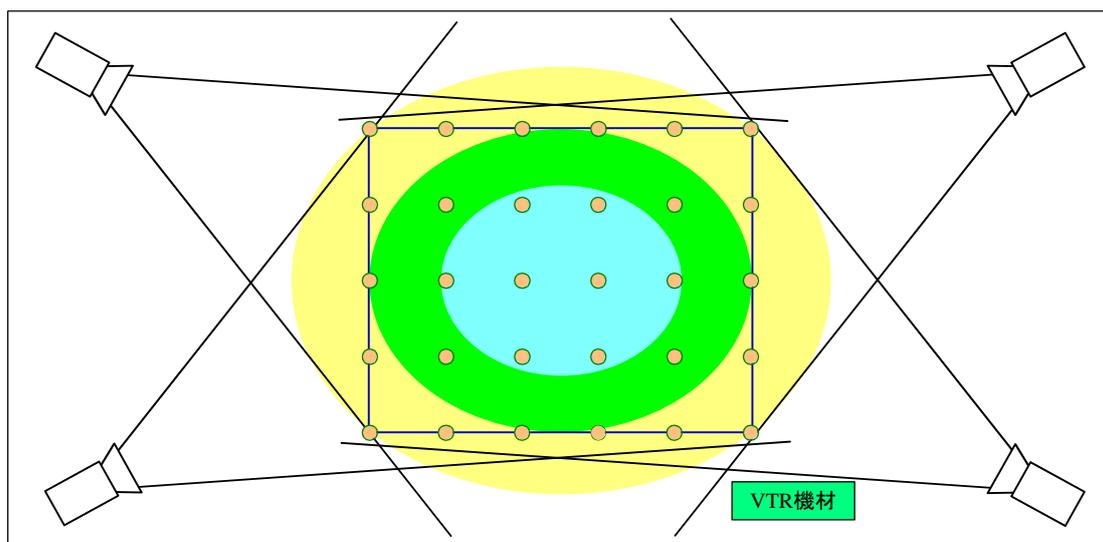


図1 撮影カメラの配置

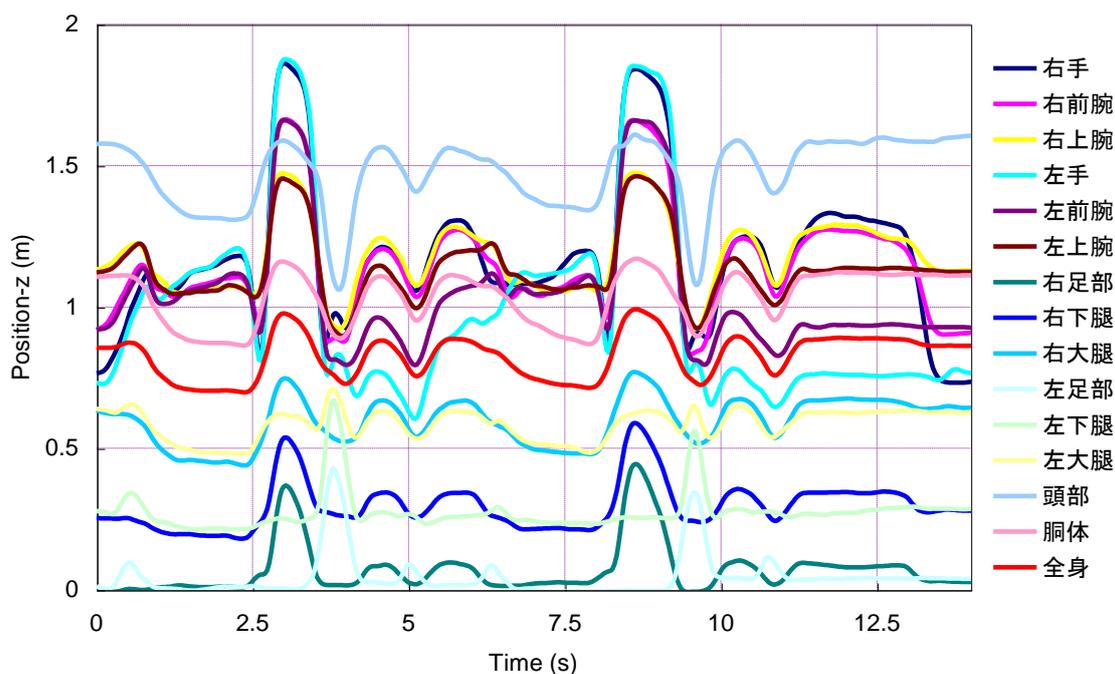


図2 身体各部における高さの時間変化

## 舞踊運動における体感と物理量の変化

小高直樹・前田正登・柴眞理子  
米谷淳・猪崎弥生

本研究は、昨年の舞踊学会で発表した「DLT 法による舞踊運動の 3 次元動作解析」の継続研究である。そこでは、舞踊運動が他の一般的な運動と異なり、3 次元動作解析の対象として特異なものであることを指摘し、動作解析にあたっては、撮影カメラの台数や配置に工夫が必要であること、そして、そのような撮影の結果得られた画像による 3 次元の動作解析は舞踊研究への貢献が期待されることを述べ、具体的な分析項目とその結果の表現方法の検討が課題として残された。

そこで、本研究では、まず、舞踊運動の動作解析において共通に分析すべき観点として、舞踊運動の時間、身体各部の移動距離や速度等の物理量に着目し、それらの分析結果をどのように表示するのかを検討するとともに、典型的な舞踊運動の変容を取り上げて、それらの物理量による裏づけを試みた。さらにそれらを踏まえて、あらためて舞踊分析への 3 次元動作解析の導入の意義と、舞踊運動における体感という主観的指標に関する実証研究への応用可能性について述べる。

### 1. 分析の対象とした舞踊運動

異なる感情を内包することを想定して作成した 3 つの舞踊運動について、被験者が 1 週間おきに合計 5 回踊り、踊った直後の体感を求めた。また、これら 3 種類 5 回分の舞踊運動のうち、1 回目、3 回目、5 回目の舞踊運動を同期された 4 台のビデオカメラを用いて撮影・収録した。そして、得られた映像から 3 次元 DLT 法により、舞踊運動における動作分析を行った。なお、被験者は 13 名であったが、ここでは、5 回の舞踊運動の変容が段階を追って現れた典型的な運動の中から女子学生 1 名の舞踊運動を取り上げて分析した結果を報告する。

### 2. 舞踊運動の動作分析の基本的な流れ

舞踊運動の動作分析の基本的な流れは以下の通りである。

まず最初に、各舞踊運動について、身体の 25 測定点の 3 次元位置座標を 1/30 秒単位で取得し、これを分析のために基礎データとした。なお、身体の 25 測定点とは以下の各部位である。

頭頂	耳珠点	胸骨上縁	右手先	右手首	右肘	右肩
左手先	左手首	左肘	左肩	右つま先	右母指球	右踵
右外果	右膝	右大転子	左つま先	左母指球	左踵	左外果
左膝	左大転子	右肋骨下	左肋骨下			

次に、これら 25 の身体部位測定点の基礎データから、各舞踊運動における、身体全体の重心および各部位ごとの重心を 1/30 秒刻みで算出した。重心算出によって部位数は縮約され、結果的に 15 部位となった。

このようにして、基礎データから換算によって得られた諸データと、舞踊の専門家が変容したと判断した舞踊運動とを照合することによって、舞踊運動の変容を物理量で裏づける試みを行った。照合および討議のために作成した図は以下である。

- ① 身体各部位の重心位置の移動距離および速度の時間変化 (図1, 図2)
- ② 身体各部位の重心位置の総移動距離および平均速度, 速度域 (図3, 図4, 図5)

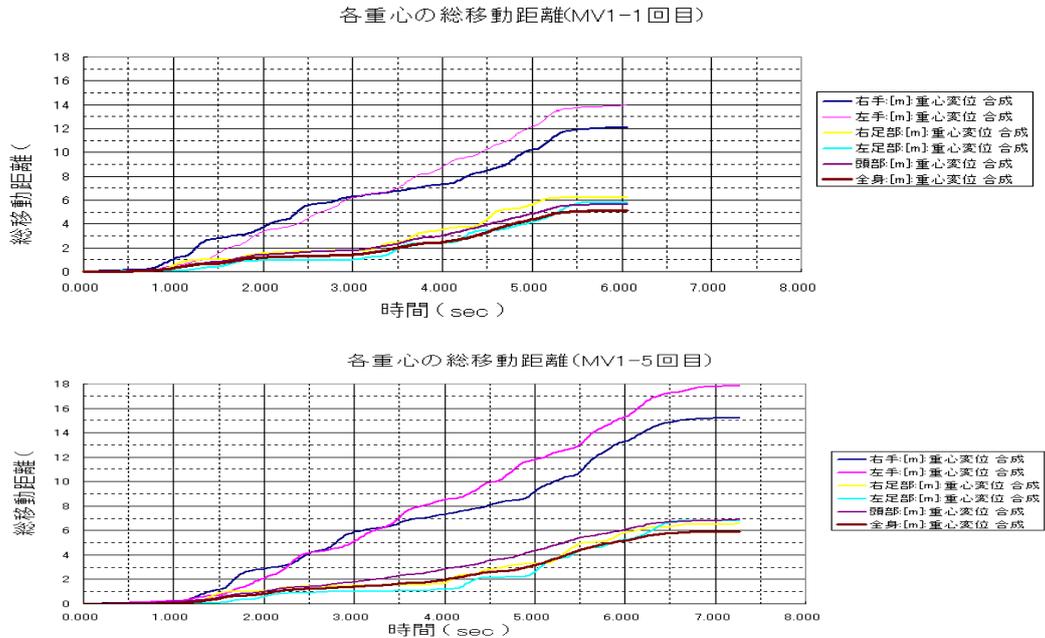


図1 身体部位の重心の総移動距離の時間変化(舞踊運動1)

- ③ 身体各部位の重心位置の高さの時間変化 (図6, 図7, 図8)

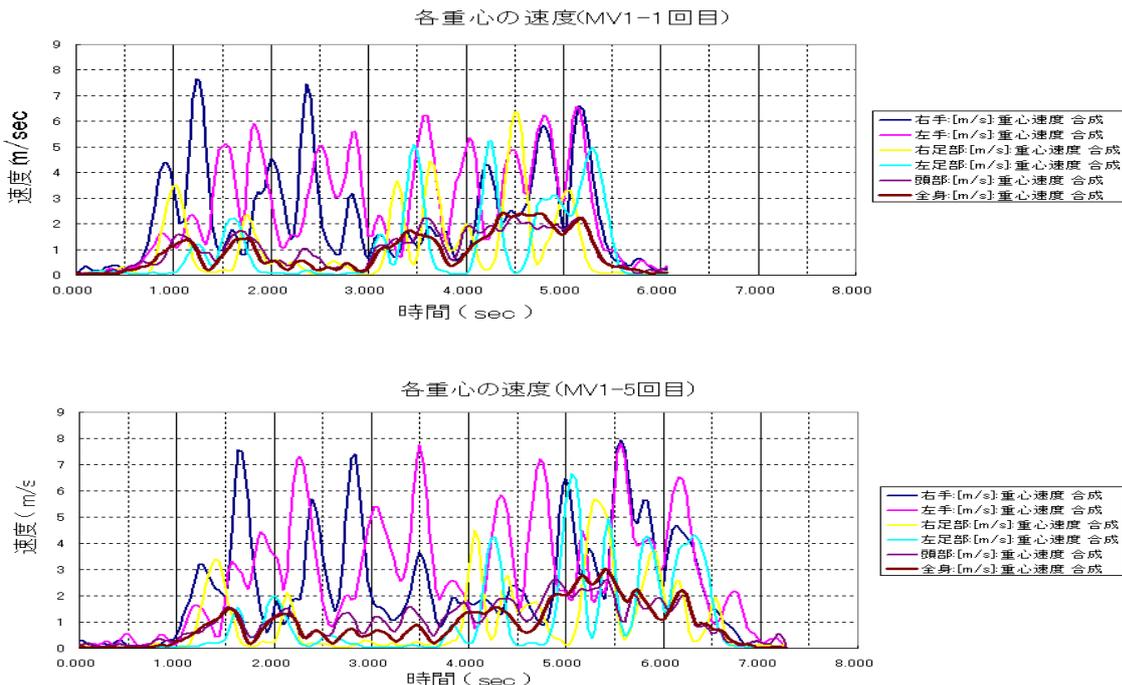


図2 身体部位の重心の速度の時間変化(舞踊運動1)

## 2-1. 各部位の総移動距離および速度の時間変化

図1は、舞踊運動1における第1回目と第5回目の運動を比較したもので、代表的な身体部位の各重心の総移動距離の時間変化を示したものである。また図2は、同様に、身体部位の速度の時間変化を示したものである。こういったデータの時間変化を見ることによって、ひとつの流れ全体のなかで物理量がどのように変化しているのかを読み取ることができる。

## 2-2. 時間経過を伴わない身体各部位の動きの特徴

次は、時間経過を伴わない身体各部位の動きの特徴を見た。図3は、舞踊運動2における第1回目、第3回目および第5回目の運動を比較したもので、代表的な身体部位の各重心の移動距離を示したものである。また図4は、同じく舞踊運動2における身体部位の各重心の速度を、図5は舞踊運動3における速度域を示したものである。

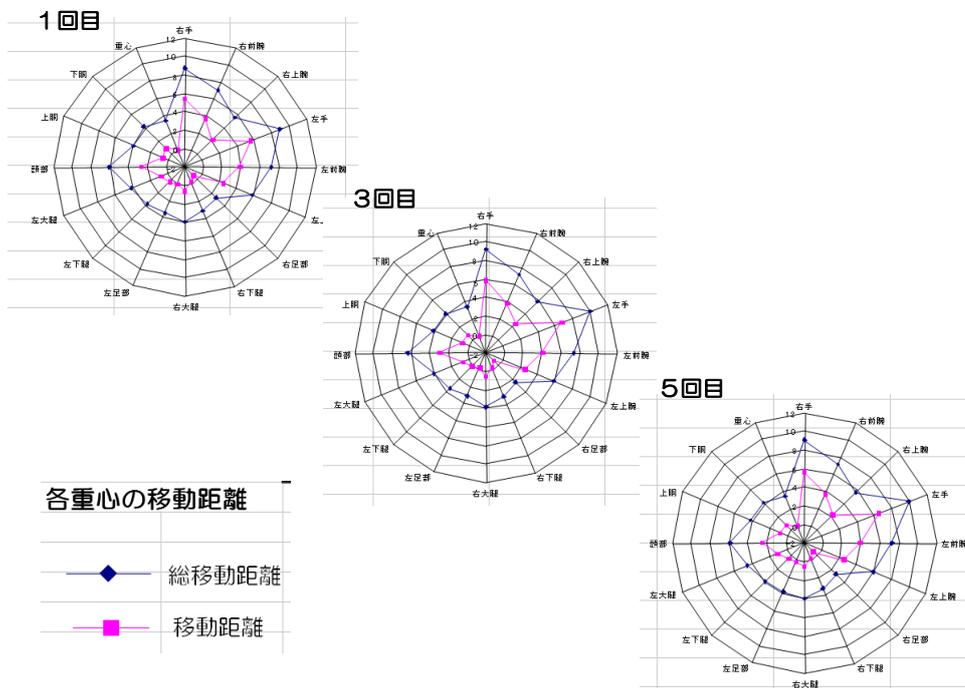


図3 各部位重心の移動距離(舞踊運動2)

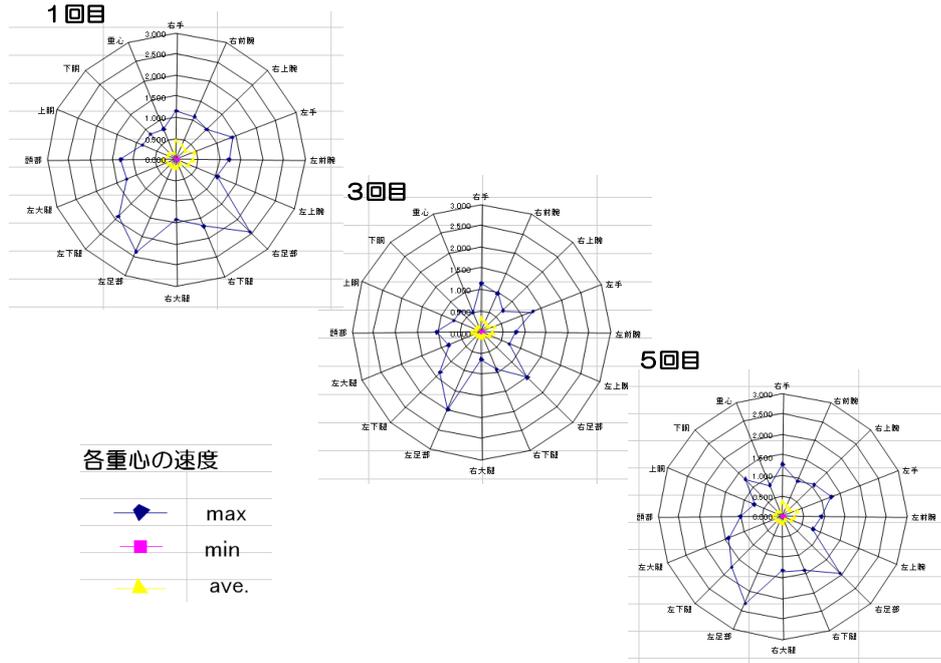


図4 各部位重心の速度(舞踊運動2)

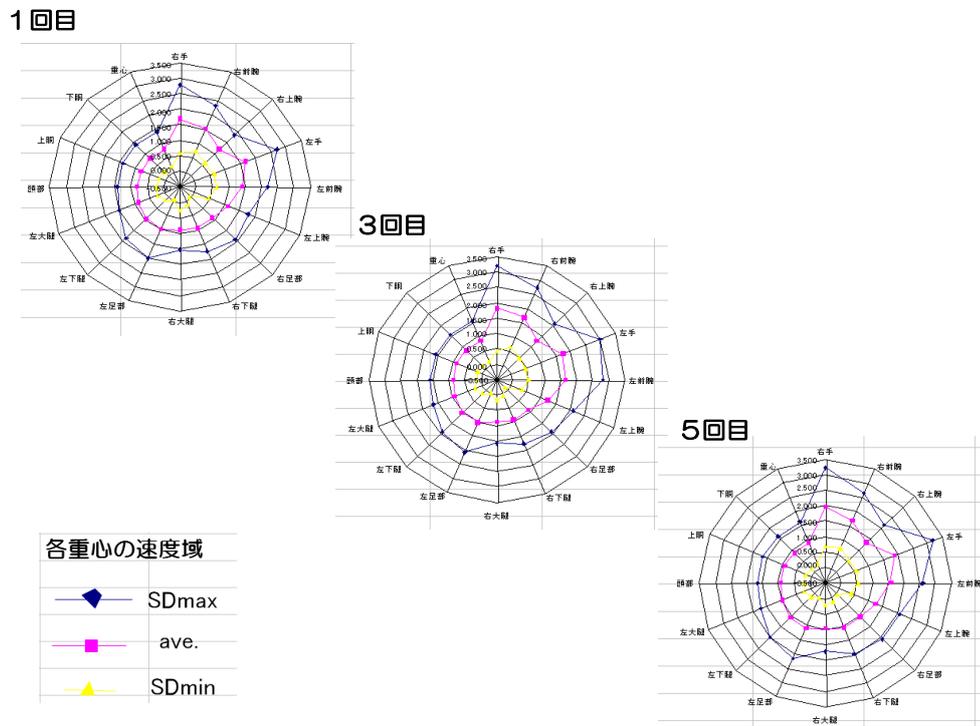


図5 各部位重心の速度域(舞踊運動3)

### 2-3. 各部位の高さの時間変化

図6は、舞踊運動2の第5回目における身体各部位の高さの時間変化を表したものである。

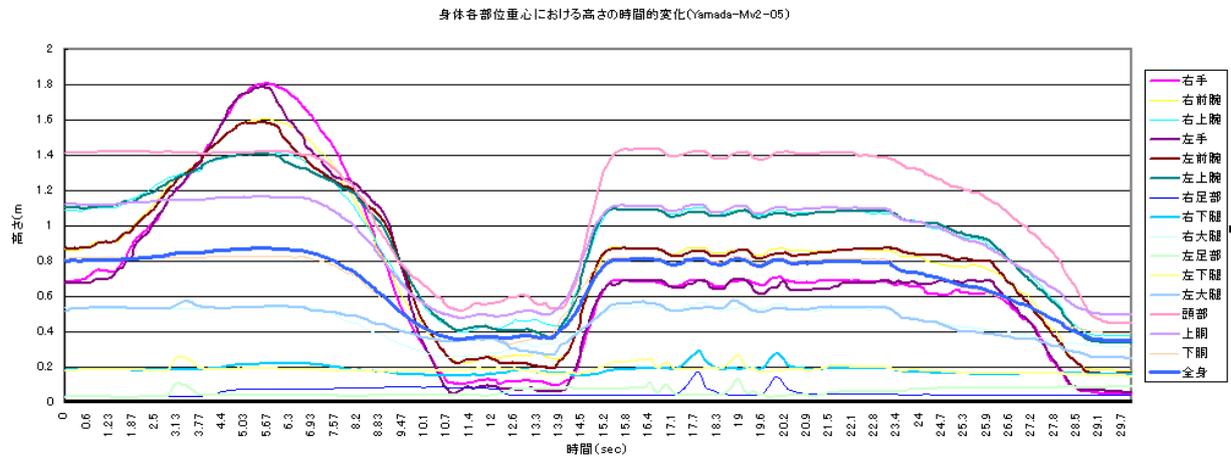


図6 各部位重心の高さ(舞踊運動2)

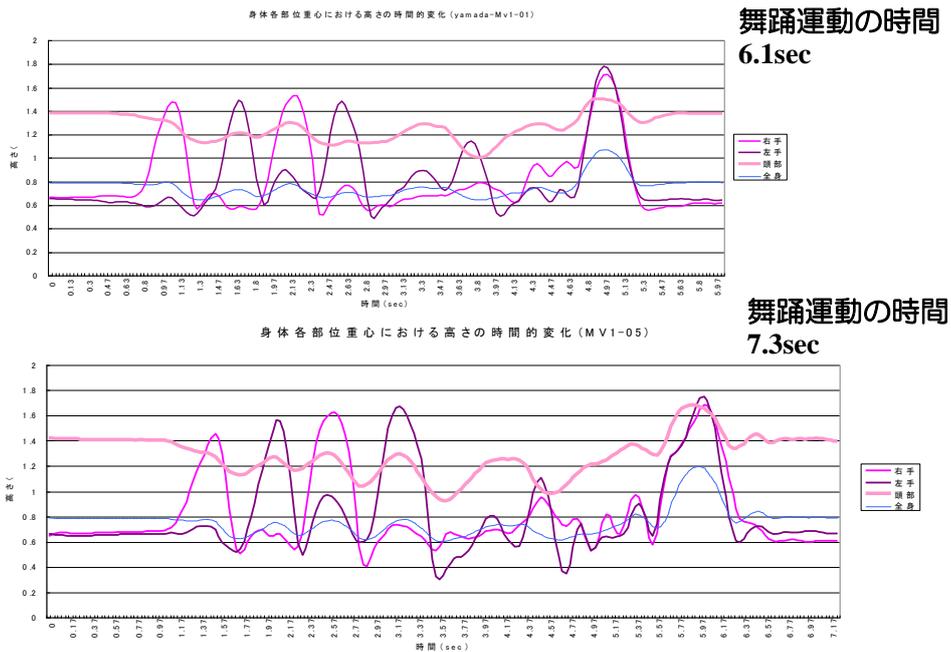


図7 舞踊運動1におけるジャンプ

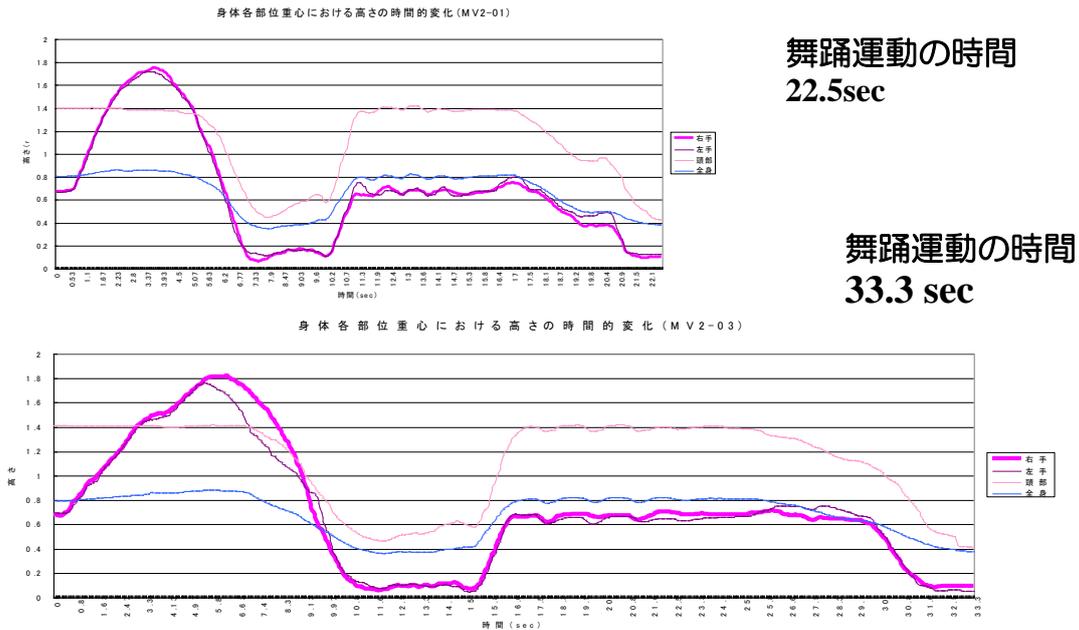


図8 舞踊運動2の冒頭(伸縮)

### 3. 分析 (例)

ここでは、5回の舞踊運動の繰り返しにおいて、舞踊の専門家によって変容が観察された例を取り上げ、その変容が物理量にどのように反映されているのかを見てみよう。まず観察されるのは、舞踊運動全体の長さが回数を重ねるに従って長くなっていくことがわかる。具体的には、舞踊運動1については第1回目の6.1秒から5回目の7.3秒に、舞踊運動2については、同様に22.5秒から30.0秒に、舞踊運動3については、8.7秒から9.9秒といった具合である。

同一舞踊運動内において、一つの動きから次の動きへと移行する際の動きの特徴についてはどうであろうか。その際の物理的特徴が抽出（移動距離や速度）できるであろうか。たとえば、舞踊運動1における最後のジャンプの前後の動きを見てみよう。舞踊運動1における最後のジャンプは、直前動作から沈み込み、そしてジャンプして着地、最後に立つという一連の動きから構成されている。図7は該当箇所の身体各部位の重心位置の高さの時間変化を示したものであるが、1回目（図上）は平坦で冗長であるのに対して、5回目（図下）はコンパクト（時間的に）に、かつジャンプ幅が大きくなっていることがグラフから一目瞭然である。

別の例として、舞踊運動2の冒頭（伸縮）の部分を見てみよう。これは、スタートして伸びる・縮む・回転という一連の動きから構成されている。図8は舞踊運動2の第1回目（図上）と第3回目（図下）の運動における身体各部位の重心位置の高さの時間変化を示したものであるが、第3回目は第1回目と比較して、舞踊運動の時間が大きく延びている。また動きに関しては、ゆっくりと大きく伸び上がり、ゆっくりと縮み、そしてゆっくり回転する、といった顕著な変化が見られる。

注意すべきことは、本研究における移動距離、速度変化等は X, Y, Z 方向の各成分ではなく、それらを合成した値に基づいている点である。一般に舞踊運動の解析においてはこれまでフロア

パターン上、すなわち2次元平面上の議論が主流であったが、3次元動作分析の手法を導入することによって、フローパターンの移動に加えて高さの移動距離も加わり、一方向視では捉えられない客観的な舞踊運動の動きの実態をより正確に捉えることが可能となる。

#### 4. 考察

これまで述べたような物理的指標によって舞踊運動を観察した場合、その一般的な特性を捉えることが十分可能であることが示唆されたと言えるだろう。本研究は、もともと、舞踊運動における体感という主観量を、物理量という客観的なものへ翻訳可能であるかどうか、また可能だとすればどのような変換原理が成り立ち得るのか等について探ることが目的であった。もちろんその目的が達成されたわけではなく、その端緒についたばかりであるが、少なくとも身体各部位に関する3次元位置情報の時系列データの分析は、踊り手自身の舞踊運動の大きさに対する体感(主観的距離)との関係を実証的に論じていくうえで極めて有効な手法となると言って決して過言ではない。

ここで紹介したような3次元動作解析で得た物理量によって、舞踊運動のすべてが語れるわけでないことは言うまでもない。すなわち身体を複数の部位に分解し、その各部位の物理量の変化の特徴の組み合わせによって舞踊運動全体を論じようとする考えそのものが、まさに要素還元的な手法なのであり、一方で舞踊運動のゲシュタルト性を主張する姿勢とは根本的に相容れない構造的な矛盾を孕んでいることを忘れてはいけない。しかし、ゲシュタルト性を前面に押し出した途端にわれわれは再び観念的、形而上学的な議論に陥ってしまうこともまたよく知っているのである。われわれは、その困難性を認識し、またその困難を克服できない歯がゆさを感じつつも、より誠実に、より深く、そしてより客観的に、舞踊を論じ、語っていくためのあらゆる可能性を探求したいと考えている。

## 舞踊運動の動作解析の観点を巡って

柴 眞理子（神戸大学）

前田正登（神戸大学）

山田敦子（高知大学）

坪倉紀代子（十文字学園女子大学）

### 1、舞踊運動の特性を抽出するための物理的なパラメータ

動作解析には動作の速度、移動距離、軌跡、加速度など、多くの解析の観点があり、その解析結果を表現する方法にも各種のグラフ、スティックピクチャなど多くある。平成13年度に着手した「舞踊運動の習熟と体感からみた舞踊運動の感情価」に関する研究では、3次元DLT法を用いて、多様な解析の観点、分析結果の表現方法の中から舞踊運動の特質を捉える観点とそれを表現するのにふさわしい方法を探ってきている。そこでは、本研究で作成した8つの舞踊運動を撮影した映像からそれぞれの画像ごとにデジタイズし、身体各部（阿江のモデルによる身体の23点）の画像上における座標値を得、その上で、身体各部位の重心の変化、総移動距離、平均速度、高さの変化、鉛直速度、角速度など、様々な観点から解析を行い、それぞれの観点からの解析は舞踊運動のどのような特質を捉えることができるのかを検討してきた。そのプロセスで、合理的な動きを追求することによってパフォーマンスの向上を目指すスポーツでは、既に、動作解析が多く行われ、どのような観点からの解析がスポーツ動作のどのような特質を解明することに繋がるかが知られているのに対し、様々な身体の動きから成る舞踊運動においては、ある舞踊運動では総移動距離が、またある舞踊運動では平均速度が、その舞踊運動の特質を最もよく表すことがわかった。逆に言うなら、ある舞踊運動では平均速度をみることに意味がなく、ある舞踊運動では総移動距離をみることに意味がないと言え、それぞれの観点からの解析に意味があるかないか比較することで舞踊運動の特質をみるということは可能であろう。しかし、筆者らはそれぞれの舞踊運動がもつ特質を明らかにしつつ、他の舞踊運動との異なりを明らかにすることが可能となる解析の観点を見出すことが必要であると考えた。そこで、舞踊運動の特質を共通にみることでできる解析の観点を見出すために、舞踊研究者3名が（山田・坪倉・柴）、9つの舞踊運動の映像を詳細に観察し、解析の観点について協議を行った。

その結果、「身体各部位の高さの変化」が舞踊運動の特性を抽出するためのパラメータとなるという仮説を導きだした。

### 2、仮説の検証

「身体各部位の高さの変化が舞踊運動の特性を抽出するためのパラメータとなる」という仮説を、3つの舞踊運動の相互の variation、即ち9つの舞踊運動の動作特性を解析していく中で検証することとした。この「3つの舞踊運動の variation の動作特性」については、前田が第57回舞踊学会で発表を行ったので、そちらに詳しい。ここでは、そこでの動作分析の結果から、仮説が検証され、舞踊運動の特性を抽出するには、身体各部位の高さの時間変化が有効な指標とな

り得ることが明らかになったことを述べておきたい。

### 3、分析の対象とした9つの舞踊運動の相互関係

分析の対象とした9つの舞踊運動とは、筆者らが舞踊における基本感情を表す舞踊運動として策定した8つの舞踊運動の中の3つ（楽しい・怒り・悲しい）と、それらの variation が6つである。この9つの舞踊運動を分析対象とした理由は、「3つの舞踊運動の variation の動作特性」を明らかにすることを通して、上述の3次元 DLT 法を用いて舞踊運動を解析する際のパラメータに関する仮説の検証と同時に、そもそも、基本となる8つの舞踊運動を策定するにあたって、筆者らがそれぞれの感情を内包する舞踊運動のコアと考えた運動特性は、妥当なものであったかどうかを検討することも視野に入れてのことであった。

基本となる舞踊運動のコアと考えた運動特性は以下の通りである。

『楽しい』を内包する舞踊運動 弾む・軽やかな

『怒り』を内包する舞踊運動 急変的

『悲しい』を内包する舞踊運動 縮小的・ゆっくりした

そして、これら3つの舞踊運動を原型として、そこから、例えば『楽しい』から、『怒り』を内包する variation と、『悲しい』を内包する variation の2つを創ることを舞踊家に求め、そこで創られた舞踊運動を分析の対象とした。『怒り』『悲しい』についても同様である。

従って対象とした舞踊運動は次の9つである。

- ①『楽しい』原型②『楽しい』原型→『怒り』の variation③『楽しい』原型→『悲しい』の variation
- ④『怒り』原型⑤『怒り』原型→『楽しい』の variation⑥『怒り』原型→『悲しい』の variation
- ⑦『悲しい』原型⑧『悲しい』原型→『怒り』の variation⑨『悲しい』原型→『楽しい』の variation

前田が上記の9つの舞踊運動の動作特性を明らかにした結果、舞踊家の体感によって作成した6つの variation について、舞踊家は、variation のための共通な方法としてデザイン（空間性）の特徴を保ちつつ、時間性、力性の性質を変化させていることを明らかにしている。

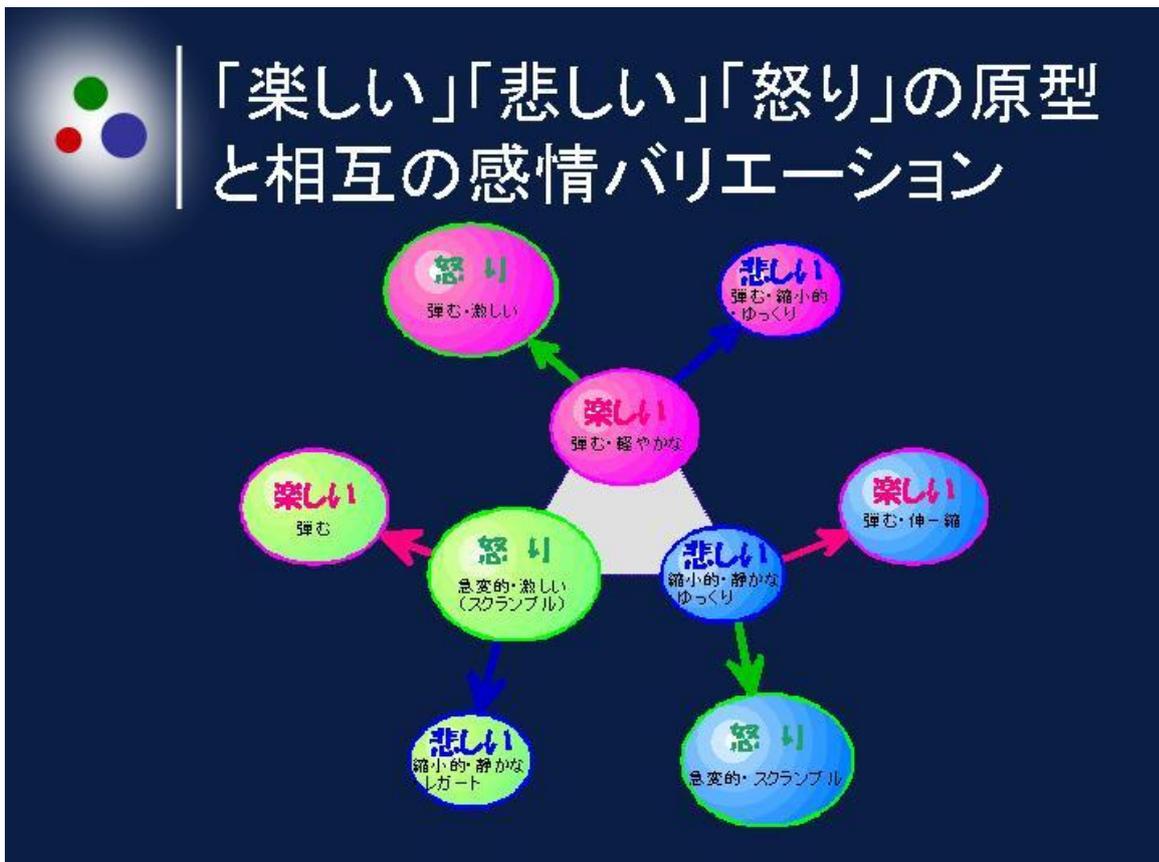
前田の分析結果について、9つの舞踊運動を詳細に観察し、舞踊運動の特性を捉える観点を主観的に導出した舞踊研究者と、その観点から舞踊運動の物理的特性を客観的に示した前田と深い協議をする場をもつことができなかったが、主観的に捉えた舞踊運動の動作特性と、動作解析の結果を照合することによって、『楽しい』『悲しい』『怒り』の原型とそれらの variation の関係は以下の図のように表示することができる。例えば、弾む・軽やかなという運動特性をもつ『楽しい』から、『悲しい』の variation では、『楽しい』の運動特性のうち、弾むという特性を保持しつつ、縮小的・ゆっくりといった『悲しい』の運動特性が存在し、両者の特性を合わせ持つ舞踊運動になっており、『楽しい』から、『怒り』の variation においては、同様に、弾むという特性を保持しつつ『怒り』の舞踊運動がもつ急変的という運動特性がでており、ここでも両者の特性を合わせ持つ舞踊運動になっていることがわかる。

例外は『怒り』から『楽しい』の variation にみられ、そこでは、弾むという『楽しい』舞踊運動がもつ運動特性のみとなっている。

楕円の大きさはエネルギーの大きさをシンボリックに表したものである。このように3つの舞踊運動の variation の動作特性の相互関係をみることによって、3つの『楽しい』舞踊運動に共

通ずる運動特性は「弾む」、3つの『悲しい』舞踊運動に共通する運動特性は「縮小的」、また3つの『怒り』舞踊運動に共通する運動特性はみられず、「激しい」「急变的」がそれぞれ2つの『怒り』舞踊運動に共通していること、エネルギーは『怒り』>『楽しい』>『悲しい』となると考察された。

しかし、エネルギーを動作解析からより客観的に捉える観点とその方法を考案することが課題として残されている。



## 3 つの舞踊運動の variation の動作特性

前田正登・小高直樹・柴眞理子（神戸大学）  
山田敦子（高知大学）  
坪倉紀代子（十文字女子大学）  
山木美紗子（神戸大学大学院）

### 【緒言】

3次元 DLT 法は、スポーツにおける動作をはじめ人間のさまざまな動作を対象に、例えば、その速度、移動距離、角度、加速度、軌跡など多くの観点から解析し、それぞれの動作の物理的特性を浮き彫りにする。このように動作解析には多くの観点があるが、舞踊運動を解析の対象とする場合、どのような観点からの解析が、舞踊運動の特質を浮き彫りにするのだろうか。

本研究は、3次元 DLT 法を用いて舞踊運動を解析する際の観点を導出し、その観点から「楽しい」「悲しい」「怒り」を内包する舞踊運動の動作解析を行い、それぞれの舞踊運動の動作特性を明らかにすることが目的である。

### 【分析対象の舞踊運動】

分析の対象とした舞踊運動は以下の 9 つとした。

- ◇ 「楽しい」 原型
- ◇ 「楽しい」 の原型からの「怒り」 の variation
- ◇ 「楽しい」 の原型からの「悲しい」 の variation
- ◇ 「怒り」 原型
- ◇ 「怒り」 の原型からの「楽しい」 の variation
- ◇ 「怒り」 の原型からの「悲しい」 の variation
- ◇ 「悲しい」 原型
- ◇ 「悲しい」 の原型からの「怒り」 の variation
- ◇ 「悲しい」 の原型からの「楽しい」 の variation

原型からの variation は、舞踊家が以下の条件の下に、自身の体感により創った。

**条件 1:** 原型の核となる動きの特性は保つ。

**条件 2:** 変化させる運動の核を際立たせる。

これら 9 種類の舞踊運動を同期された 4 台のビデオカメラを用いて撮影・収録した。そして、得られた映像から 3次元 DLT 法により、各舞踊運動における動作分析を行った。

各舞踊運動について身体 25 箇所 of 測定点をデジタイズし（阿江，1996）、身体各部位および身体重心の座標、さらにそれら測定点についての移動距離や速度の時間変化などを得た。

### 【舞踊運動の主観的分析と舞踊運動の特性を抽出するための指標】

9 つの舞踊運動をビデオ映像で詳細に観察し、舞踊運動の特性を抽出するための物理的なパラメーターについて検討した。その結果、舞踊運動の特性を抽出するための物理的なパラメーターは、**身体各部位の高さの時間変化**である、との仮説を導出するに至った。

図 1a～図 1c は「楽しい」原型における身体各部の平均位置変位を示したものであり、図 1a は被験者の前後方向の、図 1b は被験者の左右方向の、図 1c は被験者の上下方向の平均位置変位

をそれぞれ示している。したがって、「楽しい」原型の全般にわたって、平均位置は身体を中心（身体重心とほぼ同義と考える）からの相対的距離を示し、標準偏差は身体を中心との距離がどの程度変位したかを示すものとなる。

「楽しい」原型は3つ舞踊運動の中でも被験者の動きが広範囲となる運動であり、図から、身体を中心より遠い（遠位）測定点ほど変位が大きいことがわかる。また、各部位の平均位置は前後方向と左右方向では部位間に大差はないものの、上下方向では部位間で大きな差となっている。これらことは人の構造に由来するもので当然の結果とも言えるが、本研究のように、舞踊運動を行っている人の動きからその運動の特性を抽出するには、身体各部の上下方向の変位が有効な指標となり得るものと考えられる。

### 【9つの舞踊運動の3次元動作解析】

図 2a と図 3a は「悲しい」原型及び2つの「悲しい」の variation における、頭頂点と右手先それぞれの鉛直方向（z 座標）の時間変化を示したものである。図 2b 及び図 2c、図 3b 及び図 3c は「悲しい」の2つの variation における頭頂点と右手先それぞれの鉛直方向（z 座標）の時間変化を、「悲しい」原型の時間スケールに合わせて示したものである。図 2a と図 3a のように、「悲しい」の2つの variation の運動時間は「悲しい」原型とも異なっている。また、高さの時間変化は、大まかな推移を見るといずれも原型のものによく対応しているが、対応している局面に限定してみると同様の時間変化にはなっていない。（図 2b と図 2c、図 3b と図 3c を参照）

図 4 は「悲しい」原型及び2つの「悲しい」の variation における、頭頂点と右手先それぞれの鉛直速度域の出現頻度であり、3つの舞踊運動において頭頂点と手先がどの程度の速度域で動いていたかを示している。最も多い速度域は、3つの舞踊運動のいずれも 0.2~0.4m/s の速度域であり、3つの舞踊運動は-1.0m/s より小さい速度や 1.2m/s を超える速度での動きはほとんど無いことがわかる。さらに、「悲しい」原型の速度域は最頻値である 0.2~0.4m/s の速度域に集中しており、対照的に2つの「悲しい」の variation は「悲しい」原型より広範囲の速度域で構成されていることがわかる。

これらのような特徴は、「楽しい」や「怒り」の原型及び variation に同様に認められた。すなわち、これらのことは、舞踊家が variation のための共通な方法として、デザイン（空間性）の特徴を保ちつつ、時間性・流れ（ダイナミクス）の性質を変化させていたことを示すものであると考えることができる。

### 【結言】

本研究では、3次元 DLT 法を用いて舞踊運動を解析する際の観点を導出し、それぞれの舞踊運動の動作特性を明らかにすることが目的であった。本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- ◇ 動作分析の結果から、舞踊運動の特性を抽出するには、身体各部位の高さの時間変化が有効な指標となり得ることがわかった。
- ◇ 舞踊家は、variation のための共通な方法として、デザイン（空間性）の特徴を保ちつつ、時間性・流れ（ダイナミクス）の性質を変化させていた。

今後、さらに詳細な検討を行い、舞踊運動を解析する際のより有効な指標を探求する必要がある。

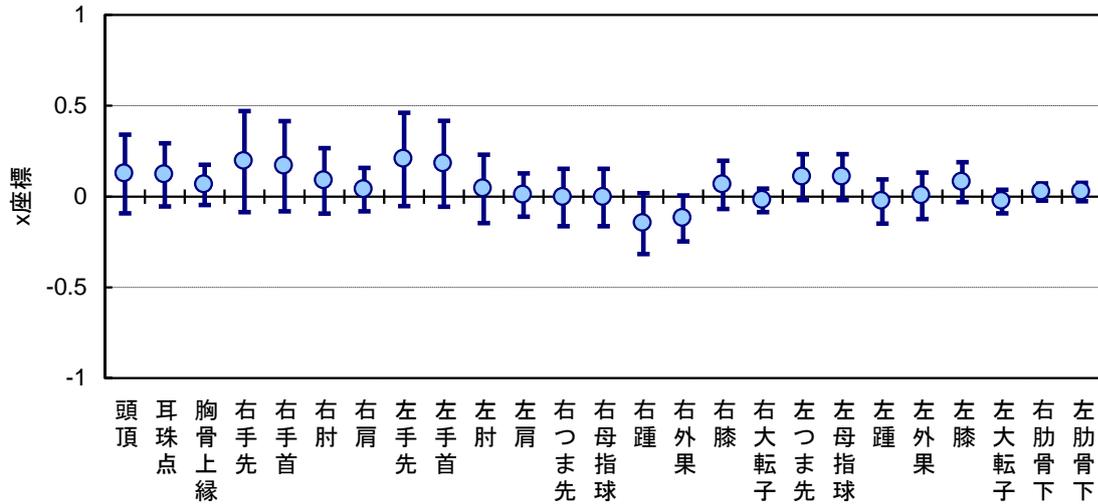


図 1a 「楽しい」原型における身体各部の前後方向の平均位置変位

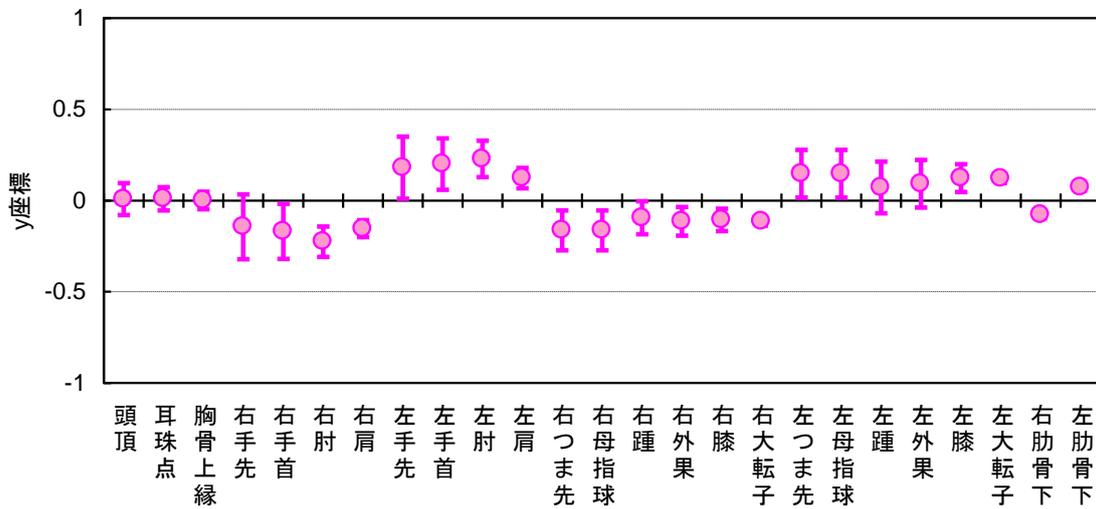


図 1b 「楽しい」原型における身体各部の左右方向の平均位置変位

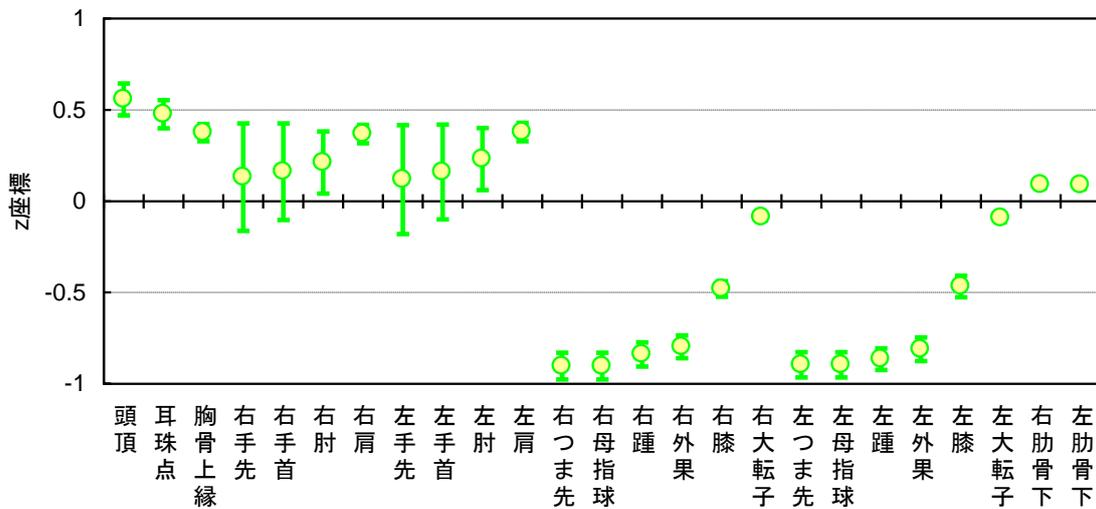


図 1c 「楽しい」原型における身体各部の上下方向の平均位置変位

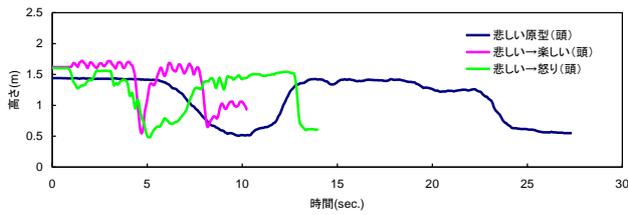


図 2a 「悲しい」の原型と variation における頭部の高さ変化

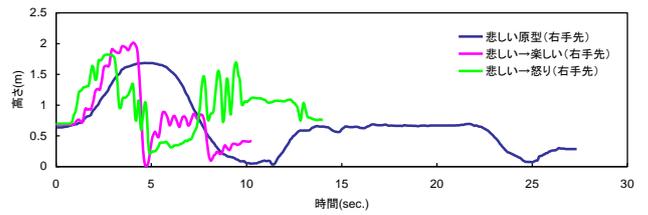


図 3a 「悲しい」の原型と variation における手部の高さ変化

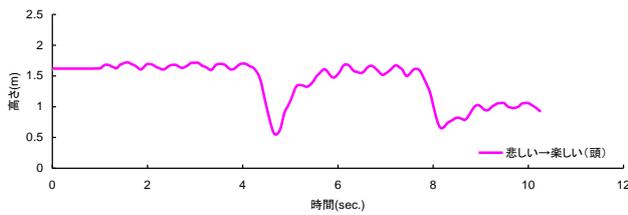


図 2b 「楽しい」の variation における頭部の高さ変化

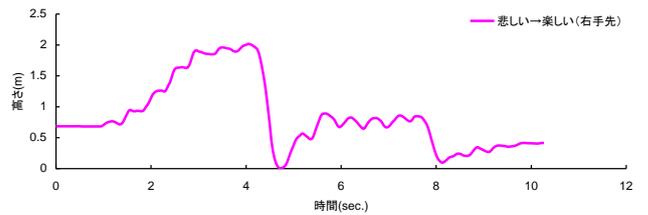


図 3b 「楽しい」の variation における手部の高さ変化

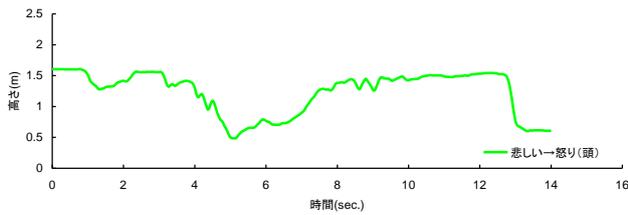


図 2c 「怒り」の variation における頭部の高さ変化

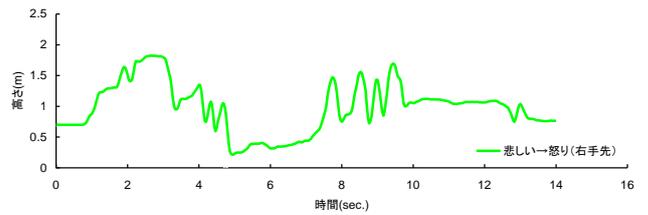


図 3c 「怒り」の variation における手部の高さ変化

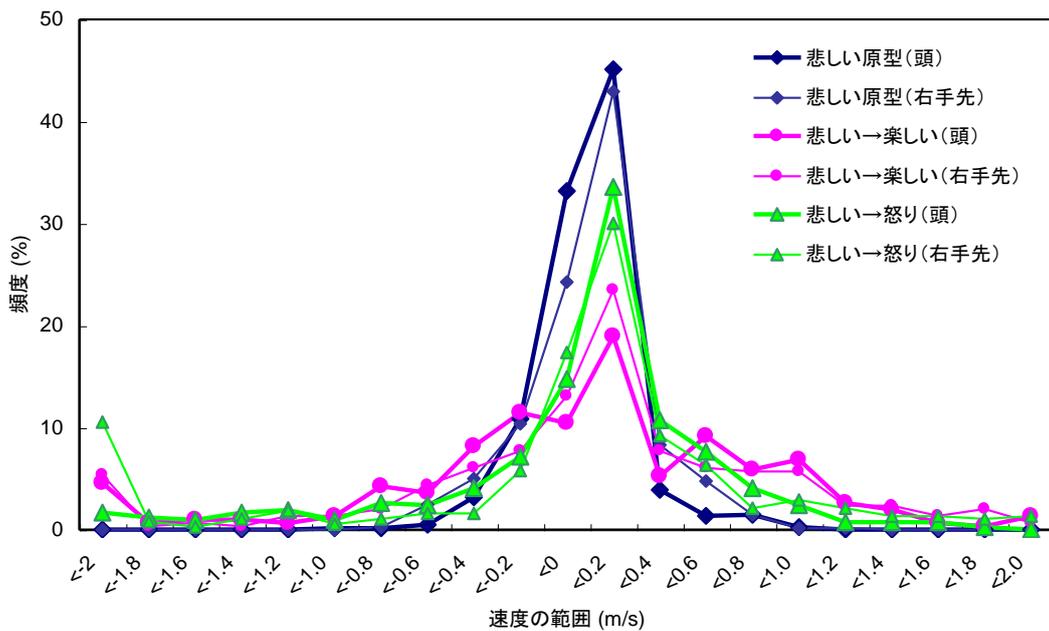


図 4 身体各部位の鉛直速度(各舞踊運動全体に占める割合)

2005年11月16日 日本舞踊学会大会（立命館大学）口頭発表（発表者 米谷 淳）  
舞踊運動の体感の日中比較

○ 米谷淳、柴真理子、坪倉紀代子、付正紅

本研究は平成15年度から17年度までの科学研究費補助金基盤研究（B）（代表 柴真理子）の一環である。研究成果の報告に移る前に、先行研究である平成12年度から14年度までなされた科学研究費補助金基盤研究（C）（代表 柴真理子）に触れておく。

「異なる感性表現に共通する基本感情の検証と異文化比較」（柴 2003）と名付けられた研究では、書（漢字、かな）、舞踊、ピアノの3つの異なる芸術領域に共通する感情価について実験的に検討した。舞踊に関する実験のひとつでは、100名の舞踊経験のない日本人大学生に44の舞踊運動を呈示して、各刺激の印象を5つまでの単語（形容詞、形容動詞、名詞など）で記述させた。得られたデータをコーディングしたのち頻度を調べ、頻出語について変数と頻度の行列をつくって主成分分析をした結果、7つの主成分が抽出された。第1主成分と第2主成分をそれぞれX軸、Y軸にとって頻出した印象語（感情語）をマッピングしてみると図1のようになった。

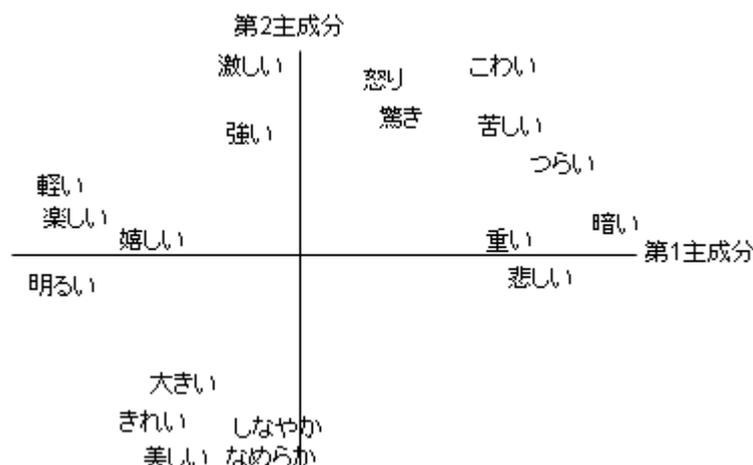


図1 舞踊運動を見て評価する場合の認知構造（柴 2003）

書、ピアノについて同様の評価実験を行った結果をもとに、19の形容詞対からなる共通のチェックリストを作成し、109名の日本人大学生に、改めて感情を強く表現する作品を作成・選定して提示して5段階評定をさせた。その結果、17の舞踊運動の評定結果を因子分析（バリマックス回転）したところ、「負の感情」「力動性」「動的美」「正の感情」「運動性」の5つの因子が得られた。

平成14年度で終了した研究では、舞踊運動を見た鑑賞者（評定者）の認知について検討したが、平成15年から開始された研究では、踊り手自身の「体感」を検討することにした。すなわち、さまざまな舞踊運動を踊っている最中の踊り手自身の「体感」からみた舞踊運

動の感情価を検討することにしたのである。本研究では体感に及ぼす文化差の影響を検討するために、日本人大学生と中国人大学生を対象に、感情価の高い舞踊運動を習熟させるセッション（体感実験）を実施し、両者の舞踊運動に対する体感と認知構造を比較検討した。本報告は分析1と分析2に分けられる。分析1では、日本人（女子）、中国人（女子）、中国人（男子）のそれぞれ評定結果を因子分析して評価項目間の関係を比較する。分析2では、3つのデータセットをひとまとめにして主成分分析を行い、得られた主成分をもとに8つの舞踊運動の体感を比較する。

## 方法

### 被験者・実施時期・場所

#### 【中国】

上海中医薬大学学生 15 名（男子 8 名、女子 7 名）。彼らは実験のために参加したボランティアであり、ダンス学習の経験はない。なお、中国では初等・中等教育を通して学校でダンス学習を経験する機会はない。実験は 2004 年 10 月、上海中医薬大学体育館で行った。

#### 【日本】

十文字学園女子大学学生 32 名（女子）。彼女らは幼児教育学科の学生であり、幼児のための身体表現の授業を受講したが、いわゆるダンス学習の経験はない。実験は 2005 年 3 月十文字女子大学体育館で行った。

### 実験の手順

異なるを内包する「楽しい」「悲しい」「大きい」「激しい」「やさしい」「厳かな」「固い」「静かな」という 8 つの舞踊運動（柴ら 2003）を実験材料とした。8 つの舞踊運動のそれぞれについて、次に示す①～④を順に行った。これに先立ち舞踊運動「やさしい」を用いて練習試行を行った。

- ① 舞踊運動の呈示：1 つの舞踊運動を V T R で数回提示した。被験者は体育館でモニター T V の前に立ってこれを見た。なお、このとき実験者（指導者）から舞踊運動についての説明は一切していない。
- ② 練習：ビデオをみた学生は各自で、その動きができるように練習した。なお、練習中に舞踊運動を確認したい悲観者にはビデオを見せた。全員が踊れるようになったことを確認した後で、もう一度、全員がその舞踊運動を踊った。約 3 分かかった。
- ③ 体感の自己評価：柴ら（2003）が作成した 18 語からなるチェックリスト（表 1）から最大 5 語までを選択し、それぞれの体感の強さを 4 段階で評定させた。なお、中国人に対して使用した中国語のチェックリストの作成にあたっては、日本語を直接中国語に訳したものと、日本語をいったん英語に直し、その後で中国語に訳したものとをつきあわせながら、適切な感情語となるようにつとめた。
- ④ V T R 撮影：踊れるようになった舞踊運動をビデオカメラの前で躍らせて撮影し、V T R に録画した。中国人は 1 人ずつ、日本人は 2 人ずつ同時に撮影した。

表1 体感実験に用いた評定用チェックリスト†

v1 楽しい	v10 怒り
v2 嬉しい	v11 苦しい
v3 喜び	v12 怖い
v4 やさしい	v13 悲しい
v5 あたたかい	v14 寂しい
v6 幸せな	v15 冷たい
v7 穏やかな	v16 厳かな
v8 のびやかな	v17 神聖な
v9 優美な	v18 静謐な(静かな)

† 柴ら (2003) をもとに作成

## 結果・考察

### 【分析1】

分析1では日本人女子32名、中国人女子7名、中国人男子8名の3つのデータセットについて、因子分析（主因子法、バリマックス回転）して得た結果をもとに、評価項目間の関係性を比較し、各群の違いを検討した。その結果を表2にまとめる。表2に示すように各群ともによく似た変数（評価項目）間の関係性を示しているが、細部をみると文化差や性差があることがわかる。

それぞれの因子で負荷量の絶対値が最大の項目を調べてみると、「喜び」「あたたかい」「悲しい」のそれぞれが負荷量最大となっている因子が3群とも見られている。また、第4位までの項目をみると3群ともよく似た因子が抽出されていることがわかる。

文化差をみるために日本人女子と中国人女子を比較すると、因子1を除いて、対応すると思われる因子に含まれる項目は同じでないことがわかる。例えば、日本人女子の因子5は「あたたかい」「幸せな」の2つだけが負荷量が高いが、それと対応する中国人女子の因子3では、それら2項目以外に、「やさしい」「怒り（負）」の負荷量の絶対値が大きい。このように、舞踊運動を体感する場合には、文化によって基準のもつニュアンスの違いのようなものがあることが示唆される。

性差についてみると、中国人女子と中国人男子では、抽出された因子数も違うし、因子の内容（付加量の高い項目）もかなり異なっている。中国人男子の因子1は「静かな」「穏やかな」「苦しい（負）」「嬉しい」の付加量の絶対値が大きいですが、これに近い因子は中国人女子には見当たらない。一方、中国人男子の因子6は「のびやかな」「優美な」の付加量が大きく、日本人女子の因子2と類似しているが、こういう因子は中国人女子には見当たらない。中国人のデータ数は十分とは言えないので、このような性差についてさらに実験を行って検討する必要がある。

表2 3つの被験者群の因子構造の比較

群	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
日本人 女子	喜び 柔しい 嬉しい	荘厳な のびやかな 穏やかな やさしい	喜しい 静か	厳かな (逆) 苦しい 冷たい	あたたかい 幸せな		
中国人 女子	喜び 柔しい 嬉しい	穏やかな (逆) 荘厳な (逆) 寂しい 冷たい	あたたかい 幸せな やさしい 穏やか (逆)	厳かな 静かな	喜しい (逆) のびやかな 苦しい (逆)		
中国人 男子	静かな 穏やかな 苦しい (逆) 嬉しい	寂しい やさしい	あたたかい 嬉しい	寂しい 静かな 神秘的	柔しい 喜び	のびや かな 荘厳な 冷たい	喜しい

### 【分析2】

分析1では3群のデータセットごとに因子分析をして体感の認知構造を比較した。この方法では評定項目間の関係性を把握できるが、同じ舞踊運動がどのように「体感」されているかを検討するには直接評定値を比較するのも一つの方法である18項目をばらばらに比較することは煩雑であるだけでなく、類似した項目を別個に比較するので非効率である。そこで、統一した基準をつくり、それに基づいて各舞踊運動についての「体感」を比較することにした。分析2ではこうした作業を行う。

### 合成尺度（指標）の作成

日本人、中国人男女あわせて47名のデータをひとまとめにし、18の評定項目について主成分分析をした。その結果、固有値1以上の主成分が5つ抽出された(表3)。説明率は55.5%であった。つまり、この5つの主成分により全体の分散の55.5%が説明できることになる。

主成分分析により「喜び」「穏やか」「静寂」「荘厳」「温和」と名付けることのできる5つの主成分が抽出された。それぞれの回答者について5つの主成分得点を計算し、それらをもとに日本人と中国人の平均値を舞踊運動ごとに求めて比較してみた。図2は「喜びの因子」(第1主成分)と「穏やかな因子」(第2主成分)をそれぞれ横軸、縦軸にとって日本人、中国人の8つの舞踊運動に対する主成分得点の平均をプロットしたものである。⇄をつけたものは、体感(主成分得点)の日中差が大きい舞踊運動のものである。図2からわかるように、「楽しい」「悲しい」「激しい」「大きい」をモチーフとした舞踊運動では日中差が大きい。

さらに、5種類の因子得点について、舞踊運動ごとに日中差が統計的に有意かどうかをt検定により吟味したところ、6つの舞踊運動が1主成分以上に有意差がみられることがわかった。「楽しい」「悲しい」「激しい」「厳かな」をモチーフとした舞踊運動については5主成分中3因子に5%水準の有意差が認められた。

表3 舞踊運動の体感についての認知構造（主成分分析の結果）（N=47†）

		1	2	3	4	5
		喜び	穏やか	静寂	荘厳	温和
喜び	v18	0.644	-0.435	0.233	0.048	-0.095
楽しい	v1	0.600	-0.488	0.196	0.069	-0.151
嬉しい	v11	0.563	-0.408	0.222	0.007	-0.098
冷たい	v6	-0.473	-0.246	-0.051	0.269	-0.046
苦しい	v2	-0.454	-0.354	-0.374	0.107	-0.014
穏やかな	v7	0.143	0.590	-0.207	0.116	-0.089
やさしい	v4	0.240	0.562	-0.296	0.297	0.175
優美な	v12	0.253	0.541	-0.295	-0.019	-0.296
怒り	v10	-0.367	-0.520	-0.443	-0.106	0.008
怖い	v9	-0.365	-0.366	-0.346	-0.071	0.120
静かな	v3	-0.347	0.439	0.497	0.046	-0.033
寂しい	v5	-0.425	0.152	0.493	0.456	0.024
厳かな	v16	-0.261	0.100	0.280	-0.666	0.094
神秘的	v8	-0.053	0.352	0.250	-0.556	0.212
悲しい	v13	-0.396	-0.036	0.366	0.491	0.085
あたたかい	v14	0.287	0.316	-0.276	0.123	0.615
幸せな	v15	0.526	-0.179	0.070	0.173	0.548
のびやかな	v17	0.262	0.363	-0.171	0.104	-0.480

† 日本人女子 32 名、中国人女子 7 名、中国人男子 8 名

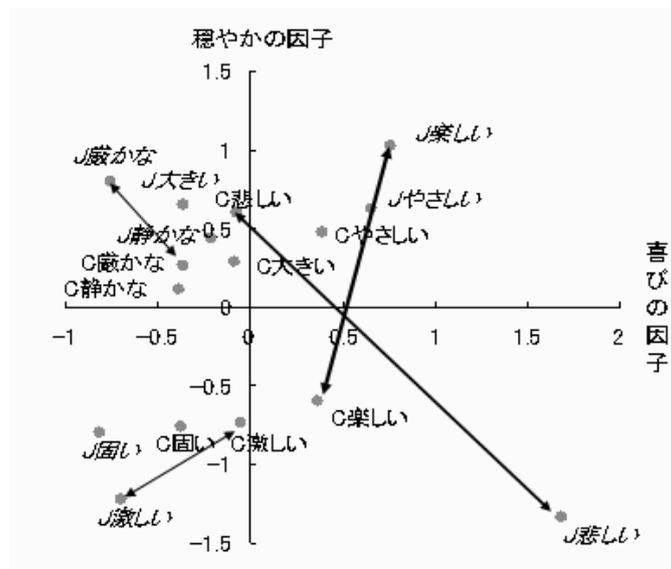
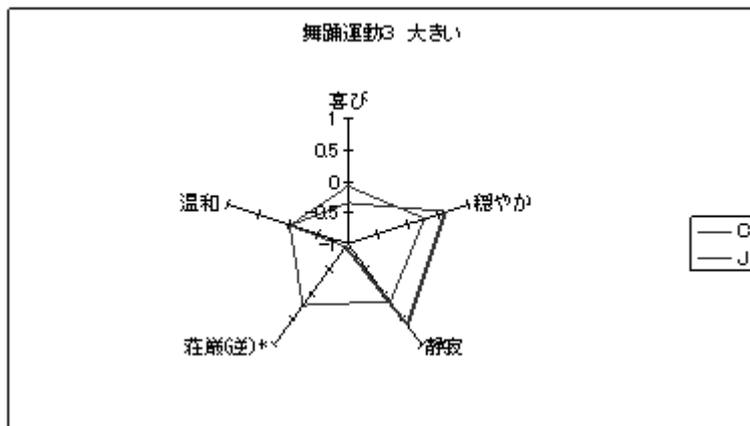
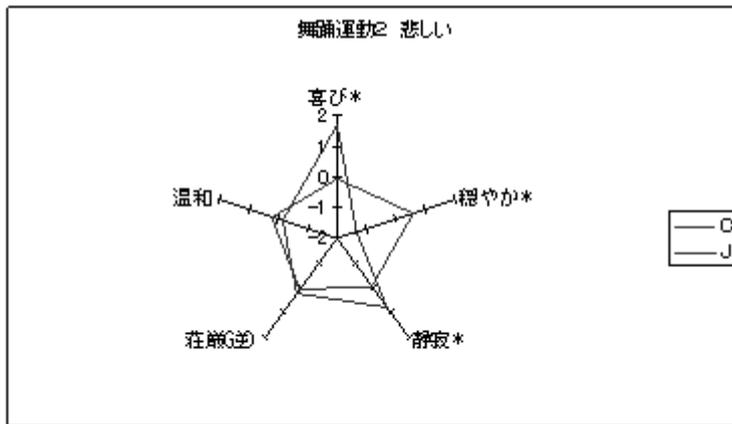
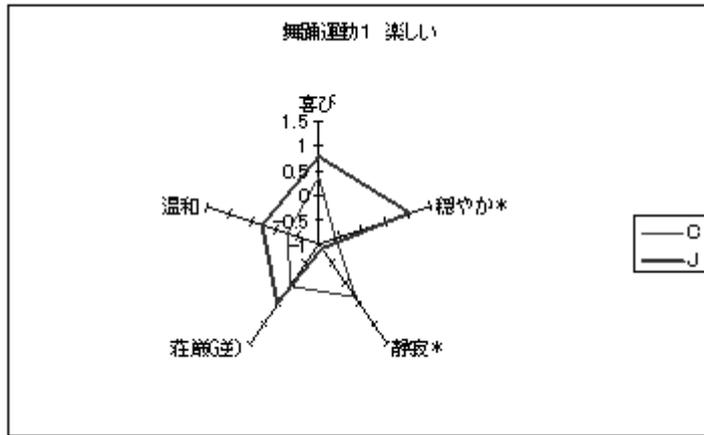
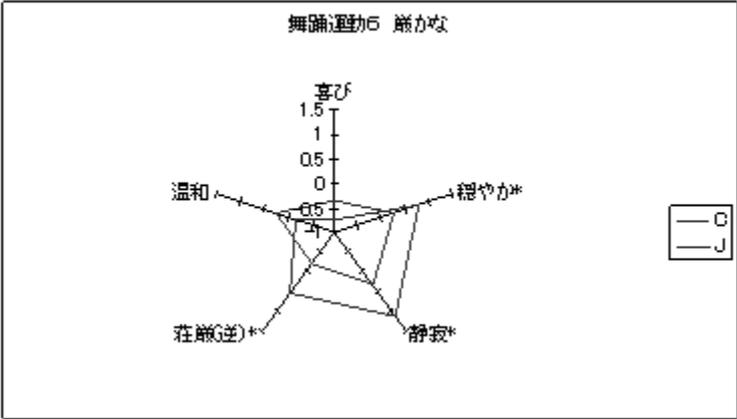
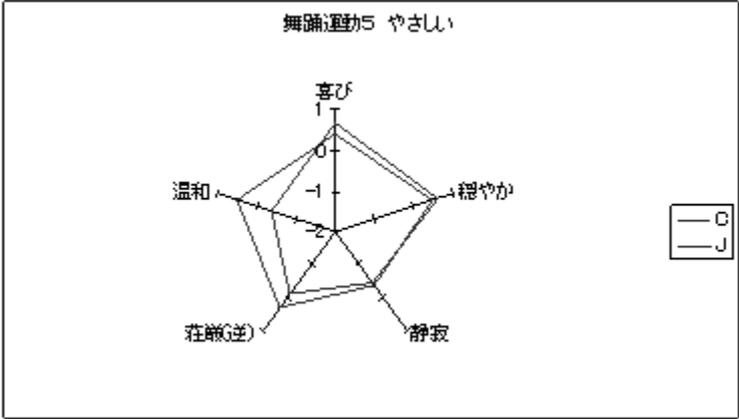
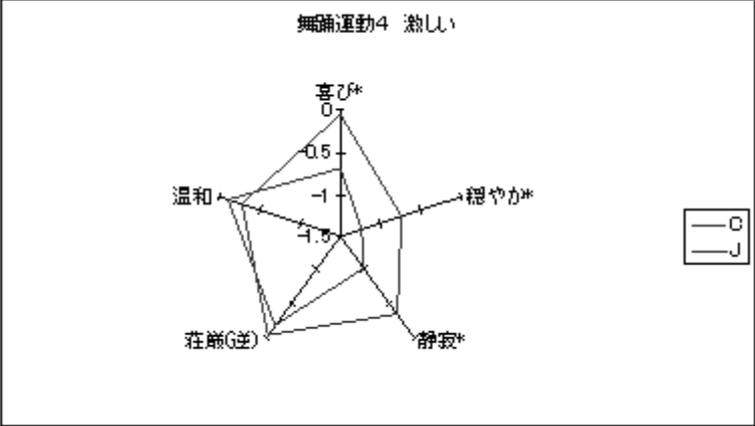


図2 8つの舞踊運動についての日中差†  
 († J:日本人、C:中国人)





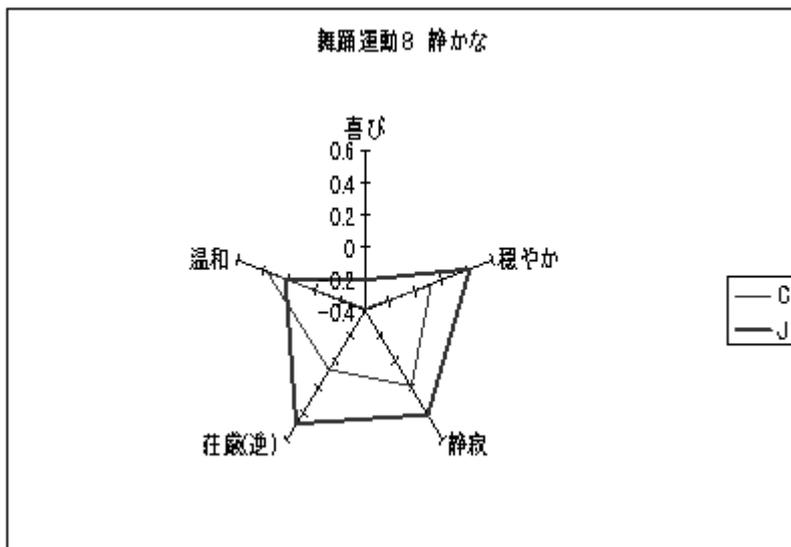
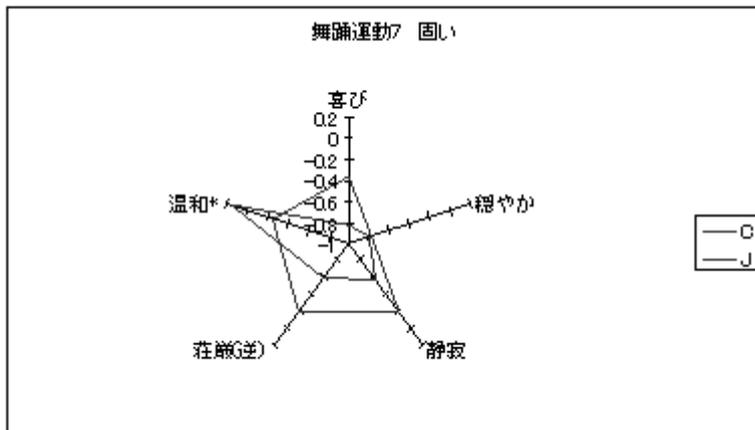


図3 舞踊運動の体感の日中比較

(\*がついている尺度については5%水準で日中差が有意)

なお、それぞれの評定項目について舞踊運動ごとに日中差を検討した結果と、上記の結果をつきあわせてみたところ、同じ主成分に属する評定項目でも有意差があるものがあることがわかった(表4)。

実験中に体感できるまでに要した練習回数(反復回数)を被験者に報告させていたが、この結果を分析したところいくつかの舞踊運動について日中差と性差が認められた(図5)。

表4 評定項目ごとにみた舞踊運動の体感の日中差†

		舞踊運動	5	3	6	4	1	8	2	7
			やさしい	大きい	激かな	激しい	楽しい	静かな	悲しい	固い
評定項目	因子1 喜び	18 喜び	J						C	
		1 楽しい	J				J		C	
		11 嬉しい					J		C	C
		6 冷たい								
		2 苦しい				J	C	J		
	因子2 穏やか	7 穏やかな					C		J	
		4 やさしい							J	
		12 優雅な						C		
		10 静り								
		9 怖い				J				
	因子3 静寂	3 静かな					J		J	
		5 寂しい			J					
	因子4 激かな(逆)	16 激かな		J						
		8 神聖な	J	J	J					
		13 悲しい					J			
	因子5 緩和	14 あたたかい					C			
		15 幸せな							C	
		17 のびやかな	J	J	J		C			C

†表中にある記号は、日中差が5%水準で有意であったもの。(J:日本人>中国人、C:中国人>日本人)

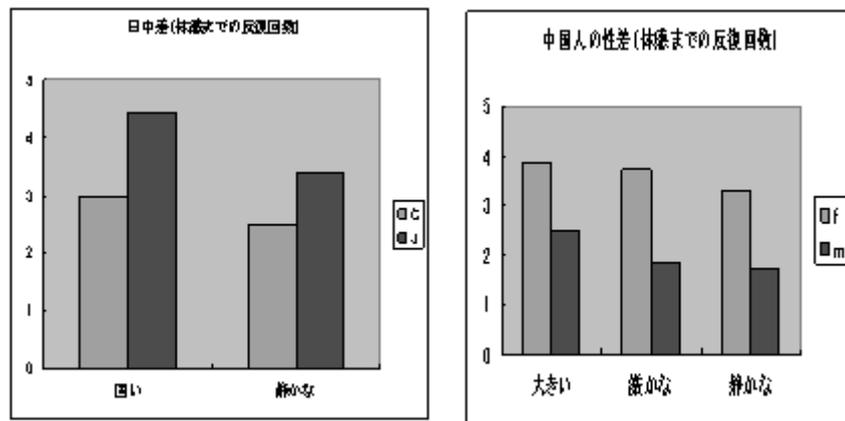


図5 体感するまでに要する舞踊運動練習の反復回数の日中差(左)と性差(右)  
(t検定で5%水準で有意差が認められた舞踊運動)

【文献】

柴 2003 平成12年度～14年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「異なる感性表現に共通する基本感情の検証と異文化間比較」(代表 柴真理子) 成果報告書 Pp.6-40.

柴・坪倉・猪崎・原田・塚本 2003 「体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語」 神戸大学発達科学部研究紀要, 12(2), 113-126.

## 付録：既発表論文から5編

- 1, 柴真理子・坪倉紀代子・猪崎弥生・原田純子・塚本順子 (2005) ..... 67  
「体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語 (1)」  
神戸大学発達科学部研究紀要 第12巻第2号 pp.113-126.
- 2, 柴真理子 (2005) ..... 80  
「舞踊運動の体感の変化のプロセスとその意味」  
バイオメカニズム学会誌 vol.29, no.3 pp. 124-128.
- 3, 柴真理子 (2004) ..... 84  
「身体表現—個性・共創・コミュニケーション」  
共創シンポジウム2004 コミュニティの共創に向けて—その技術とシステム論—講演集 pp.9-15. 主催：(社)計測自動制御学会 SI 部門共創システム部会
- 4, Kiyoshi Maiya, Mariko Shiba, and Kiyoko Tsubokura (2006) ..... 91  
“*Bodily Sensation in Dance: its Formation and Cultural Difference*”  
Proceedings of The First International Workshop on Kansei pp.110-113.
- 5, 原田純子・柴真理子・猪崎弥生・塚本順子 (2005) ..... 95  
「踊る技術の向上と体感獲得の過程—舞踊経験の浅い学生の感情価に基づいて—」  
体育科教育学研究 21(2) pp.31-44.

## 体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語 (1)

柴真理子\* 坪倉紀代子\*\* 猪崎弥生\*\*\* 原田純子\*\*\*\* 塚本順子\*\*\*\*\*

### A study on the basic terms of the dance movements through bodily sensation

SHIBA Mariko, TSUBOKURA Kiyoko, IZAKI Yayoi, HARADA Junko, TSUKAMOTO Junko

#### 1. はじめに

舞踊は、運動という目に見える形式を通して、目にみえない人間の内面を表現する活動であり、舞踊を見る者は、そこに展開される運動を通して、踊り手の内的世界を感じ取ることになる。

松本<sup>1</sup>は「身体や運動が、それ自体の認知だけでなく、それ以上のものとして価値づける人間の機能は、社会集団の中で無言のコミュニケーションや評価を可能にしている機能であり、身体によってなされる表現文化の創造と鑑賞を成立させる基底の働きをなしている」と述べ、舞踊における運動と感情の連関について「その独自性の基底に、ある共通性を共有する」と仮説を立て、その仮説を実証すべく研究を進めてきた。松本らの「動きの感情価」に関する一連の研究は、舞踊創作と舞踊鑑賞のための具体的指標を得るという目的に沿い、身体運動と感情の連関関係を「みえの世界」から捉えている。「みえの世界」からのアプローチとは、ある運動がどのようにみえるか、換言すれば他者にどのような印象が受容されるかというものである。また松本はそれに続いて動きの感情価を言語でとらえるために、舞踊用語に関する研究を進め、舞踊用語のチェックリストを作成した。チェックリストには、感情の型を表す9対18語からなるチェックリストⅠと、感情の質を表す7群42語から成るチェックリストⅡがある。

このような「みえの世界」からのアプローチに対し、筆者らは、松本の研究を継承すると同時に、踊り手の「体感」からみた舞踊運動の感情価の研究<sup>12,13,14</sup>に取り組んできた。「体感」からのアプローチは、舞踊運動を行う者自身がその舞踊運動を踊る時にどのような感情が生起し、感受するのかというものである。舞踊のみならず、あらゆる表現活動においても、演者（創作者）と鑑賞者があって、そこに、コミュニケーションが成立するわけであり、表現と享受、双方の立場からの研究が不可欠であることは言うまでもない。しかし、踊る人自身の身体を素材とする舞踊は、音楽や美術のように自分自身の表現を直接感受できる他の表現活動と異なり、踊り手は他者が見るのと同じように自分自身の舞踊を直接見ることはできないがために、特に踊り手の「体感」に関する研究が必要となると考え、踊り手自身の「体感」からみた舞踊運動の感情価に関する研究を継続している。そこでは、感情価を捉える方法として、松本のチェックリストを使用してきた。しかし、その過程で、松本のチェックリストは、感情の型と感情の質に一部混乱がみられ使いにくいことも判明してきた。また、松本のチェックリストにある用語の源は舞踊評論家の舞踊批評で用いられた語にあり、それらは「みえ」からの用語であると言える。

以上のような舞踊の感情価に関する研究の現状を踏まえ、筆者らは「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討」<sup>15</sup>を行った。そこでは、16名のダンス部大学生に、実験材料とした20の舞踊運動を踊りその体感を感情語5つ以内で記入することを求めた。そして、踊り手の舞踊運動の体感から得られた

\* 神戸大学発達科学部身体行動論講座

\*\* 十文字女子大学

\*\*\* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程

\*\*\*\* 大阪女学院大学

\*\*\*\*\* 天理大学

感情語の親近性をみるためにコレスポンデンス分析を行った結果、3つの次元によって親近性が決定されることが推察された。3つの次元は、ヴント Wundt, W. のいう、快—不快、緊張—弛緩、興奮—沈静という3つの次元に相当すると考察され、本研究で設定した舞踊運動は8つの異なる感情群の性質を有するグループに分類できることが統計学的に明らかにされた。

このように、この研究の結果からは、舞踊運動の体感からみた基本感情として8つが導きだされたことになる。そこで、本研究では、舞踊運動の体感からみた基本感情としてこの8つが妥当であるかどうかを検証し、更にその検証を通して、舞踊運動の体感を表す用語を選定することが目的である。

そのために、本研究は大きく以下の3つの部分から成る。

- ① 8つの舞踊運動の策定
- ② 8つの舞踊運動の体感評価実験
- ③ 舞踊用語の選定

## 2. 8つの舞踊運動の策定

### 2.1. 舞踊運動策定のための条件設定

舞踊運動の表現性の研究において重要なことは、実験材料としての舞踊運動の策定である。人間の運動は無限に創り出すことが可能であるが、舞踊研究においては、その目的に応じて、何を手がかりに舞踊運動を創り出すのかを明確にする必要がある。

本研究では、「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討」から得られた8つの異なる感情群の性質を有する舞踊運動を策定するにあたって次のような条件を設定した。

- ① 8つの舞踊運動は、「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討」から得られた8つの異なる感情群の性質を代表するものとして表1に示す感情を内包するものであること。
- ② 快—不快、緊張—弛緩、興奮—沈静という3つの次元の特性に基づいて、舞踊運動を創ること。
- ③ 表3に示すように操作的に設定されたコアとなる運動特性に基づいて舞踊運動を創ること。

注：8つの異なる感情群の性質を有するグループに入る複数の舞踊運動に共通な特質を筆者らが抽出し、コアとなる運動特性として設定した。

表1. 8つの舞踊運動

舞踊運動	① 内包を想定した感情	② 3つの次元	コアとなる運動特性
1.	やさしい	快—弛緩—沈静	曲線的
2.	楽しい	快—やや緊張—やや興奮	弾む・軽やかな
3.	厳かな	N—緊張—沈静	シメトリー
4.	激しい	N—緊張—興奮	急変的
5.	大きい	N—やや緊張—やや沈静	拡大的
6.	悲しい	不快—弛緩—沈静	縮小的
7.	固い	N—緊張—N	アクセント
8.	静かな	N—N—沈静	均質

注：Nは、ニュートラル（例えば、緊張—弛緩の次元の中間を表す）

### 2.2. 舞踊運動の創出

舞踊運動創出の第1段階として4名の舞踊研究者（柴・猪崎・原田・塚本）が、2.1. で設定した条件に基づいて8つの舞踊運動を創り、第2段階として舞踊家に8つの舞踊運動の体感のチェックを求めた。その結果、「静かな」を想定した舞踊運動8の体感には難しく、創り直す必要があることが分かった。この舞踊運動8は、もともと第1段階においても創ることは難しかったということもあり、創り

直しにあたっては、作舞家の協力を求めた。しかし、そこでも「静かな」を想定した舞踊運動を創ることは難しく、十分に納得のいくものとはならず、他の7つの舞踊運動が舞踊家の体感チェックを通過したものであるのに対し、舞踊運動8は、多少妥協した実験材料とならざるを得なかった。

なお、協力を求めた舞踊家と作舞家の経歴は以下の通りである。

舞踊家；江積志織(25才) 東京創作舞踊団所属

東京新聞社主催全国舞踊コンクール創作舞踊部門第2位(2003年2004年)

作舞家；藤井 公(76才) 東京創作舞踊団主宰

紫綬褒章受章・芸術祭優秀賞受賞

## 2.2. 舞踊運動の撮影

8つの舞踊運動の撮影は、前述の舞踊家、江積志織を踊り手として、スタジオでプロのカメラマンに依頼した。撮影の前日には、踊り手と研究者とで8つの舞踊運動の最終チェックを行い、舞踊運動2, 4, 8について、一部修正を加えた。

撮影日・場所・撮影者は以下のとおりである。

撮影日；2004年1月30日(金)

撮影場所；Studio FLEX (大阪市箕面市)

撮影者；柏原俊保(株式会社オブザアイ社長・TBS「世界遺産」撮影カメラマン)

## 3. 8つの舞踊運動の体感評価実験

### 3.1. 実験方法

#### 3.1.1. 実験期日・場所・被験者

【日時】2004年2月24日(火)

【場所】神戸大学発達科学部体育館

【被験者】神戸大学発達科学部人間行動・表現学科 身体行動論コース学生 23名(m13名, f10名)

天理大学体育学部生

4名(m1名, f3名)

合計27名(m14名, f13名)

#### 3.1.2. 実験の手順

実験に先立ち、被験者に本実験が体感を調べる実験であること、他者に見せることではなく、自分の動きへ意識を向け、8つの舞踊運動それぞれを踊った時に、どのような体感を得るかをみることを目的であることを説明した。なお、舞踊運動の順番による体感への影響をみるために被験者を2グループに分け、一方のグループは舞踊運動1から8の順番で、他方のグループは舞踊運動5から8, 1から4の順番とした。場所は、体育館中央をネットで仕切って2カ所に分けて使用した。

実験は、自由記述による体感評価と、松本のチェックリストを用いての体感評価の2つを実施し、2つの評価の間には10分の休憩をとった。実験手順は以下の通りである。

#### 【感情語の記述による体感評価実験】

①8つの舞踊運動の評価用紙の配布

②被験者に舞踊運動1を3回VTRで呈示。学生は見ながら動き、3回見た後は、VTRを見ないで5分間練習する。練習中に舞踊運動を確認したい学生にはVTRをみせる。

③被験者全員が踊れるようになったことを確認して、各グループを半数に分け、半数ずつ同時に踊り、踊った直後にその体感を感情語5つ以内で評価用紙に記入する。(待つ被験者は、踊っている人をみないように壁に向かって立つ)

なお、感情語について定義はしていない。本研究では、被験者が記述した語を感情語、即ち、被験者のとらえた感情を表す語として捉えることにする。

④舞踊運動 1 の評価用紙の回収

\*すべての舞踊運動について②～③を繰り返す。

【チェックリストからの感情語選択による体感評価実験】

① 8 つの舞踊運動の評価用紙と松本のチェックリストの配布

② チェックリストにある 43 語<sup>†</sup>をよくみて頭に入れる。

③ 舞踊運動 1 を VTR で 1 回見せて踊ったのち、各グループを半数に分け、半数ずつ同時に踊り、踊った直後にその体感にふさわしい感情語を 5 語以内で選択し、その番号を評価用紙に記入する。

④舞踊運動 1 の評価用紙の回収

\*すべての舞踊運動について②～③を繰り返す。

【体感評価実験に関する感想】

実験の最後に、記録用紙を配布し、実験全体に関する感想の記述を以下の 3 点から求めた。

① 1 回目と 2 回目を比較し、2 回目の方が動きがよりよくできたと感じるか

( ) はい ( ) いいえ

→ 動きがよりよくできたことが体感に影響を与えたか

( ) はい ( ) いいえ

→ それはどのような影響を与えたか

② 感情語を自由に書くのとチェックリストから感情語を選択するのではどちらが体感をこたえやすかったか。またその理由は？

③ 実験全体を通しての感想を自由に書く

### 3. 2. 結果と考察

#### 3. 2. 1. 体感評価実験に関する感想

結果と考察を始めるにあたって、体感評価の結果をどのようにみるのかを検討するために、まず、実験の最後に求めた「体感評価実験に関する感想」を分析することにする。

本研究は、2 つの体感評価方法を用いたために、被験者はそれぞれの舞踊運動を 2 回踊ることになった。そこで 2 回の踊りに対して、1 回目と 2 回目とでは、動きに違いがあったかどうか、あったとしたらそのことが体感にどのような影響を与えたかを調査した。

表 2. 舞踊運動 1 回目と 2 回目の動きの比較

	男子	女子	合計
はい	7 名 (50%)	12 名 (92. 3%)	19 名 (70. 4%)
いいえ	7 名 (50%)	1 名 ( 7. 7%)	8 名 (29. 6%)
合計	14 名	13 名	27 名

表 2 に示すように、男子は 2 回目の方がよくできたと感じているものとそうでない者が半数ずつで、女子では 1 名を除き 2 回目の方が動きがよりよくできたと感じるとこたえており、性差がみられる。そして、動きがよりよくできたことが体感に与えた影響については、「1 回目よりも多くの感情を体感したと思う。少しイメージが 2 回目と 1 回目で異なる場合もあったので、よりうまく体を動かしたの

---

松本のチェックリストは 42 語から成るが、本研究では「苦しい」を加え 43 語とする。

だと思う」(男子)、「2回目は慣れもあり、動作を間違えないようにという雑念が減少した」(男子)、「2回目はここは大きく伸びよう、とか、もう少し時間を費やせそうだとか、手の使い方も気にすることができた。また2回目の法がイメージが膨らみ動きやすかった」(女子)、「動きに1回目より自信が持てた分、ゆとりができ、自分の感情に意識を向けることができた」(女子)、「1回目に比べて動きが流れるように感じた。2回目は動きを覚えていることもあって、その動きをいかに流れを止めずに一連のものとして表現するか考えた」(女子)などの記述がみられ、影響ありとこたえた被験者の理由の多くは、1回目で動きを覚えたことにより、2回目には踊り方に工夫をしたり、自分の感情に意識を集中できるようになっていると感じていることがわかる。

表3には、感情語を自由に書くのとチェックリストから感情語を選択するのではどちらが体感をこたえやすかったかについての回答を示した。

表3. 2つの体感評価方法の比較

	男子	女子	合計
自由記述	5名(35.7%)	3名(23.1%)	8名(29.6%)
リスト	9名(64.3%)	10名(76.9%)	19名(70.4%)
合計	14名	13名	27名

男子の約35%、女子の約23%が、自由記述の方が体感をこたえやすかったとしている。その理由には、「自由記述の方が、感情語でなかったかもしれないが、自分の思ったことを素直に出せたように思う。チェックリストはリストに合わせてしまったように思う」(男子)、「自由記述の場合、擬態語や擬音語などで人に伝わりづらいような言葉が湧いてくる。自分の感情を表す自己完結で終わるならその方がよいと思った。チェックリストではそれらを端的に表すことができるが、自分の感情とニュアンスが少し違う気がした」(男子)、「チェックリストだと言葉は溢れているが、自分の真の体感を必ずどこかにあてはめなければならないという気がしてしまうから」(女子)などがみられる。

他方、チェックリストからの感情語の選択が体感をこたえやすかったと回答したのは男子の約65%、女子の約77%であり、その理由には、「ぼんやりと感じているが、適当な表現が瞬時にでてこなかったりするので、チェックリストの方がよかった」(男子)、「言葉として表現しにくいような感じがチェックリストを見ることによってはっきりするから」(男子)、「自由記述だと語数が少なく、偏った言葉になってしまいがちであり、チェックリストの様な指標があった方がよかった」(女子)、「感じたような言葉が思い浮かばないことが多いから、しかし、チェックリストにはぴったりくる言葉がないこともあった」(女子)などがみられる。これらの理由から自由記述とチェックリストからの感情語の選択という2つの方法にはそれぞれメリットとデメリットがあることがわかる。

以上のように、1回目と2回目では、舞踊運動をやっと覚えた段階での体感、舞踊運動を覚え自分の動きに意識を集中できた状態での体感という違いがあり、また、自由記述による体感評価もチェックリストからの感情語選択という体感評価も、それぞれ必ずしもぴったりした感情語で体感を表現できないこともあり、これらは、体感評価実験の結果に影響を与えていることも考えられる。しかし、本研究の目的は、舞踊運動をしっかりと覚える前の段階の体感と覚えた後の段階の体感を比較することや、評価の方法によって体感がどのように変化するかをみるのが目的ではなく、異なる特性をもつ舞踊運動を踊ることによってもたらされる体感をみることにあるので、ここでは、前述のような影響を考慮外として考察を進めることにする。このような進め方とるのは、先行研究の少ない舞踊運動の体感に関する研究においては、まず、舞踊運動の体感の大枠を捉えることが先決であり、大枠が捉えられた後に、前述のような影響について、また性差、舞踊運動の難易度、舞踊経験による違い

などの観点から舞踊運動の体感に関する各論とでも言うべき研究に進むことが有効であるとする。

表 4. 8つの舞踊運動についての自由記述による体感評価

8つの舞踊運動全体で5人以上が記述した感情語

舞踊運動 想定した感情	1 やさしい	2 楽しい	3 厳かな	4 激しい	5 大きい	6 悲しい	7 かたい	8 静かな	
楽しい	7	○ 20		*	*	*		3	
激しい	*	*		○ 13		*	○ 4		
怒り	*	*		○ 11		*	○ 6		
のびのびした	3	*		2	○ 11				
静かな			○ 5		2	○ 5		○ 3	
鋭い				2			○ 12		
悲しい						○ 11		2	
ゆったりした		○ 3		4			○ 5		
大きい	○ 5				○ 6				
うきうき		○ 10							
やさしい	○ 8				2				
落ち着いた				2	○ 5				
穏やかな	○ 4				3	2			
嬉しい		○ 9							
大らかな	2		2		○				
やわらかい	○ 6				2				
弾む	2	○ 5							
力強い			○ 3	2			2		
あたたかい	○ 3				○ 3				
ふわふわ	○ 6								
ゆっくりした		○ 3			○ 3				
わくわく		○ 6							
広い	○ 4				2				
迷い								○ 6	
苦しい				○ 3		2			
軽やか	○ 3	2							
寂しい						○ 5			
重い			○ 5						
切ない						○ 5			
	14	0	4	4	17	4	2	5	281

注 ; ○カイ 2 乗検定で、調整済残差が + 2 以上のもの

\*カイ 2 乗検定で、調整済残差が - 2 以上のもの

### 3.2.2. 感情語の記述からみた 8つの舞踊運動の体感

8つの舞踊運動に対して、被験者がその体感を 5 語以内でこたえた感情語とその頻度について、統

計処理には、SPSS12.0, Categories を用い、それぞれの舞踊運動の親近性及び体感から得られた感情語の親近性をみるためにコレスポネンス分析を行った。

8つの舞踊運動の体感として記述された感情語は78種類、述べ414語であった。被験者には感情語と指示したが、感情語の定義は難しく、本研究では被験者の記述した語を体感を表す感情語とみなして処理をした。従って、そこには「ふわふわ」「わくわく」といった擬音語・擬態語も含まれることとなった。

本実験では78種類の感情語の内8つの舞踊運動全体で記述頻度が5以上の感情語を体感評価に有効な感情語とみなすこととした。このようにして得られた有効な感情語は29種類、述べ281語であった。

8つの舞踊運動毎に29種類の感情語の頻度を集計し $\chi^2$ 検定を行った結果、有意確率が0.000となっており、行と列は独立ではなく、舞踊運動と感情語は関係があると判定される。

次いで舞踊運動と感情語のクロス集計を行い、調整済み残差が絶対値で2以上のセルをみ、表4、表5に、各舞踊運動毎の29種類の感情語の記述頻度、及び、調整済み残差が+2以上の感情語と-2以上の感情語を抽出してまとめて示した。

表5. 調整済み残差が絶対値で2以上のセル

	調整済み残差が+2以上	調整済み残差が-2以上
舞踊運動1 (やさしいを想定)	・ふわふわ(5.1)・やさしい(5.0) ・やわらかい(4.1)・広い(3.0) ・軽やか(2.4)・大きい(2.3) ・あたたかい(2.0)・穏やかな(2.0)	・激しい(-2.1)・怒り(-2.1)
舞踊運動2 (楽しいを想定)	・楽しい(7.2)・うきうき(6.8) ・嬉しい(6.4)・わくわく(5.2) ・はずむ(3.7)	・激しい(-2.1)・怒り(-2.1) ・のびのび(-2.0)
舞踊運動3 (厳かなを想定)	・重い(7.6)・ゆっくり(3.8) ・静かな(3.7)・力強い(3.4) ・ゆったり(2.2)	
舞踊運動4 (激しいを想定)	・激しい(8.9)・怒り(7.3) ・苦しい(3.5)	・楽しい(-2.0)
舞踊運動5 (大きいを想定)	・のびのび(6.3)・大きい(3.8) ・大らかな(2.9)・あたたかい(2.5)	・楽しい(-2.4)
舞踊運動6 (悲しいを想定)	・悲しい(7.7)・寂しい(5.7) ・切ない(5.7)・落ち着いた(4.5) ・ゆっくり(2.6)・静かな(2.3)	・激しい(-2.1)・怒り(-2.1) ・楽しい(-2.3)
舞踊運動7 (かたいを想定)	・鋭い(10.6)・怒り(4.1) ・激しい(2.3)	
舞踊運動8 (静かなを想定)	・迷い(9.2)・ゆったり(4.9) ・静かな(2.1)	

この表から、例えば、舞踊運動1 (やさしいを想定) では調整済み残差が+2以上の感情語は、「ふわふわ」「やさしい」「やわらかい」「広い」「軽やか」「大きい」「あたたかい」「穏やかな」であり、舞踊運動1ではこのような感情が体感される傾向にあること、また逆に調整済み残差が-2以上の感情語は、「激しい」「怒り」で、このような感情とは逆の感情が体感されていることがわかる。舞踊運動2以下についても同様に、それぞれの舞踊運動において、調整済み残差が+2以上の感情語があり、今回設定した8つの舞踊運動はそれぞれ特徴的な感情が体感されていると解釈できる。また、体感評価に有効な感情語とみなした29種類の感情語は、8つの舞踊運動のいずれかとの組み合わせにおいて調整済み残差が+2以上を示し、このことから、29種類の感情語は体感評価に有効であることの裏づ

けが得られることになる。

このように 8 つの舞踊運動では、それぞれ特徴的な感情が体感されていることが統計学的に明らかになった。それではその特徴的な感情とは、実験者が舞踊運動の創出にあたって想定した感情とどのような関係にあるのだろうか。この点についてみると、舞踊運動 1 (やさしいを想定)、舞踊運動 2 (楽しいを想定)、舞踊運動 4 (激しいを想定)、舞踊運動 5 (大きいを想定)、舞踊運動 6 (悲しいを想定)、舞踊運動 8 (静かなを想定)、の 6 つの舞踊運動に対しては、被験者がその体感を記述した感情語と実験者が想定した感情を表記した感情語の間に一致がみられ、舞踊運動 3 (厳かなを想定) と舞踊運動 7 (かたいを想定) では、実験者が想定した感情を表記した感情語そのものはみられない。しかし、例えば、舞踊運動 3 での体感にみられる「重い」「ゆっくり」、舞踊運動 7 の「鋭い」などは、実験者が舞踊運動の創出にあたって設定した舞踊運動の特性であり、感情語そのものの一致がないが、舞踊運動の特性のある側面は捉えられていることがわかる。

次に、8 つの舞踊運動、及び 29 種類の感情語の親近性をみるためにコレスポネンス分析を行い、その結果を図 1 から図 2 に示した。

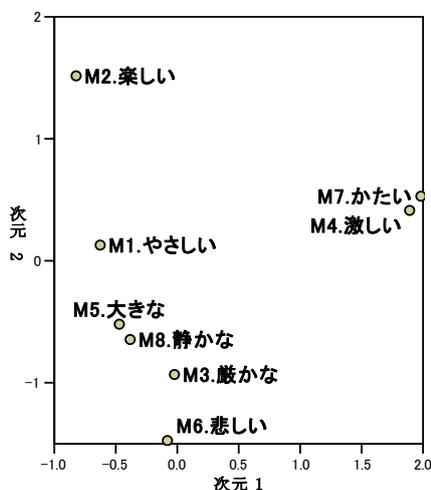


図 1. 舞踊運動の布置図(感情語記述)

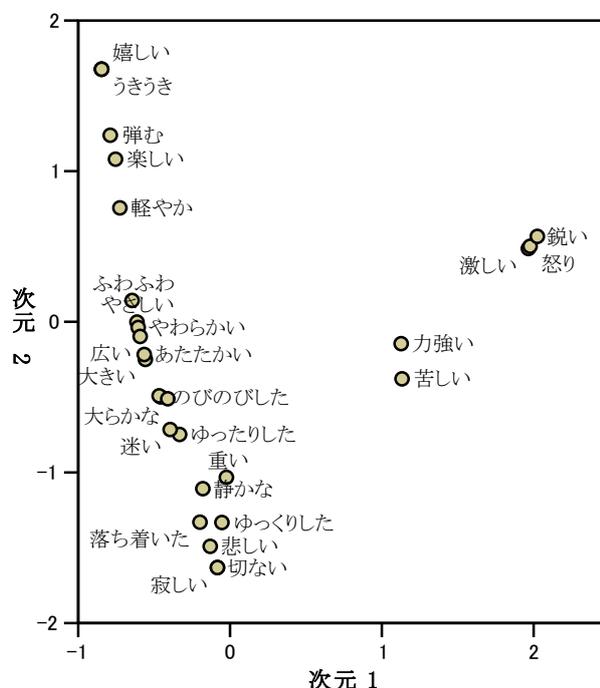


図 2. 29 語の布置図(感情語記述)

図 1 から、次元 2 の両極には舞踊運動 2 (楽しい) と舞踊運動 6 (悲しい) が、次元 1 では舞踊運動 2 (楽しい) と舞踊運動 7 (かたい) が位置し、舞踊運動 2, 6, 7 はお互いに近い関係にないことがわかる。舞踊運動 4 (激しい) はその位置が舞踊運動 7 と非常に近い位置にあり、この両者は親近性が高いと言える。これら 4 つの舞踊運動とその他の 4 つの舞踊運動は近い関係になく、4 つの舞踊運動間の親近性は舞踊運動 5 (大きい) と舞踊運動 8 (静かな) にみられ、舞踊運動 1 (やさしい) と舞踊運動 3 (厳かな) は非常に近い関係の舞踊運動はなく、独立しているとみられる。

これらのことから、今回設定した舞踊運動はその親近性からみて、6 つのグループに分類される。そして、これらの親近性がどのような要因によるのかについて、第 1 次元では「緊張と弛緩」あるいは「興奮と沈静」いう対極の要素が、第 2 次元では快と不快という対極の要素が関わっていると推察される。

図 2 には 29 種類の感情語の親近性を示した。この図から次元 1 の両極には「うきうき」「わくわく」

「嬉しい」等と「鋭い」「怒り」「激しい」が位置し、次元 2 では「うきうき」「わくわく」「嬉しい」等と「寂しい」「切ない」等が位置している。これらの感情語とその間に位置する感情語を加えて全体の親近性をみると、①「うきうき」「わくわく」「嬉しい」「弾む」「楽しい」「軽やか」等、②「鋭い」「怒り」「激しい」、③「力強い」「苦しい」、④「悲しい」「切ない」「さびしい」、⑤「ふわふわ」「やさしい」「やわらかい」等が、それぞれ近い関係にあることがわかる。そして④と⑤の間に「のびのびした」「大きい」「ゆったりした」「重い」「静かな」等が点在し、これらの感情語を近い関係にあるとして一つのグループにするのか、2つに分割するのか、また他のグループに位置づくものとするのかは今後の検討を要する課題であろう。

### 3.2.3. 感情語の選択からみた 8 つの舞踊運動の体感

3.2.2. では、8 つの舞踊運動に対して、被験者がその体感を自由に感情語を書くという方法で体感評価を実施した結果を考察した。ここでは、チェックリストから感情語を選択するという方法で実施した結果を考察する。選択された感情語の統計処理は、3.2.2. と同様に行った。

チェックリストは松本のチェックリストを用いることにしたが、松本の 42 語に「苦しい」を加えた 43 語で実施した。本実験では 78 種類の感情語のうち 8 つの舞踊運動全体で選択頻度が 5 以上の感情語を体感評価に有効な感情語とみなすこととした。このようにして得られた有効な感情語は 39 種類、述べ 705 語であった。3.2.2. と同様に選択された感情語の頻度を集計、 $\chi^2$  検定を行った結果、有意

表 6. 調整済み残差が絶対値で 2 以上のセル (感情語の選択)

	調整済み残差が +2 以上	調整済み残差が -2 以上
舞踊運動 1 (やさしいを想定)	・軽快・やさしい・やわらかい ・流れるような・大きな・暖かい ・自然な・生命感あふれた	・静かな・鋭い・威嚇的な ・攻撃的な
舞踊運動 2 (楽しいを想定)	・軽快・明るい・楽しい・躍動的 ・賑やかな・ユーモアのある ・歓喜の	・やわらかい・流れるような ・迫力のある・大きな ・興奮的な・暖かい ・静かな・寂しい ・落ち着いた・深い・鋭い
舞踊運動 3 (厳かなを想定)	・粘った・安定した・威厳のある ・重厚な・厳かな・神聖な・勇壮な	・軽快・楽しい・やわらかい ・流れるような・躍動的 ・寂しい・鋭い ・威嚇的な・攻撃的な ・生命感あふれた
舞踊運動 4 (激しいを想定)	・躍動的・迫力のある・興奮的な ・苦しい・鋭い・威嚇的な ・攻撃的な	・軽快・楽しい・流れるような ・静かな・落ち着いた ・生命感あふれた
舞踊運動 5 (大きいを想定)	・やわらかい・流れるような ・大きな・優美な・華麗な ・暖かい・落ち着いた	・軽快・躍動的 ・鋭い・攻撃的な
舞踊運動 6 (悲しいを想定)	・悲しい・暗い・冷たい・静かな ・寂しい・弱弱しい・落ち着いた ・厳かな・深い	・軽快・楽しい・流れるような ・躍動的・鋭い・攻撃的な ・生命感あふれた
舞踊運動 7 (かたいを想定)	・かたい・機械的・迫力のある ・興奮的な・鋭い・威嚇的な ・攻撃的な	・軽快・楽しい・流れるような ・躍動的・静かな
舞踊運動 8 (静かなを想定)	・流れるような・静かな・寂しい ・自然な・落ち着いた・深い	

確率が0.000で行と列は独立ではなく舞踊運動と感情語は関係があると判定された。また、舞踊運動と感情語のクロス集計を行い、調整済み残差が絶対値で2以上のセルをみ、表6に各舞踊運動に対して調整済み残差が+2以上の感情語と-2以上の感情語を抽出して示した。

また、図3と4には、コレスポネンス分析の結果を示した。表6から各舞踊運動に対して調整済み残差が+2以上の感情語があり、8つの舞踊運動はそれぞれ特徴ある舞踊運動として体感されていることがわかる。また、その特徴的な感情と実験者が舞踊運動の創出にあたって想定した感情との関係についてみると、実験者が想定した8つの舞踊運動のうちチェックリストにふくまれていない「激しい」を想定した舞踊運動4（激しい）を除き、そこには両者の一致がみられ、舞踊運動4についても、調整済み残差が+2以上の感情語実験者の想定した感情をみると舞踊運動4の特性が他の類似した感情語で捉えられているとみることができる。

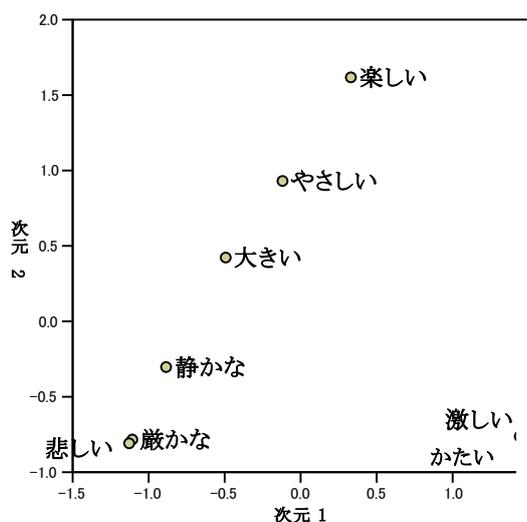


図3. 8つの舞踊運動の布置図(感情語選択)

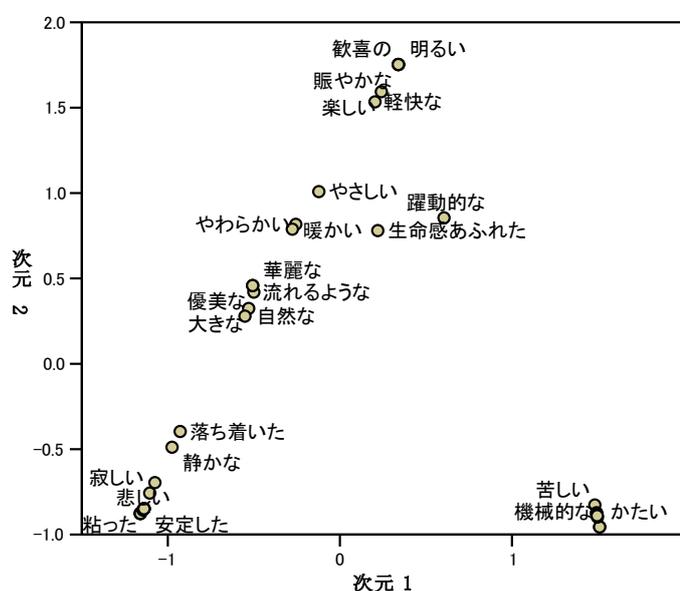


図4. 43語の布置図(感情語選択)

そして図3からは、8つの舞踊運動のうち、舞踊運動4（激しいを想定）と7（かたいを想定）、及び舞踊運動3（厳かなを想定）と6（悲しいを想定）はそれぞれ近い関係にあり、8つの舞踊運動は親近性という観点からみると、6つに分類されることがわかる。次にチェックリストにある43の親近性について図4をみると、その親近性から①軽快な・明るい・楽しい・賑やかな等②やさしい・やわらかい・暖かい等③華麗な・優美な・大きな等④躍動的な・生命感あふれた⑤落ち着いた・静かな⑥寂しい・冷たい・悲しい・威厳のある・勇壮な・重厚な等⑦かたい・鋭い・苦しい・機械的等、という7つのグループに分類される。しかし、それぞれのグループ毎の近さには差があり、②③④は比較的近くに、また⑤と⑥は近くに位置し、この7つのグルーピングについては、その妥当性について検討する必要がある。

### 3.2.4. まとめ

3.2.2. では、8つの舞踊運動に対して、感情語の自由記述による体感結果を、また3.2.3. では、チェックリストからの感情語の選択による体感結果をみてきた。

その結果、いずれの方法によっても、被験者は8つの舞踊運動からそれぞれ特徴的な感じを体感し

ており、このことから実験者の設定した8つの舞踊運動は体感の異なる舞踊運動であるといえる。

そして、異なる体感をもたらした8つの舞踊運動の親近性をみると、いずれの方法によっても舞踊運動4（激しい）と舞踊運動7（かたい）には親近性がみられ、更に、自由記述による体感結果からは舞踊運動5（大きい）と舞踊運動8（静かな）に、感情語の選択による体感結果からは舞踊運動3（厳かな）と舞踊運動6（悲しい）に親近性がみられる。このように親近性のある舞踊運動は、1組については共通であり、もう1組は体感評価の方法によって異なるが、いずれにしても、今回設定した舞踊運動はその親近性からみて、6つのグループに分類されることがわかる。そして、これらの親近性決定の要因は、「緊張と弛緩」あるいは「興奮と沈静」という要素、及び、快と不快という要素が関わっていると推察された。

また、自由記述から得られた体感に有効であるとされた29種類の感情語はその親近性からおよそ5つから7つ程度のグループに分類されると推測され、またチェックリストの43語のうち有効であるとされた39語はその親近性から7つのグループに分類されると推察された。しかし、どちらの感情語においても、その親近性からみた感情語のグルーピングには、グループ間の近さをみる必要もあり、課題が残されている。

#### 4. 舞踊用語の選定

8つの舞踊運動の体感評価実験から、設定した8つの舞踊運動はそれぞれ異なる体感をもたらす舞踊運動であること、しかし、それと同時に親近性のある舞踊運動もあり、8つの舞踊運動はその親近性から6つのグループにまとめられ、また感情語は5から7つのグループにまとめられることが推測された。このことは、体感による基本感情を8つとした場合、それらの感情を想定して創られた舞踊運動を踊ることによって異なる体感を得ることはできるが、それらを絞り込み、体感による基本感情を6つにすることが可能であることが示唆された。また、体感評価に用いた感情語も5から7つのグループにまとめられると推測されることから、ここでは、体感による基本感情を8つから6つ絞り込むこととし、6つのグループを構成する舞踊用語を選定することとした。

そのために、まず、8つの舞踊運動のうち、2つの方法で体感評価を行って舞踊運動の親近性の結果が一致した舞踊運動4（激しい）と7（かたい）は一つのデータとしてまとめ、7種類の舞踊運動の体感評価結果についてみることにし、表5と表6を照合する。まず、いずれの方法でも $\chi^2$ 検定で、調整済み残差が+2以上の感情語をみた結果、調整済み残差が+2以上の感情語は、舞踊運動1の「やさしい」「あたたかい」、舞踊運動2の「楽しい」、舞踊運動4及び7の「苦しい」、舞踊運動6の「悲しい」「寂しい」「落ち着いた」「静かな」、舞踊運動8の「静かな」であり、舞踊運動3・5についてはみられなかった。そこでコレスポンデンス分析の結果（図1、図3）をみると図1では舞踊運動5は舞踊運動8と親近性があり、また図3では舞踊運動3が舞踊運動6と親近性があり、舞踊運動3・5・6・8については親近性を認めながら、独立性をどのようにみるかが問題である。そこで、これら4つの舞踊運動のうち複数の舞踊運動が、いずれかの方法で調整済み残差が+2以上を得た感情語をみる（表5・表6）と、舞踊運動3・6・8では共通する感情語がみられるが、舞踊運動6では他の舞踊運動にない「悲しい」「寂しい」という感情語がみられることから舞踊運動6は独立する舞踊運動とみなすことができる。また、舞踊運動5と8においては共通する感情語が1語みられるが、1語のみであるので舞踊運動5は独立する舞踊運動とみなすことができる。しかし、舞踊運動3と8には共通する感情語が多く、独立性を認めるのは難しい。従って、舞踊運動3と8、及び4と7は類似した特性を持つ舞踊運動とみなされ、8つの舞踊運動は6つに絞りこまれることとなる。そしてそれら6つの舞踊運動に対応する感情語のグループも6つとなり、それらの代表語を、「楽しい」「やさしい」「穏やかな」「厳かな」「悲しい」「怒り」とすることにした。ここに至るまでにいくつかの舞踊運動と

の関係で、グループを構成する感情語が抽出された。次に、6つのグループを構成する感情語の数については先行研究に倣って3語とすることにし、先に抽出された語を基に、調整済み残差が+2以上を得た感情語について筆者らの舞踊経験に基づいて舞踊の体感に関する感情語としての適否を協議し、また、代表語に近い質感を表す感情語について協議して3語を選定した。その結果、表7に示す感情語が、6つの基本感情を構成する感情語として選定されることとなった。

表7. 6つの基本感情の感情語グループ

group	感情語
1	<b>楽しい</b> ・ 嬉しい ・ 喜び
2	<b>やさしい</b> ・ あたたかい ・ 幸せな
3	<b>穏やかな</b> ・ のびやかな ・ 優美な
4	<b>厳かな</b> ・ 神聖な ・ 静謐な (静かな)
5	<b>悲しい</b> ・ 寂しい ・ 冷たい
6	<b>怒り</b> ・ 苦しい ・ 怖い

注 ; bold・italic は代表語を表す

## 5、終わりに

本研究の目的は、舞踊運動の体感を表す用語を選定することが目的であった。そのために、まず、筆者らの一連の研究から導きだされた基本感情を想定して8つの舞踊運動を策定し、①感情語の自由記述②チェックリストからの感情語の選択という2つの方法によって、これら8つの舞踊運動について体感評価実験を行った。その結果、8つの舞踊運動の体感は、それぞれに異なり、実験者が舞踊運動を創るにあたって想定した感情に近い感情語で評価され、設定した舞踊運動は8つの異なる感情体験をもたらす舞踊運動として妥当であることが検証された。それと共に、舞踊運動間に親近性もみられ、その親近性に従って8つの舞踊運動は6つに集約された。そして、6つの舞踊運動と深い関係にある感情語を、舞踊運動の評価に用いられた感情語から抽出し、更に、先行研究及び筆者らの舞踊経験からいくつかの感情語を加えることによって、「楽しい」「やさしい」「穏やかな」「厳かな」「悲しい」「怒り」を代表語とし、それぞれ代表語を含めて3語から成る6つの基本感情語群が作成された。

以上のような経過を経て、8つの基本感情は6つに集約され、体感による舞踊運動の基本感情は6つと改められることになる。筆者らの一連の研究は、舞踊教育をはじめとする様々な舞踊活動の場で多様な感情体験を可能にする指導内容と指導方法開発の基礎資料を得ることにある。人間の動きは無限であるがために、その無限性、言い換えれば動きの自由を保障するために、基本感情は更に集約されていく必要があるのかもしれない。

今後は本研究で得られた6つの基本感情に基づいて研究を進めることにより、舞踊活動の現場で生きる基本感情の核の探求とその核をどのように創造的に展開させていくのか、その具体的方法の創出が課題である。

## 【 文 献 】

- 1, A.Lomax, et al.:CHOREOMETRICS-A Method for Study of Crosscultural Pattern in Film, CORD ANNUALVI, pp193-212, 1972.
- 2, E.Kagan:Towards the Analysis of a Score, CORD ANNUAL IX, pp75-92, 1978.
- 3, 原田純子、柴眞理子、塚本順子「踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察」第55回舞踊学会大会

- 4, I. Bartenieff, et al.: The Potential of Movement Analysis as a Research Tool,  
Dance Research Journal 16-1, pp3-26, 1984.
- 5, 金子明友・朝岡正雄 編著『運動学講義』大修館書店, 1990.
- 6, 増山英太郎:『心に浮かぶイメージをはかる』「基本感情はいくつあるかー日本舞踊のイメージ調査を通じてー」, JAA 産業科学システムズ,
- 7, 松本千代栄:舞踊研究:課題設定と課題解決学習Ⅱ-運動の質と感情価, 日本女子体育連盟紀要 '87-1, pp. 53-89. 1987.
- 8, 松本千代栄:動きの感情価に関する研究, 東京教育大学体育学部紀要第 11 巻, pp. 47-62, 1972
- 9, 松本千代栄:『序説運動学』, 「運動と表現」, 大修館書店, 1971.
- 10, 中村雄二郎『共通感覚論』岩波現代選書, 1979.
- 11, 西洋子ほか:運動の質と感情価の追跡研究(1)Seven Motives の形成要因の抽出, 日本体育学会 第 43 回大会号, p. 865, 1992.
- 12, 柴真理子:体感による動きの感情価 ~舞踊経験者と未経験者の比較:神戸大学発達科学部研究紀要第 10 巻第 2 号 pp.173-181, 2003.
- 13, 柴真理子:体感による舞踊運動の感情価-舞踊経験の浅い学生を対象に-, ITE Technical Report VOL. 21, NO. 28 pp. 37-42, 1997.
- 14, Shiba Mariko “Extraction of Kansei Information in Dance Movements,”  
Proceedings ,ATR Workshop on Virtual Communication Environments  
-Bridges over Art/Kansei and VR Technologies- pp.70-88, 1998
- 15, 塚本順子、柴真理子、他 5 名「舞踊運動の体感からみた基本感情の検討」第 55 回舞踊学会大会

付記:本研究は、平成 15 年度～平成 17 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) (2)「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」(課題番号 15300213)の一環である。

## 舞踊運動の体感の変化のプロセスとその意味

柴 眞 理 子

### 要旨

現代社会における子ども達（大人にも同じことが言えるだろう）の感情表現の乏しさを象徴的に言うならば「メチャ楽しいーすぐキレル」という両極端にあり、子ども達はその間にある彩り豊かな感情に気づいていないように思われる。

人間が本来もっている感情の豊かさを感じず表現できない子どもたちに、舞踊は、身体感覚や身体感情に気づかせ、それらを磨くという機能をもっている。とりわけ、舞踊運動の体感を原点とすることによって、踊る者は、自分の動きの感覚に鋭敏になり、ちょっとした動き方の違いが異なる感情体験をもたらすことを感じ取れることを可能にする。本稿では、筆者の舞踊系運動方法論実習の受講生を対象にした舞踊運動の体感に関する実験に基づいて、舞踊運動の体感の変化のプロセスは、日常気づかない感情体験の場であり、そのことによって自己理解・他者理解がもたらされ、それが豊かなコミュニケーションに繋がっていくことを解説する。

### 1. はじめに

人間の「生」の存在形式である身体は、ただそこにいるだけで意味を生み出してしまおうという特質をもつ可変的な心理的存在である。舞踊の素材が私たちの生身の身体であり、素材そのものに人間の心理が反映されているがために、舞踊という表現行為は難しくもあり、また楽しく、奥深くもあると言えるだろう。

さて、この情報に充ちあふれた身体が動き出した時、身体は単に素材であることを超え、目に見えない作舞者・踊り手のイメージの世界を目にみえる運動現象として外に表わしだす媒体となる。

舞踊の根源は、「感情に揺さぶられてからだが動いてしまうこと」即ち、嬉しい時には跳び上がり、また、喜びのあまり抱き合い、悲しい時にはうなだれるというような、

日常私達が無意識のうちにしている身体表現にある。このことは日常生活の中でよく経験するように、ある人が嬉しくて跳び上がる、そしてそれを見た人は、その跳び上がったからだから「ああ、何かいいことがあったのかな」と感じる、つまり感情に揺さぶられたからだの動きから感情を読み取っている。人間は生まれ育った文化の中でからだ語り、からだを讀む力を獲得していく。舞踊はこのようなかからだ語りの言葉をベースにして、自らの内面をからだで語るものであり、日常的な身体表現と舞踊は一つの連続体を成している。無意識的な身体表現から意識的な身体表現へ、そこに舞踊が生まれる。

### 2. 舞踊運動の体感からみた基本感情

舞踊運動とは、表現性をもちうる最小単位の運動を指し、楽しい、怒り等では数秒、悲しい、厳かな等では15秒程度の長さであることが報告されている。

舞踊における運動と感情の関係について、「みえ」からアプローチした松本<sup>1)</sup>は、「舞踊における身体や運動をそれ自体の認知だけでなくそれ以上のものとして価値づける人間の機能は、社会集団の中で無言のコミュニケーションや評価を可能にしている機能であり、身体によってなされる表現文化の創造と鑑賞を成立させる基底の働きをなしている」と捉え、運動と感情の連関について「表現の独自性の基底には、ある共通性質が潜在する」することを明らかにし、動きの感情価に関する実証的研究の先駆けとなった。

舞踊における運動と感情の関係に関する実証的研究は、国際的にみてもまだ少なく、これまで経験的に或いは哲学的に論じられてきた舞踊の機能を実証するためには、「みえ」からのアプローチと同様に「体感」からのアプローチが不可欠である。

「体感」からのアプローチは、舞踊運動を踊る時、踊っている本人にどのような感情が生起し、感受するのかというものである。感情心理学や感情の哲学的考察から人間の感情の分類には諸説あることが知られ、また、運動には無限の広がりがある。そのような広がりをもつ運動と感情について、その両者の連合である舞踊運動では、どのような連関をもつ運動と感情が、多様な感情体験をもたらす基本感情となるのかを探る実験<sup>2)</sup>を行った。

ダンス部大学生を被験者に、筆者らが先行研究を踏まえて創作した異なる感情価を有する20の舞踊運動を踊りその体感を感情語5つ以内で回答する体感評価実験を行った。踊り手の舞踊運動の体感から得られた感情語の親近性をみるためにコレスポネンズ分析を行った結果、ヴント(Wundt, W.)の快—不快、緊張—弛緩、興奮—沈静に相当する3つの次元によって親近性が決定されることが推察さ

れ、20の舞踊運動は8つの異なる感情群の性質を有するグループに分類できることが統計学的に明らかにされ、舞踊運動の体感からみた基本感情として8つが導きだされた。

そこで、次に体感からみた基本感情としてこの8つが妥当であるかどうかを検証するために、8つの異なる感情群の性質を有する舞踊運動を表1.の条件の下に策定した。

表1. 8つの舞踊運動

想定した感情	3つの次元	コアとなる運動特性
やさしい	快—弛緩—沈静	曲線的
楽しい	快—やや緊張—やや興奮	弾む・軽やかな
厳かな	N—緊張—沈静	シメトリー
激しい	N—緊張—興奮	急变的
大きい	N—やや緊張—やや沈静	拡大的
悲しい	不快—弛緩—沈静	縮小的
固い	N—緊張—N	アクセント
静かな	N—N—沈静	均質

注：①Nはニュートラル（例：緊張—弛緩の次元の中間を表す）

②コアとなる運動特性は、8つの感情語群を形成する複数の舞踊運動に共通な特質を筆者らが抽出。

このようにして策定した8つの舞踊運動について、舞踊家の体感チェックを通過した後に、大学生を被験者に、体感評価実験を行った。その結果、8つの舞踊運動の体感それぞれに異なり、筆者らが舞踊運動を創るにあたって想定した感情に近い感情語で評価され、設定した舞踊運動は8つの異なる感情体験をもたらす舞踊運動として妥当であることが検証された。それと共に、舞踊運動間に親近性もみられ、その親近性に従って8つの舞踊運動は6つに集約された。そして、6つの舞踊運動と深い関係にある感情語を、舞踊運動の評価に用いられた感情語から抽出し、更に、先行研究及び筆者らの舞踊経験からいくつかの感情語を加えることによって、「楽しい」「やさしい」「穏やかな」「厳かな」「悲しい」「怒り」を代表語とし、それぞれ代表語を含めて3語から成る6つの基本感情語群が作成された（表2）。この段階で、表1の「大きい」は「穏やかな」へ、「激しい」は「怒り」という感情語へと修正した。

表2. 6つの基本感情の感情語グループ

group	感情語
1	<b>楽しい</b> ・嬉しい・喜び
2	<b>やさしい</b> ・あたたかい・幸せな
3	<b>穏やかな</b> ・のびやかな・優美な
4	<b>厳かな</b> ・神聖な・静謐な
5	<b>悲しい</b> ・寂しい・冷たい
6	<b>怒り</b> ・苦しい・怖い

注；bold・italicは代表語を表す

### 3. 舞踊運動を繰り返し踊ることと体感

2.で設定された6つの基本感情を想定した舞踊運動を踊ることによって、6つの異なる感情体験をもたらされることが明らかになった。そこで次に、同じ舞踊運動を繰り返

返し踊ることによって、動きと体感がどのように変化していくか、そのプロセスをみる実験<sup>3)</sup>を行った。

ここでは、表1の「楽しい」「悲しい」「怒り」を想定した3つの舞踊運動について、筆者の授業の履修学生を被験者に、1週間おきに5回踊らせ、その体感を表2の18語から5語以内選択し、其々の体感の強さを4段階で評価することを求めた。また、毎回、及び、5回の体感実験の終了後に自分自身の動きや体感の変化を自由に記述することを求めた。各人の舞踊運動を毎回ビデオに収録し1,3,5回目には、3次元動作解析のための撮影も同時に行った。

#### 3.1. 舞踊運動の変化

同じ舞踊運動を5回踊っていく中で、被験者の舞踊運動がどのように変化していくのかをみるために、①運動が細切れの状態から流れがでてきた段階②舞踊運動が自分のものになってきた段階という2つの段階を設定し、舞踊研究者3名ですべての舞踊運動について転換点をチェックした。また、実験終了後に被験者自身にもそのチェックを求めた。

これと並行して、舞踊運動の変化を客観的に捉えるために、DLT法による舞踊運動の3次元動作解析を行い、舞踊運動における物理量の変化をみた。

#### 3.2. DLT法による舞踊運動の3次元動作解析

紙面の都合上、動作解析の詳細については報告できないので、その一端を紹介する<sup>4)5)</sup>。同期した4台のビデオカメラで撮影・収録した被験者の舞踊運動について、身体上の25の測定点をデジタル化し（阿江、1996）、身体各部位および身体重心の3次元位置座標、それら測定点ごとの移動距離や速度の時間変化（1/30秒単位）、さらにスティックピクチャーによる連続画などを得た。次に、これらの基礎的データをもとにして、同一の舞踊運動を繰り返し踊った場合の変容を物理量として捉えるために、①身体各部位の移動距離および速度の時間変化、②身体各部位の全体的な動きの分布（図1）③身体各部位の高さの時間変化（図2）をグラフ化した。ここで、移動距離や速度はX、Y、Z方向の各成分値ではなくそれらの合成値である。したがって、総移動距離においては、フロアパターン上（X、Y方向）の移動に加えて高さ（Z方向）の移動距離も加わった値となり、たとえば総移動距離が大きい部位がある場合は、当該部位がよく使われている舞踊運動であることを示すことになる。

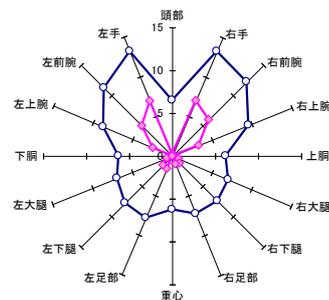


図1 総移動距離（舞踊運動3, 1回目）

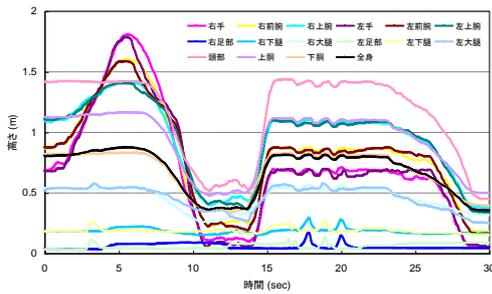


図2 身体各部の高さの時間変化（舞踊運動2, 5回目）

このようにして視覚化されたグラフを参照しつつ、3回の舞踊運動の変容がよく現れている身体部位に注目し、時間経過に伴う身体各部位の動き、とりわけ同一舞踊運動内の1つの動きから次の動きへと移行する際の動きの物理的特徴（移動距離や速度、高さの変化）を分析した。その結果、繰り返し踊ることによって、たとえば舞踊運動1の最後におけるジャンプの一連の動きが速くかつ大きくなっていく、あるいは舞踊運動2の冒頭における伸縮・回転の一連の動きがゆっくりかつ大きくなっていくなど、筆者らが評価した注目すべき動きの変容が物理的指標によって有効に示された。

### 3.3. 舞踊運動の体感と転換点

図3には、典型的な結果を示した被験者M.Yの体感の変化（感情語選択・強度4段階）と、舞踊運動の転換点を併せて掲載した。この図にみられるように、毎回、強度は異なるものの舞踊運動1（怒りを想定した舞踊運動）では毎回「怒り」群の、舞踊運動3（楽しいを想定）では「楽しい」群の感情語を体感しているのに対し、舞踊運動2（悲しいを想定）では想定した感情ではなく「厳かな」「穏やかな」語群の感情語が体感され、他の2つの舞踊運動に比べて体感が分散している。舞踊運動2は、1と3に比較してゆっくりとした舞踊運動であり、ゆっくりとした舞踊運動の中で

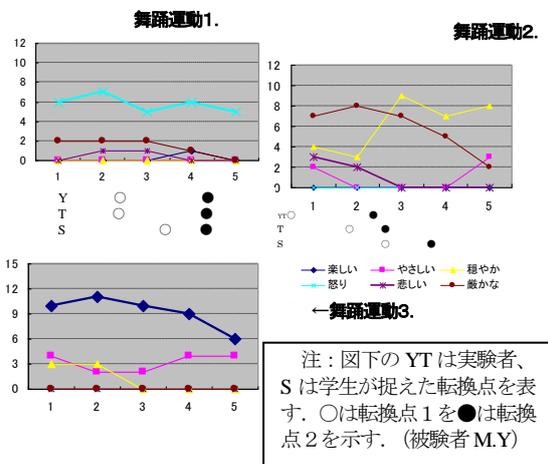


図3. 体感の変化と舞踊運動の転換点

は体感が移行し易いと考えられる。

舞踊運動の転換点については、転換点1は2回目に、転換点2は舞踊運動1と3では4回目に、舞踊運動2では5回目に認められる傾向にあった。

### 3.4. 学生が捉えた舞踊運動と体感の変化

5回の体感実験を終えた学生が自分自身の舞踊運動と体感の変化をどのように捉えたか、学生の記述から抜粋する。

#### 【舞踊運動1】

踊り方の変化について…初めは速く激しく踊ることに重点をおいていたので動きが硬かった。しかし回数を重ねる毎に手を伸ばしたり縮めたりする動作は素早くそれでいて大きく分かりやすくすることを意識するようになったし「静」と「動」のメリハリをつけて踊るようになった。

体感の変化について…最初は「怒り」「憎しみ」→回数を重ねるごとにそれだけで「苦しみ」や「自己との葛藤」などといった気持ちがでてきた。

踊り方と体感の関係について…はじめのうちは単に暴れているだけのように感じたが回復していくうちにただ激しくうごいているだけではうまく表現できなくなってきた。

#### 【舞踊運動2】

踊り方の変化について…最初はゆっくり大きな動きをするのが難しかったが、少しずつ気持ちよく動けるようになり、ひとつひとつの動きを丁寧にする意識が高まってきて最後にはスムーズに一連の動きができた。

体感の変化について…体感があまり一定したことはなかった。「神聖」「やさしさ」「穏やかさ」を感じたときもあれば、「悲しみ」や「苦しみ」に満ちているようにも感じた。

踊り方と体感の関係について…ゆっくりなだけにとても難しかった。初めはただゆっくりと時間に身をまかせるようにだけ踊っていたが、回数を重ねるにつれて自分という存在を感じながら踊るようになった。例えば手を上に大きく広げる時は自分を外は解放するようにまた体を縮ませる時は自分の心の中をのぞくようなイメージをした。4, 5回目は「うまく」踊ろうという考えは全くなく本当に踊りながら体感していたのでとても気持ちよく踊れた。

#### 【舞踊運動3】

踊り方の変化について…最初は最も踊りやすい運動だったが、だんだん単純さに飽きた。味気ない動きだと思った。

自分の動きに関しても上達はほとんどみられないと思う。

体感の変化について…「楽しい」「幸せな」「嬉しい」などが5回を通してずっと体感は変わらなかった

踊り方と体感の関係について…初めのうちはただ楽しくリズムカルに踊っているだけだった。しかし回数を重ねるごとに自分の呼吸を感じながら踊れるようになり楽しさだけでなく何故か嬉しさも感じていた。

#### 【5回の繰り返しの過程全般】

・決められた同じ踊りをしていても、その時の気分や、踊

りに対する慣れなどにより自分の内側からでてくる感情に微妙ではあるが、ズレを感じた。しかし、どの時に感じた感情も実際に感じたもので、違和感はなかった。つまり、その時の状況によって変わる自分の内側の部分を自然に受け入れることができ、自分のことを理解することができる。普段の生活ではこういったことを感じることは難しいが、舞踊によって、より自分の内側に目が向けられることによって、そういった感情の変化にも気づくことができ、また自分の新たな一面を発見できる。

- ・それぞれの人の感性や想像力を見ることができてなかなか面白いものだった。同じ舞踊運動でも全く感じ方が違い、表現の仕方も違ったものになっていた。しかし、これこそが個性というものであり、もし皆がまったく同じ感じ方、同じ表現をするならば、この授業というものは全く意味を成さなかったであろう。

### 3.5. 体感の変化のプロセス

以上のような実験結果から、初心者が既成の舞踊運動を自らの舞踊運動として踊るためには、4～5回、繰り返し練習することが必要であり、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによる体感の変化は次の3つのプロセスを経ていると推察される。

- ①動きを覚えることに必死で、体感を意識する余裕がない
- ②動きを覚えてスムーズに踊れるようになり、踊りながら自分の気持ちや気分を感じ取れるようになる
- ③自分のリズムで踊り、自分らしさを表現できる

### 4. おわりに

筆者が、体感に関する実験を紹介し、そこで述べたかったことは、基本感情が想定された舞踊運動を踊ることの意味と、舞踊運動を繰り返し踊ることの意味についてである。

「はじめに」で述べたように、昨今の子どもたちは感情の豊かさに欠けており、学生も例外ではない。感情に乏しい学生たちに感情への気づきを回復するためには、身体から心へ、即ち、身体を揺り動かすことによって心を動かそうという方向が有効である。しかし、学生に自由に踊ることのみを求めれば、各自の学生の持つ動きの傾向に偏り、そこでの感情体験は従来の感情体験の域をでないことが予想され、現にそのことは『3つの舞踊運動を踊ってみて気づいたことはこのような動きもあったのかということだ。

我々が普段しないような動きを取り入れることによって「神秘的」とか「厳かな」といった表現もできるのだということに気づいた』という学生の記述に現れている。それまで運動で表現できるとは考えていなかった感情を内包する舞踊運動を与えられることにより、普段感じる機会の少ない感情を体感し、表現できることに気づき、そのことが感情の広がりへの糸口となる。

また、同じ舞踊運動を繰り返し踊る中で、学生は自分自身の踊り方と体感の変化、両者の関係について気づき、初

めは他者から与えられた舞踊運動で覚えることに必死であった状態から、しだいに自分の呼吸を感じ、また自分のリズムで踊り、与えられた動きであるにも関わらず、自分らしく表現しようとし、更に表現できるようになり、その喜びを感じている。ここに、同じ舞踊運動を反復するからこそ、もたらされる気づきがある。与えられた動きを繰り返して踊ることは、自己を受容しつつ次第に自分らしく個性の生きた表現に向かうプロセスあり、それは自己理解そして他者理解に繋がっていることがわかる。

呼吸を感じ、自分のリズムで踊ることができる状態とは、踊り手が舞踊運動の一連の動きを羅列する、あるいは踊り手にその舞踊運動が動きの羅列として感じ取られるものではなく、ひとつひとつの動きと動きの間が生み出されることによって動きが有機的に結びつき一つの生命体となることである。

このことは象徴的な言い方をすれば、踊り手が舞踊運動に呼吸を感じ、自分のリズムで踊ることができた時、そこに生命が宿り、異なる舞踊運動を踊ることによって様々な生命のあり方を体感しているとみることはできないだろうか。

### 参考文献

- 1) 松本千代栄:舞踊研究:課題設定と課題解決学習II-運動の質と感情価,日本女子体育連盟紀要'87-1, 53-89. (1987).
- 2) 柴真理子・坪倉紀代子・猪崎弥生・原田純子・塚本順子:体感から捉えた舞踊運動の基本感情とその用語(1),神戸大学発達科学部研究紀要, 12(2), 113-126. (2005)
- 3) 柴真理子・山田敦子・坪倉紀代子・米谷淳:同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について,第56回秋季舞踊学会大会抄録, 17. (2004).
- 4) 前田正登・柴真理子・小高直樹・猪崎弥生・塚本順子・西洋子・原田純子:DLT法による舞踊運動の3次元動作解析:舞踊学第27号, 58. (2004).
- 5) 小高直樹・前田正登・柴真理子・米谷淳・猪崎弥生:舞踊運動における体感と物理量の変化,第56回秋季舞踊学会大会抄録, 18. (2004).

附記:本稿で紹介した体感に関する研究は、平成15年度～17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」(課題番号15300213)の一環として進めているものである。

### 柴 真理子 (しば まりこ)

1981年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科単位取得退学。同年4月に神戸大学教育学部講師。学部改革に伴い発達科学部に所属変え。現在、発達科学部教授。舞踊学会及び人体科学会理事。博士(学術)。舞踊学・舞踊教育学。

## 身体表現—個性・共創・コミュニケーション

柴 眞理子 (神戸大学)

### 1, はじめに

現代に生きる私たちが漠然と心に抱いている複雑な不安を象徴するかのようには、その動機がなかなか見えない事件が連日報道されている。いとも簡単に自らの命を絶ち、また他の人を傷つけ、命を奪ってしまうという現代社会の状況は、一つには生産性や効率性の高さに価値をおく戦後の近代化がもたらした人間疎外の結果であり、またそれに起因する身体性の希薄さに一因をみることができよう。このような不安な社会においては、人間が人間らしく生きていく上で最も大切なものの一つである「誰もがかけがえのない存在である」という確信を抱きにくくなっている。この確信を取り戻すには、豊かなコミュニケーションの体験が不可欠であろう。

本稿では、自らの身体を素材（同時に媒体）とし、目に見える運動を通して目に見えない内的世界を表現する舞踊の活動は、その場に在る者の心と身体が相互に響きあい、その過程は「誰もがかけがえのない存在である」という確信を築きあげていく過程であることを精神病院に入院中の患者さんを対象に行ったダンスセラピーの実践及び大学生への舞踊実践に基づいて報告する。

### 2, 舞踊とは何か

舞踊には「社交ダンス」「バレエ」「モダンダンス」「日本舞踊」「フォークダンス」「ジャズダンス」「フラメンコ」等々、多種多様なジャンルがある。これらを包括して「舞踊」と呼ぶのは、その多様性の中に共通な何かがあるからに他ならない。この共通性が何かということを経験的に言えば、「自らのからだは素材であり、そのからだの動きによって、ある種の内的で感情的な力を外的に表現することである」と言えよう。そして、このような共通性に立って、なぜ多様な舞踊が存在するのかと言えば、舞踊には多面的な機能があり、人間はそのさまざまな機能に動機づけられて踊るので、そこに異なったタイプの舞踊が生まれるからであると考えられる。

このように多様にある舞踊の厳密な分類は困難であるが、舞踊を論ずる時、自分がどのタイプの舞踊を対象にしているのかを明確にしないと対象とする舞踊の本質からはずれていく危険がある。

ジョン・マーティンは、踊りに対する動機づけという観点から①娯楽舞踊②観せるための舞踊③表現舞踊の3つに分類している。娯楽舞踊では祭式や遊びにみられるように自らが踊って楽しむことが、観せるための舞踊とはバレエのように観せること自体が、そして表現舞踊とはモダンダンスのように表現しコミュニケーションすることが、それぞれの舞踊の第一義的な目的である。

本稿で筆者が対象とする舞踊は3つ目の表現舞踊ということになる。筆者が舞踊に期待する主たる機能はコミュニケーションにあり、その舞踊を「舞踊は、現在を生きる表現主体者のからだを素材とし、人間のあらゆる動きを媒体として思想や感情を表現する、あるいは、動きそのものが思想であり、感情であるという『動きによる情緒的経験のコミュニケーション』である。」と定義する。そして、演題を舞踊とせず、身体表現とした意味の一つはここにある。

### 3, 舞踊における身体

舞踊における身体とは、舞踊の主体（舞踊を舞踊として目にみえるものにする本人）でもあり、同時

に舞踊の素材でもあるという二重性を持つ。つまり、舞踊においては、他の表現行為のように、絵画でキャンバスの大きさや絵の具の色を選び、また音楽でお気に入りのバイオリンで演奏するというようなことは許されず、気に入っても気に入らなくても素材の交換が不可能であり、素材としての自分の身体を受け入れ、自らの身体を知り尽くさなければならないという特徴がある。

舞踊の根源は、「感情に揺さぶられてからだが動いてしまうこと」即ち、嬉しい時には跳び上がり、また、喜びのあまり抱き合い、悲しい時にはうなだれるというような、日常私達が無意識のうちにしている身体表現にある。このことは日常生活の中でよく経験するように、ある人が嬉しくて跳び上がる、そしてそれを見た人は、その跳び上がったからだから「ああ、何かいいことがあったのだな」と感じる、つまり感情に揺さぶられたからだの動きから感情を読み取っているのである。人間は生まれ育った文化の中でからだ語り、からだを讀む力を獲得していく。舞踊はこのようからだが語る言葉をベースにして、自らの内面をからだで語るものであり、日常的な身体表現と舞踊とは一つの連続体を成す。そしてここで言うからだとは、身体の在り方がそのまま精神の在り方であり、また精神の在り方がそのまま身体であるという、心身一如のからだを意味し、筆者はこれを「まるごとのからだ」と読んでいる。

#### 4、舞踊創作から発表の過程におけるコミュニケーションの諸相

舞踊におけるコミュニケーションは、言語や数式などの論理的な情報伝達とは異なり、身体の動きが生み出す多義的で主観的な情報伝達を行うもので、そこでのコミュニケーションは人間の感性に働きかける感性情報のやりとりが主体である感性コミュニケーションである。

舞踊におけるコミュニケーションには次のような様相をみることができる。

『風』をテーマに5人で創作する場合を例にして、それぞれの様相についてみていく。

##### ①創作者における、内的世界とのコミュニケーション

まず、各人が風をどのように捉えるのか、自然現象としての風の音を耳で聞き、その暖かさや冷たさを肌で感じ、風が運ぶ香を嗅ぐ、風に動かされ、飛ばされる物や人を見る、というような過去の経験や現実の感覚・知覚から呼び起こされる様々な感情や思考、そこに直感や想像力を働かせ、表現内容のイメージを描く。

##### ②グループ創作における創作者相互のコミュニケーション

5人で各人のイメージを言語であるいは動きや絵などで出し合い、お互いのイメージを照合し、検討しながら、それらを一つのイメージにまとめ上げる。

##### ③踊手（創作者）相互のコミュニケーション

イメージにふさわしい動きを各人が、或いはみんなで作出し、それらの動きを構成して一つの作品を創りあげる。作品が完成したら、5人で踊り込む。その際、その作品のイメージにふさわしい踊り方を工夫して、自ら踊ることによってその動きを体感し、その体感によるフィードバックと、踊りながら仲間の踊りを見、また全身で感じ取ることによって踊り方を確認する。

##### ④踊手と鑑賞者（創作者）とのコミュニケーション

鑑賞者はその目に見える動きを通して、目に見えないダンサーの内的世界を感じとる。その感じ方はダンサーと鑑賞者、両者の内的世界の掛け算の結果である。

\*創作者と踊手が異なる場合：創作者と踊手のコミュニケーション

#### 5、ダンスセラピーの実践

精神的に健康である人は、身体感覚・身体感情がきちんと働き、生き生きとしたからだで現実を感じ取り、活動的に反応することができるのに対し、精神に疾患を持つ人は、身体感覚・身体感情に乏しく、そのからだからは、なかなか生命力が感じられない。そこでダンスセラピーでは、クライアントのからだに、動きと力を取り戻すことがまず第1に必要であり、からだを動かすことによって凍った感情を揺り動かしたいと考えた。実践にあたっては、筆者自身の舞踊創作活動や舞踊教育の実践、及びそれらをベースにした研究から、ダンスセラピー実践の原理として

①運動—呼吸—感情の連合 ②凍った身体感覚と身体感情の解凍 ③共感 の3つを導きだし、またセラピーとしてのダンスの機能を①心身の開放②個人を創造的に表現する③他人とのコミュニケーションをはかると捉え、これらを軸として1回のセッション（60分）を5つのパートで構成している。

対象は、疾患に関わらず医師がセッションへの参加を促したクライアントであり、1クラス8名前後で、月に2回のペースで実施した。

#### セッションの構成

**[Part. A]** 筆者が作舞したフォークダンスを、すべてのメンバーが見える円形、連手で踊る。ラポールを築くことと、ダンスを楽しむ（リズムにのって引っぱりっこをする）中で、普段出したことのない自分の力を実感することが目的である。このような踊りがクライアントのからだに動きと力を取り戻し、そのことは即ち、身体感覚・身体感情を取り戻すということを意味する。

**[Part. B]** からだのいろいろな動かし方の探究を通して、自分のからだがどんなかこうができ、どんな動きができるのか、またその時どんな気持ちができるのか、ということを実感することが目的。ここでは運動と感情と呼吸の関係に気付かせるために、呼吸法を使って動くことを意識するように指導する。

**[Part. C]** 筆者のセッションの中心となるパート。毎回、異なる表現の課題を提示し、まずみんなでその課題で動き、その後、各自で、からだを動かすことによって自分の中に湧いてきたイメージと動きを結び付け、ダンスを創る。自分の感じたこと考えたことを、自分の動きで踊り、或いは、感じつつ踊ること、このことの心地良さや、又、普段、表に出すことのできない、自分の内面を表現することの楽しさや喜びを味わうことができ、そのことによって、からだに生気が感じられるようになる。そして、一人ずつが自由に踊っているうちに、その場がひとつの雰囲気をもった空間となり、2人や3人で事前に相談をすることなく、からだで感じあって一つのテーマで踊るようになり、そこには、「まるごとのからだによるコミュニケーション」の成立をみることができる。

**[Part. D/ E]** 各自で創ったダンスを一人ずつ発表し、それをビデオに収録（Part. D）。全員の発表後に、参加者が感想を述べあう（Part. E）。Part. DとEでは、各自が、課題そのもの、或いは課題から広げたイメージを自分の動きで表現し、それをお互いに見せ合うことによって、お互いの良さを認め合うことが目的。このような、自分で創り、或いは仲間と感じあっての表現を発表することにより、自分のからだでの表現を見られる喜びと同時に、他の人の表現の個性を感じとり、それを言語で表現するようになり、言語によるコミュニケーションも成立するようになる。

## 6、実践を通してのクライアントの変化

以上のような理念と方法で、筆者と精神医学者である田中朱美東京女子医科大学教授（現在、名誉教授）が実践してきたダンスセラピーのセッションの参加者（内因性鬱病）は、田中教授のインタビューに次のようにこたえた。

「ダンスは楽しい」と答え、指導者に対しては「明るくて自分のいい所を引き出してほめてくれる」、ダンスを始めて変わったところは？との問いには、「目標がもてた。生きる張り合いができた。一つの音楽、一つのテーマをどう表現するか悩まなくとも素直に表現できる。どこかで、自分の存在を叫んでいると思う。ダンスによって自分の感情を素直に表現できるとしたら、すばらしいものに巡り会えたと思う。」と答えた。

ここに、自分の存在を確信できないクライアントがその確信を回復していく過程をみ、ダンスとは自分の存在の叫びであり、それが生きる力につながっていることがわかる。

## 7、大学生を対象としたダンスの授業実践

対象；神戸大学2年生 17名 (m9, f8)

期間；2004年前期 12回 (90分授業)

1回の授業の構成

- 【 Part. A 】 Warming-up
- 【 Part. B 】 課題の学習
- 【 Part. C 】 イメージの出し合い
- 【 Part. D 】 デッサン (仲間と創作)
- 【 Part. E 】 発表と鑑賞

### 授業内容

- ① ・太陽への祈り 舞踊運動課題<大一小>
- ② 舞踊運動課題<走る—止まる> <押す—引く>
- ③ 舞踊運動課題<走る—跳ぶ—つかむ> <踏む—とびだす>
- ④ イメージ課題<花火>自習
- ⑤ 体感による3つの舞踊運動の感情価 1回目・分析用ビデオ撮影
  - ⑥ // 2回目 イメージ課題<風> 回り方・走り方
  - ⑦ // 3回目・分析用ビデオ撮影・舞踊運動1の体感からデッサン
  - ⑧ // 4回目・舞踊運動2の体感からデッサン
  - ⑨ // 5回目・分析用ビデオ撮影・舞踊運動3の体感からデッサン
- ⑩ 舞踊運動課題<離れる—寄る> 連手で、手を離して
- ⑪ 個人創作 自習
- ⑫ 個人作品の発表と評価

## 8、実体験を通して、学生が捉えた「人間にとっての舞踊の役割と意義」

学生には毎回の授業記録と、最後の個人作品の発表時には相互評価を求めた。更に、12回の授業終了後には、「人間にとっての舞踊の役割と意義」というテーマでのレポート(2千字程度)を求めた。

毎回の授業記録とレポートから、学生は、「舞踊はコミュニケーション」であり、「自己理解と他者理解」を深めるものであるととらえていることがわかる。ここでは、授業のどのような局面がどのような気づきへと結びつき、自己理解と他者理解を深めていったのか、学生の記述を抽出し、概要を報告する。

(1) いろいろな人とペアを組み、一つの課題からイメージを出し合い、動きを出し合っただけの創作を通して、

- ①ひとつのものに対する考え方・物の捉え方は様々であるが、どこかに共通点があるから理解しあえる。
  - ②人との相違点を通して自分を知る。新しい自分を発見する。
  - ③相手の心の内側まで入り込むことができ、共感することができる。
  - ④素直な自分をさらけ出すことができる。  
\*個人創作 全部1人で創作というのは2人でやるよりも難しかった。相手の意見をヒントに新たなアイデアが浮かぶといったことがないからだ。
- (2) 自分たちが創作したダンスを踊ることを通して
- ①呼吸を感じる；自分で自分の呼吸を感じながら身体で表現することがこんなにも気持ちいいのかと実感
  - ②息を合わせようから呼吸が合うへ  
相手と呼吸を合わせることによってばらばらだった動きがシンクロしてくる。たとえ言葉を介さなくても、舞踊運動という身体表現によって、相手とわかりあうことが可能である。
  - ③何度も踊り込んでいくうちに、そのたびに新しい発想が生まれる。
  - ④発表することへの恥じらいから、発表することの楽しさと満足へ
- (3) 仲間の創作したダンスをみることを通して
- ①同じ様なイメージから考えた動きでもペアが異なると全く違う動きになる。
  - ②他の人たちの発表をみた時「えっ、そんなことも考えてるの？」と思うことが多かった。
  - ③個人発表；個性がでていておもしろかった。他の人が踊っているのをみている時、「あの人は今どんな気持ちで踊っているのだろうか？」と思うことがよくあった。
  - ④気持ちよさそうに踊っている人の踊りは、みている人をいろんな世界に引き込む。
  - ⑤一番印象的だったデッサンには一連のながれがあり、空間を広く使っていて迫力のあるデッサンであった。みているだけなのに2人の呼吸を感じていた。
- (4) 仲間と創作したダンスを踊る自分たちのビデオをみることを通して
- ①自分が思っているよりも、二人の動き、立ち位置にズレがあった。やはり、二人が完全に動き息を合わせるには何度も練習が必要であると感じた。
  - ②飛び跳ねることで楽しそうに見えることが分かったし、実際自分が飛び跳ねて踊ると楽しかった。
  - ③イマイチ自分たちがイメージしていたものをみている人に伝えられなかった気がする。それはビデオをみて思った。もっと「幸せ」というものがどういったものなのかを2人で意見を出し合っ  
てふくらませていけばよかった。
- (5) 舞踊運動の習熟と体感を通して
- ①決められた同じ踊りをしていても、その時の気分や、踊りに対する慣れなどにより自分の内側からでてくる感情に微妙ではあるが、ズレを感じた。しかし、どの時に感じた感情も実際に感じたもので、違和感はない。つまり、その時の状況によって変わる自分の内側の部分を自然に受け入れることができ、自分のことを理解することができる。普段の生活ではこういったことを感じることは難しいが、舞踊によって、より自分の内側に目が向けられることによって、そういった感情の変化にも気づくことができ、また自分の新たな一面を発見できる。
  - ②3つの舞踊運動を踊ってみて気づいたことはこのような動きもあったのかということだ。我々が普段しないような動きを取り入れることによって「神秘的」とか「厳かな」といった表現もでき

るのだということに気づいた。

ここには、17名の学生の記述から（1）から（4）に該当する記述の例を抽出し、受講生全体の傾向を示してきた。次いである男子学生のレポートを取り上げ、一人の学生がどのように人間にとっての舞踊の役割、意義を考えるようになったのか示すことにする。

### 最終レポート 人間にとっての舞踊の役割・意義

この授業で、初めて舞踊運動というものに触れてみたわけであるが、はじめはただ授業で単位を取るために受けていたという感覚があったが、授業が進んでいくうちにいくつか今回の課題について感じたことがあった。

まず、毎回授業のはじめに行っていた「太陽への祈り」であるが、これについて僕ははじめのうちはゆっくり動くだけの準備運動程度にしか思っていなかった。ゆっくりとした動きを何も感じないままやり過ごしてしまう。それこそが現代の人々の心の余裕のなさを象徴しているのである。発達した現代社会の中で高速化が進み、人々は生き急いでしまっていて、ゆっくりとした時間を感じるができなくなってしまっているように感じる。その点でこの「太陽への祈り」は忘れかけていたものを思い出させてくれるものだと思う。

次に舞踊運動の習熟と体感についてであるが、これはそれぞれの人の感性や想像力を見ることができなかな面白かった。同じ舞踊運動でも全く感じ方が違い、表現の仕方も違ったものになっていた。しかし、これこそが個性というものであり、もし皆がまったく同じ感じ方、同じ表現をするならば、この授業というものは全く意味を成さなかったであろう。また、同じ舞踊運動を何度も繰り返していくうちに感じなかったものを感じるようになったし、柴先生のアドバイスによって新しいものが見えてきたりした。そこで気づいたのだが、毎回同じ気分でこの授業に望めたわけではない。気分が優れないときもあったし、楽しい気分の時もあった。そういった気分の違いによっても体感というものは変わってくるのである。そして、そういった体感の仕方は日常生活においてもよく使われる。例えば、この人は何を言おうとしているのか、とか、対人コミュニケーションに必要な要素になってくるように思う。もし、体感が全く人とはかけ離れた人であれば、その人は日常生活においても全く人とは違うコミュニケーションの取り方をするかもしれない。そう考えるとこの体感に関する舞踊運動は、相手の言わんとすることをいかにして感じ取るかという、地味であるが非常に大切なものであった。

あと、この授業でやったことは、二人ないしグループでの創作である。これは初めはただ先生に言われたままのことをやっていたし、半分ふざけてやっていた。しかし、ある時柴先生に言われたことが非常に印象に残っている。それは僕たちが人の発表を見て笑った時である。人の発表の本当の意味を理解できないで笑うのは、その人のことを本当に知らないからだと言われた時に、僕ははっとした。確かに大学に入って一年間一緒に過ごした仲間であったが、みんなのことをどれくらい知っているのだろうか。その時から、他の人の発表をみる時、どんなことを僕に伝えたいのだろうかとか何を思っているのだろうかということを考えながらみるようになった。

また、創作して、パートナーと踊っている時というのは、決して自分の動きたいように動いていても良い動きはできない。もし自分が相手の事を無視して自分の表現したいように表現すれば、そのペアの発表はとても見ていられないものになるであろう。相手のことを考え、相手と呼吸を合わせることによって初めて良さが発揮される。はじめはうまくいかないかもしれないが、練習を何度も重ね、何度も話し合うことによってばらばらだった動きがシンクロしてくる。このことからどういうことがみえてく

るのか。それは舞踊というのは言葉ではなく、身体のコミュニケーションなのである、ということである。そして、社会性を身につけるための手段でもあると思う。たとえ、言葉を介さなくても、舞踊運動という身体表現によって、相手とわかりあうことが可能なのである。現代のひとびとは、発達した通信手段のもとで文字によるコミュニケーションを大きく発展させている。これはこれでいいことであると思うのだが、人間の深い内面を知ろうとすれば、文字だけでは決して伝わることはないだろう。それに、人種が違えば言語も変わってくる。そうすれば文字や音声によるコミュニケーションに限界が生じてくる。しかし、舞踊にとっては言語や音声は重要ではなく、体の動きによって相手に伝えるので、人種や言語の違いは全く問題はないのである。現代においては普段はほとんど使われることのない舞踊であるが、自分も含めて希薄になってしまっている人間関係をより深く強いものにしてくれる手段であるところの授業を通じて強く感じさせられた。こういうことをより多くの人が気づき、舞踊を通じての身体のコミュニケーションを図ることができると、この混沌とした世の中も少しは変わるのではないかと思う。つまり、このレポートの課題である舞踊運動の意義や役割というのは、身体表現を通じて社会的・文化的なコミュニケーションをとるといえることが最も重要なのである。

## 9、終わりに

ダンスセラピーの実践と大学生へのダンスの授業の実践から、目に見える運動を通して目に見えない内的世界を表現する舞踊の活動は、その場に在る者の心と身体が相互に響きあい、その過程は「誰もがかけがえのない存在である」という確信を築きあげていく過程であることを示してきた。

複数の人々が一つの場所に集い、一人で、或いは複数の人々で創り、踊り、観る、そこに、誰が存在し、どのように係わるかによって、生成する場は違って来る。例えば、ダンスセラピーのセッションの最中に主治医が入ってくると、クライアントの表現は目にみえて変わってくる。その時、そこに集う人々は、それぞれ、自分とそこに居る他の人々との関係を感じつつ踊り、自己を他の人々との関係において創造的に表現している。このように自己を超越的に表現できることが真の自己表現である。

また、運動—呼吸—感情の関係について、クライアントのダンスにも学生のダンスにもそれらの関係に変化が現れ、学生の記述には体験を重ねるにつれて呼吸や流れに関する記述が増えてくる傾向がみられた。流れがある舞踊運動とは、単なる動きの羅列をつくる、あるいは動きの羅列として感じ取られるものではなく、ひとつひとつの動きと動きの間が生み出されることによって、ひとつひとつの動きが有機的に結びついたひとつの生き物として運動であり、その間は呼吸と深い関係にある。

このことは象徴的な言い方をすれば、学生が舞踊運動に流れを感じた時、学生のダンスに生命が宿り、徐々にその生命が成長してきているとみることはできないのではないだろうか。

## 【 文 献 】

- [1] 鯨岡峻『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房、京都、1997.
- [2] Maslow, A. H. (小口忠彦訳)『人間性の心理学』産能大学出版部、東京、1987
- [3] Martin, John. (小倉重夫訳)『舞踊入門』大修館書店、東京、
- [4] 清水博『生命知としての場の論理』中公新書、東京、1996
- [5] 柴眞理子『身体表現—からだ・感じて・生きるから』東京書籍、東京、1993
- [6] 柴眞理子「ダンスはコミュニケーション」『身体性とコンピュータ』岡田美智男他(編)共立出版、東京、2000.
- [7] 柴眞理子・田中朱美「精神病院入院中の患者に対するダンスセラピーの展開とその検討」人体科学第2巻第1号、PP.37-47、1993.

# Bodily Sensation in Dance: its Formation and Cultural Difference

Kiyoshi Maiya\*, Mariko Shiba, and Kiyoko Tsubokura

\*Institute for Promotion of Higher Education, Kobe University, 1-2-1, Tsurukabuto, Nada ward, Kobe, 6578501, Japan  
E-mail: maiya@kobe-u.ac.jp

Bodily sensation in dance was investigated by two experiments. In the first experiment, fourteen Japanese university students participated in the dance session once a week five weeks. In each session, they were exposed to the video which displayed each of three feeling values of dance movements (anger, sadness and pleasure), evaluating their emotional perceptions during their dance exercises. As the results, the strength and the variation of the emotional perceptions decreased until the third session, increased at the fourth session, and decreased at the fifth session, which suggests cognitive change in the bodily sensation through the dance exercise. The cognitive change was supported by the subjects' writings after each session. In the second experiment, thirty-two Japanese students (female) and fifteen Chinese students (eight males and seven females) participated in the dance session once, exercising each of eight feeling values of dance movements and evaluating their emotional perceptions while dancing. The results indicated that there are significant cultural differences between Japanese and Chinese for the dance movement of pleasure, sadness and solemnity. It is discussed that the bodily sensation in dance which is considered as culture-specific and learning-based is not the same as the visual perception of dance and facial expression of emotions.

**Key words:** *Bodily Sensation, Feeling Values of Dance Movements, Cultural Difference*

---

## Introduction

Dance is an art of expressing feelings. A series of the studies on the feeling values of dance movements (Matsumoto & Kawaguchi, 1972; Matsumoto et al., 1973; Shiba & Kawaguchi, 1975) confirmed that the observers can perceive basic feelings for the seven basic dance movements; Dynamic-, Sharp-, Solemn-, Natural-, Lonely-, Flowing-, and Happy Movement. That is, skilled dancers can convey those feelings to everybody by dancing the counterpart of dance movements which are called "seven motives". This relationship is similar to that between the basic emotions and the basic facial expressions (Ekman & Friesen, 1975).

The visual perception of dance movements is considered to be learned and acquired through exercise of dancing, although there is innate mechanism underlying it. According to Matsumoto (1996) and Russel & Fernandez-Dols (1997), some facial expressions are universal, and some facial expressions are cultural-specific. The reliable relationship between visual perceptions and dance movements may be also

learned and strengthened in dance education. Therefore, the relationship is culture-specific in dance as well as in facial expression.

In the study on the feeling values of dance movements, the focus has been on the relationship between the visual perception and the dance movements, while not on the relationship between the dance movements and the bodily sensation, i.e., the emotional perception which the dancer experiences through dancing. However, in the dance lesson, allegedly, the bodily sensations are important. As to the process of dance learning, Hara et al. (2005) discussed as following,

In the process where the learner acquires a certain dance movement, elements of the movement is internalized and integrated. What the learner acquires in the process of such internalization and integration might be "the feeling values by bodily sensations".

On the bodily sensation in dance, no study has been done but by Shiba (2003) and her collaborators

(Hara et al., 2005). Shiba (2003) compared skilled dancers and students for the bodily sensations of the seven motives and found that the dancers could discriminate some movements (Solemn Mv., Natural Mv., and Lonely Mv.) more accurately than the students. In Hara et al. (2005)'s experiment, after the dance exercise was repeated three times, the bodily sensation became richer and more various than before. This study aimed at investigating the followings,

- 1) the variation of bodily sensation in dance after more than three repetition of dance exercise in Experiment 1, and
- 2) the cultural difference between Japanese students and Chinese students in Experiment 2.

### Experiment 1

#### Methods

##### Subjects

Fourteen Japanese University students participated in Experiment 1.

##### Stimuli

A skilled dancer danced three feeling values (anger, sadness, and pleasure) in front of the video camera. The three performances were recorded by VTR and exposed to the subjects as samples of dance movements.

##### Procedure

The fourteen students attended at the dance class once per week. In each week, three sessions were done for the dance movement of anger, sadness and pleasure. In each session, the performance a dance movement was displayed by the video and the students watched it, before they exercised the dance movement, evaluating their emotional feelings. In the evaluation, the students chose up to three emotional words from the lists including eighteen emotional words, and wrote the score (the intensity from 1 to 4) for each emotion chosen. The dance class continues five weeks. In the end of the dance class, the students wrote the change in dance and feeling during the five weeks.

#### Results

The number of persons who perceived the feeling values of the three dance movements is indicated for each session in fig.4 to fig.5. The average numbers of bodily sensations for each session are plotted in fig.4.

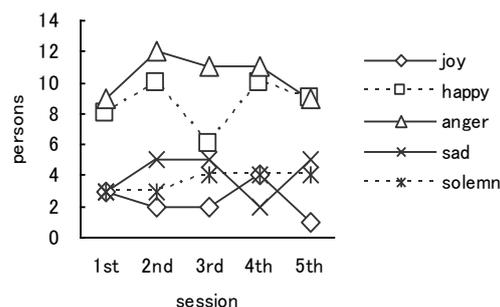


fig.1 bodily sensation of dance movement of anger

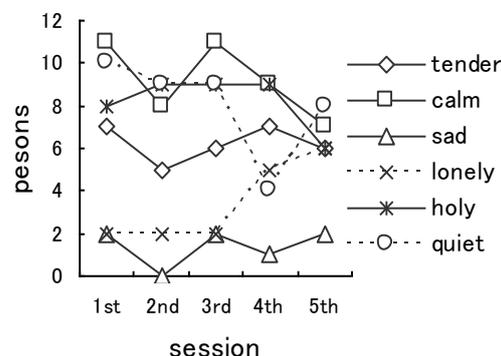


fig.2 bodily sensations of dance movement of sadness

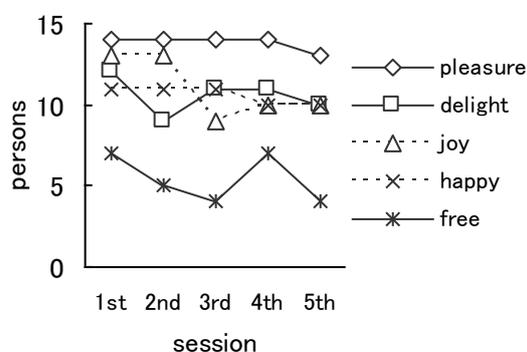


fig.3 bodily sensation of dance movement of pleasure

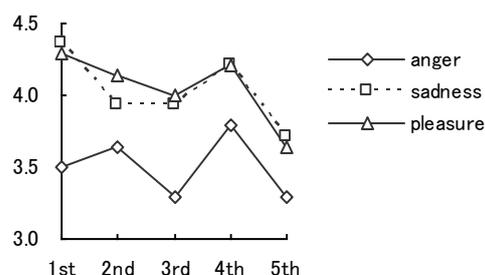


fig. 4 The number of bodily sensations

As is shown in fig.1-3, there are tendencies as following;

- 1) For each dance movement, the most popular bodily sensation (anger, calm, and pleasure for fig.1, fig.2, and fig.3, relatively) decreases in number of persons after three or four sessions.
- 2) For each dance movement, there is at least one bodily sensation which decreases until the third session, increases at the fourth session and decreases again at the fifth session. In this group are joy for “anger”, “tender” for “sadness”, and “free” for “pleasure”.

The variations are near the same in fig.4.

## Experiment 2

### Methods

#### Subjects

Thirty-two Japanese University students (female) and fifteen Chinese University students (eight males and seven females) participated in Experiment 2.

#### Stimuli

A skilled dancer danced eight feeling values (1.pleasant, 2.sad, 3.big, 4.violent, 5.tender, 6.solemn, 7.hard, 8.quiet) in front of the video camera. The eight performances were recorded by VTR and exposed to the subjects as samples of dance movements.

#### Procedure

The thirty-two Japanese students attended at the dance class once per week in Jyumonji University in Japan. The fifteen Chinese students attended at the experimental session held at Shanghai Chinese Medical University in China. Only one session was done for the eight dance movement. In each session, the performance a dance movement was displayed by the video and the students watched it, before they exercised the dance movement, evaluating their emotional feelings. In the evaluation, the students chose up to five emotional words from the lists including eighteen emotional words, and wrote the score (the intensity from 1 to 4) for each emotion chosen.

### Results

Data of all the subjects (forty-seven persons) were

put together into the procedure of factor analysis. Five factors whose eigen value was more than 1.0 were extracted by the factor analysis. For each factor, the factor scores were calculated and compared between the Japanese subjects and the Chinese subjects. As the results of t-test, significant difference was found between the Japanese subjects and the Chinese subjects more than one factor in six dance movements. The significant difference was found for more than three factors in the dance movement of sad, violent and solemn.

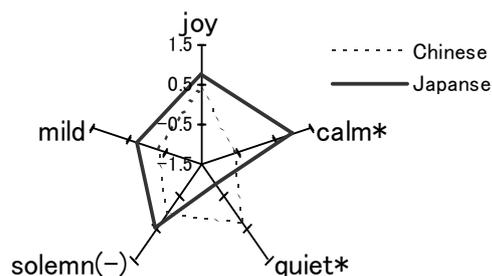


fig. 5 factor scores for dance movement1 pleasure

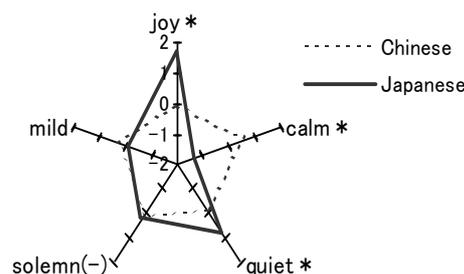


fig.6 factor scores for dance movement2 sadness

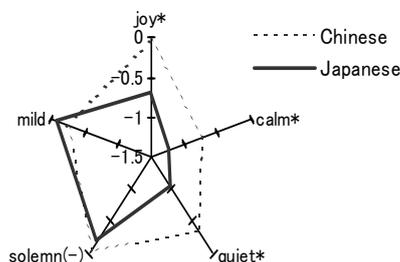


fig. 7 factor scores for dance movement 4. violent

(\*: significant difference between Chinese and Japanese,  $p < 0.05$ )

(-: inverted scale)

## Discussion

The results of Experiment 1 suggest that the repetition of the exercise causes a certain change in recognition. This suggestion is supported by the writing of the subjects after the class, describing the change in dancing as well as bodily sensation around the third sessions. The variation and the strength of bodily sensation decrease around the third session. This decrease in variation and strength is considered to correspondent with the integration and the internalization of bodily sensation as Hara et al. (2005) noted. If the subjects had been to observe the video, such decrease would not have occurred.

Moreover, the cultural differences were found between the Japanese- and the Chinese subjects. This suggests that the bodily sensation correspondent with the dance movement is culture-specific. When the video records of the subjects' exercise are analyzed, the cultural differences in dancing also will be found.

These findings support the hypothesis that the bodily sensation in dance is learnable, i.e., can be improved through training even for the feeling values of dance movement. The bodily sensation in dance which is considered as culture-specific and learning-based is not the same as the visual perception of dance and facial expression of emotions.

## References

- Ekman, P., & Friesen, W. (1975). *Unmasking Face*. Prentice-Hall Inc.: New Jersey.
- Hara, J., Shiba, M., Izaki, Y., & Tsukamoto, J. (2005). Correlation between improvement of dance technique and emotional perceptions -A study of students with less experience in dance-. *Journal of the Pedagogy of Physical Education*, **21**, 31-44.
- Matsumoto, D. (1996) *Unmasking Japan: Myths and Realities about the Emotions of the Japanese*. Stanford University Press: California.
- Matsumoto, C., & Kawaguchi, C. (1972). A study on the feeling values of dance movements. *Bulletin of Faculty of Sports, Tokyo University of Education*, **11**, 66-75.
- Matsumoto, C., Kawaguchi, C., Tokuie, M. (1973). A study on the feeling values of dance movements. 2. Evaluation of works of dance. *Bulletin of Faculty of Sports, Tokyo University of Education*, **12**, 71-79.
- Russel, J., & Fernandez-Dols., J. (1997). *The Psychology of Facial Expression*. Cambridge University Press: New York.
- Shiba, M. (2003). Feeling values of dance movements through bodily sensation ~A comparison between dancers and students~. *Bulletin of Faculty of Human Development, Kobe University*, **10(2)**, 173-181.
- Shiba, M., & Kawaguchi, C. (1975). A study on the feeling values of dance movements. 3. on the differentiation of expressive movements. *Bulletin of Faculty of Sports, Tokyo University of Education*, **8**, 89-100.

If you have any questions, please feel free to contact us on:  
maiya@kobe-u.ac.jp

## ■実践提案

### 踊る技術の向上と体感獲得の過程 —舞踊経験の浅い学生の感情価に基づいて—

原田 純子 (大阪女学院大学), 柴 真理子 (神戸大学)  
猪崎 弥生 (中京女子大学), 塚本 順子 (天理大学)

#### Correlation between improvement of dance technique and emotional perceptions

- A study of students with less experience in dance -

Junko Harada, Mariko Shiba, Yayoi Izaki and Junko Tsukamoto

#### Abstract

There are two approaches to the studying of the relationship between dance movements and emotions: one that studies what impression is perceived by a person who sees a movement (Matsumoto.1984), and the other that studies so-called "Bodily Sensations," or emotional perceptions which a dancer perceives while he or she is dancing. (Shiba 1996, 1997a, 1997b, 1998, 2003 b)

We assumed that investigating the interrelated process of the refinement of dance technique and emotional perceptions in dance would lead to finding an effective way of teaching dance. And we aimed to come up with a hypothetical model of correlation between the level of improvement in dance technique and the level of emotional perceptions.

The results are as follows:

1. Emotional perceptions vary with improvement of dance technique.
2. Students also improve in dance technique as they rehearse movements further. In the case of the students with less experience in dance, each movement is integrated into a more flowing sequence at first. And as they proceed, they become increasingly aware of the elements essential for making their own expressions, such as timing, sense of space and breathing which are considered essential for creating original expressions.

As above, dance technique and emotional perceptions affect each other, and they constitute important aspects of creative dance expression.

**Key words:** dance technique, emotional perceptions (bodily sensations)

舞踊における動きと感情の関係はこれまで、動きが、観る者にどのような印象を与えるかという側面(「みえの世界」)から捉えられてきた(松本 1984)。一方柴は、舞踊をおこなう際、踊る本人の中にどのような感情が生起するかという側面、すなわち「体感」という視点からその関係を見てきた(柴, 1996, 1997a, 1997b, 1998, 2003)。

踊る技術の向上と体感の獲得については、未だ解明の途上であるが、舞踊の経験を積むに従ってどの

ように動きが洗練され、どのように体感が明確になるか、そのプロセスを明らかにすることは、今後のより有効な指導法や言葉掛けを見いだすことに資すると考える。

そこで本研究では、舞踊経験の浅い学生を対象に、踊る技術の向上と体感獲得の過程の関係を捉えることを目的とした。

結果は以下の通りである。

1. 舞踊運動を行なう際に得られる体感は、踊る技術の向上と共に変化する。
2. 踊る技術は練習を重ねるにしたがって、段階的に向上すると仮定される。舞踊の経験が浅い学習者

の場合、まずは単一の運動が踊りとしての流れを有してまとまる段階を経て、そののちに、動きの間、空間、呼吸など独自の表現を支える要素を意識するようになる。

以上より、動きを体感し深めていくこと、あるいは広げていくこと<sup>注1)</sup>は踊る技術の向上にとって重要な要因であり、また体感の獲得のためには踊る技術の向上が必要であるというように、両者はともに被験者の舞踊表現を独自のものに導くための重要な柱であると考えられる。

キーワード：踊る技術，体感

## 1. はじめに

人間の動きの中には意識的であれ無意識的であれ、心の状態もしくは感情が反映される。我々が言葉以上のものを相手に伝達でき、また言葉で伝えられた以上のものを、相手に読み取ることができるのは、このような身体動作の機能ゆえである。

松本ら(1984)は「身体や運動が、それ自体の認知だけでなく、それ以上のものとして価値づけられる人間の機能は、社会集団の中での無言のコミュニケーションや評価を可能にしている機能であり、身体によってなされる表現文化の創造と鑑賞を成立させる基底の働きをなしている」と述べ、意識的な身体表現である舞踊における動きとそれによって伝達される感情についての実証的研究を重ねてきた(松本, 1972, 1987; 松本ら, 1984)。なかでも舞踊運動における動きの質と感情の質との連関をみる研究(1987)において松本は、運動が表現質(運動の質)を獲得しうる最小の長さの動き(“Motive” : モーティブ)を設定し、そこに7つの形容詞に代表される基本的な「感情価」があることを導いた。舞踊における「動きの感情価(feeling value of movement)」とは、動きを「鑑賞」して得た感情の性質をあらわし、その基本となる動き(Motive)が、楽しい(Happy Motive : 以下 Mv. と略記)、流れるような(Flowing Mv.), 寂しい(lonely Mv.), さりげない(Natural Mv.), 厳かな(Solemn Mv.), 鋭い(Sharp Mv.), 躍動的な(Dynamic Mv.)の7つの形容詞に代表される7 Motives である。

これら「動きの感情価」に関する一連の研究は、舞踊創作と舞踊鑑賞のための具体的指標を得るという目的に沿い、身体運動と感情の連合関係を「みえの世界」からとらえたものである。すなわち「みえの世界」からのアプローチとは、ある運動がどのようにみえるか、

換言すれば鑑賞者にどのような印象が受容されるかというものである。

一方柴は、舞踊運動を踊る者がその舞踊運動をどのように「体感」しているかという観点から身体運動と感情の連合を明らかにしようとしてきた(柴, 1996, 1997a, 1997b, 1998, 2003a)。この際の「体感」には、「踊るという実体験を通して身体に受ける感じ」「自分が踊ることによって身体で感じ取った感じ」という意味を賦与し、先行研究の被験者には「体感」をそのように説明してきている。実は、この体感とは体性感覚(触覚, 圧覚, 温覚, 冷覚, 痛覚, 運動感覚)の略称である。前述の「踊るという実体験を通して身体に受ける感じ」とは、これらの体性感覚のうち、運動感覚を基盤とする総合的な知覚と言えるのかもしれない。しかし、これを運動感覚による感情価といわず、「体感」による感情価としてきたのには2つの理由がある。一つは被験者に「運動感覚による感情価」と言った場合、筋肉感覚や運動感覚といった個別の感覚から受ける感覚印象に止まるのに対し、前述の意味を賦与した「体感」には運動感覚といった個別の感覚から受ける印象を超えて、より総合的な感覚印象となると考えたからである。そしてもう一つには、諸感覚の統合を共通感覚論の立場から考察した中村雄二郎が、諸感覚の基体としての体性感覚<sup>注2)</sup>を、また諸感覚の基体的統合としての体性感覚の統合を、共通感覚と深くかかわりつつ、活動する身体(身体的実存)の基礎を成すものと考え、重視しているからである。

ところで、われわれが物事を認識しようとするときには、“暗黙知”が働いているといわれる。すなわちわれわれは、言葉で語りうる以上に、より多くのことを把握している。中村雄二郎によれば、この知においては身体が関与し、“棲み込み(dwelling in)”ということが起こっているという。すなわち、

棲み込みとはなにかといえば、諸部分からなる事物の全体的な意味を理解しようとするとき、諸部分を外側から眺めるのではなく、その全体の中に、棲み込むことである。そしてそのとき、諸部分はわれわれの身体のなかで統合される。われわれの身体が諸部分を内面化することは、とりもなおさず、全体のなかに身体的に棲み込むことなのである(中村, 1992, p. 18)。

この知の働きを舞踊運動の習得において考えてみると、まず被験者は舞踊運動をみて(「諸部分を外から眺める」といわれる行為)、それに対する視覚からの印象、すなわち松本のいう“動きの感情価”を得る。人間の感覚印象は総合的な知覚であり、「みえ」の世界からのアプローチも視覚のみならず総合的な知覚ではあるが、それは特殊感覚の一つである視覚を基盤とするものであると言えよう。それとともに、もう一方では中村がいう“棲み込み”が起こり、運動の諸部分が身体のなかで内面化され、統合される。この内面化・統合化の過程で学習者が得るものが、ここでいう“体感による感情価”と考えられるのではないか。

筆者らは、舞踊運動を獲得する上での知の働きをこのように考え、舞踊の指導のためには、外側からとらえる「みえ」の世界の探求とともに、内側からとらえる「体感」について明らかにすることが大切であると考えた。

しかし、舞踊学や感情心理学においても「体感」による感情についての体系的な研究はほとんどみられない。

そこで筆者らは、「みえの世界」(動きの感情価)からの研究成果を基盤に、「体感」に

よる感情価の研究を進め、

①舞踊運動を行った場合、運動者は舞踊運動から一定の体感を得ること<sup>注3)</sup>

②舞踊未経験者と舞踊経験者を比較すると、舞踊経験者の方が舞踊運動における体感が明確であること

を実証してきた(柴, 2003b)。

さて、筆者らの舞踊運動の感情価に関する一連の研究は、創造的自己表現を目的とする舞踊教育やダンスセラピーの指導に資するということが根底にある。すなわち、舞踊の経験を積むに従ってどのように動きが洗練され体感が明確になるか、そのプロセスを明らかにすることで、より有効な指導法や言葉掛けを見いだすことができると考える。

そこで本研究では舞踊経験の浅い大学生を対象に踊る技術の向上と体感獲得の過程との関連を捉えることを目的とした。

従来の研究(柴, 1996, 2003b)においては、舞踊家＝踊る技術の高い者にとらえ、その技術の高さと体感の明確さに深い関係のあることをみてきたが、そこでの「踊る技術」は、いわゆる動きのテクニックのみを対象としてきた。しかし「踊る技術」には、動きのテクニックのみならず表現力が含まれ、踊る技術が高くなるとは動きのテクニックが向上することと表現力が豊かになることの二つを意味すると考えられる。そこで、本研究では被験者が舞踊経験の浅い学習者であることを鑑み、「踊る技術」を以下のように考えて研究を進める。

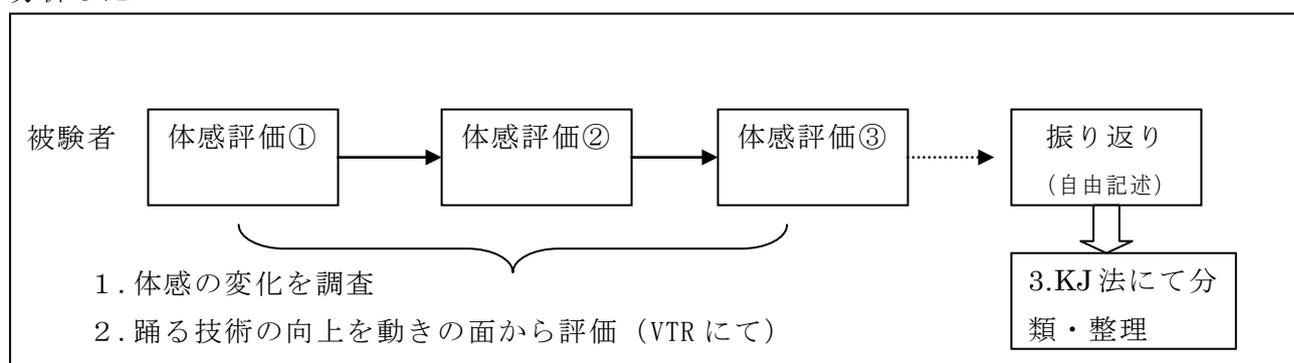
「踊る技術」とは、“脚が高く上がる”，“バランスよく回る”等という、いわゆる「動きのテクニック」のみを指すのではなく、「踊り」として運動を覚え、自分のものとして踊ることができること、すなわち単一の動きを羅列するのではなく、「流れ」を持つ一連の動きとして運動を遂行し、そこに踊り手独自の動きのまとまりが表現されることとする。

## 2. 方法

### 2.1. 方法の概要

本研究の実験は授業の一環として行なった。それは、舞踊の本質を内包する短い舞踊運動を繰り返し練習するという本実験の課題が、「型をとらえ、型を踏み切り板として個性を引き出す運動と表現の連合の学習」(松本, 1987)として、舞踊経験の浅い学生に対する創作学習にふさわしい課題であると考えたためである。

課題とした2種類の舞踊運動について、まず被験者がそれらを踊ったときに感じた体感を記入する「体感評価実験」を行なった。筆者ら4名の舞踊研究者は、この時被験者が踊った舞踊運動の評価を、後にVTRにて行なった(「踊る技術の評価」)。さらに、被験者には最終授業終了時に「本授業の振り返り」を自由記述にて求め、それらをKJ法にて整理・分析した。



## 2.2. 体感評価実験

### 2.2.1. 被験者及び実験日時

被験者は、神戸大学発達科学部舞踊系運動方法論実習Ⅱの受講生15名（男子10名，女子5名）で，全て実習Ⅰ<sup>注4)</sup>を既に履修している。

実験は，2002年10月10日～11月7日に体育館での授業の一環として実施した．そのため，舞踊運動1では男10名，女5名の計15名，舞踊運動2では男9名，女5名の計14名と，被験者数が異なっている。

### 2.2.2. 実験材料の舞踊運動

先行研究（Shiba, 1998）で作成した31種類<sup>注5)</sup>の舞踊運動から，ダンス学習の経験が浅い学生が取組むのにふさわしい舞踊運動を順次取り上げることとし，本研究では2種類の舞踊運動，「大きい」を想定した舞踊運動1と「楽しい」を想定した舞踊運動2を実験材料とした．呈示した舞踊運動の踊り手は舞踊歴8年の大学ダンス部女子学生である．舞踊運動1と2の動きを以下に示した．

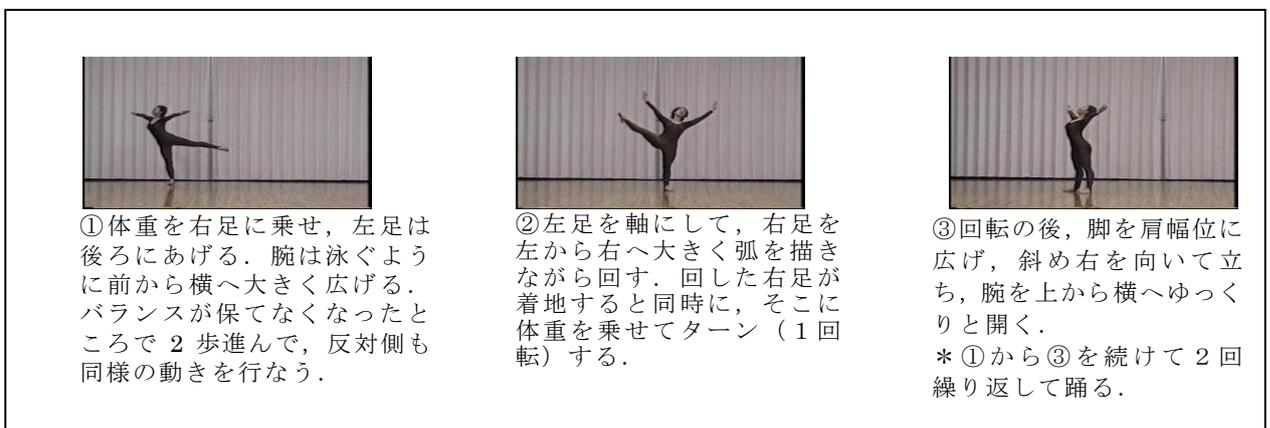


写真1：「舞踊運動1」身体を大きく伸び伸びと使い、空間を大きく移動する動き

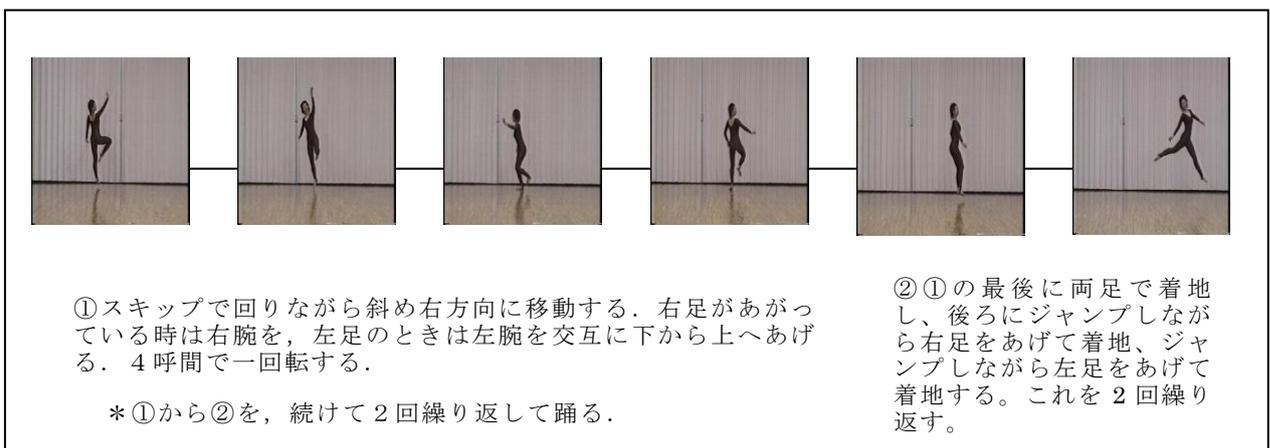


写真2：「舞踊運動2」スキップとジャンプにより身体が上下動する，弾む動き

### 2.2.3. 体感評価の手続き

実験に先立ち，この実験では自分自身が踊ってその舞踊運動からどのような体感を得るかをみることが目的であること，そして一つの舞踊運動について3週間続けて実施することを，被験者に説明した．実験の手順は以下の通りである．

- ①被験者に課題の舞踊運動を VTR で呈示する。本研究では被験者自身の体感の記述がデータとなるので、実験者側が設定した舞踊運動の感情価を被験者に明らかにしていない。
- ②被験者は VTR でみた舞踊運動を約 15 分間練習する。
- ③練習の後、ひとりずつ踊り、VTR に収録する。踊った後、踊った時の体感を感情語<sup>注6)</sup> 5つ以内で記述する。また、特記する事項があれば自由に記述する。

#### 2.2.4. 体感評価の結果の処理

それぞれの舞踊運動について、被験者により記録された感情語とその頻度の変化を整理し、練習の回数を重ねるごとに感情語がどのように変化するかを統計的にみた。統計処理には SPSS11.5J, Categories を用いた。

さらに特記事項については、記述内容から以下の3つのカテゴリーに分類し、分析を行った。

- ①+：動きの上達「～ができた」や「～が気持ちよくできた」などの記述
- ②±：状態や感じのみを述べており、善し悪しはない記述
- ③-：「～ができない」「～が気持ちよくない」などの記述

#### 2.3. 踊る技術の評価

本研究では、筆者ら舞踊研究者4名の協議により、踊る技術の向上過程として5つの段階を仮定し、表1に示す評定尺度を設定した。この尺度では、「ひとつひとつの動きが途切れることなく、踊りとしてひと流れをもって遂行される」ことが、ひとつの到達点であると考え、その段階を基準の「3」とし、その前後に2段階ずつの過程を想定した。

被験者の舞踊運動の評価は、20年以上の舞踊歴と10年以上の舞踊指導歴を持つ本研究の筆者4名の合議によりおこなった。合議に先立ち、2名ずつでそれぞれ評価をおこない、評点が異なるものについては再度4名で動きを観察し、評価が妥当であるか否かを検討するという手続きをとった。表6および表7にその結果を示す。

#### 2.4. 授業の振り返りの記述の分析

被験者には最終授業時に、本授業を振り返り分かったこと、身についたこと、その他の感想等の自由記述を求めた。この記述の内容を KJ 法で、整理、分類し、被験者自身が自分の言葉でとらえている踊る技術の向上、及び体感についての記述を分析した。

表1:踊る技術の評定尺度

得点	評価の観点とその具体例
1	動きがひとつずつバラバラで踊りとしてのまとまりがない *脚をあげる、移動、回るなどの動きにつながりがなく、単一運動の羅列になっている。
2	踊りとしての流れは見えるが、少々まとまりに欠ける *脚をあげる-移動-回るはひと流れでおこなえるが、次の動きの流れとのつながりがスムーズでない。
3	動きがひとつの流れをもち、踊りとしてまとまっている *舞踊運動全体がスムーズに流れを持っておこなわれている。
4	ひと流れの動きを自分の間 <sup>注7)</sup> で踊ることができる *十分に伸ばしたいと思う部分は長く、移動は素早くなど、自分のリズムや息の仕方で舞踊運動をおこなっている。
5	動きのテクニックを超脱し、踊りの中で自分の個性を表現できる *動きにとらわれることなく、動きにイメージを掛け合わせるなど、自分らしい踊り方ができる。

### 3. 結果と考察

### 3.1. 舞踊運動の体感

2つの舞踊運動について、踊った後の感情語の変化と特記事項の分析により、舞踊における体感獲得の過程をみた。

#### 3.1.1. 感情語の処理方法

感情語の分析は以下の方法でおこなった（舞踊運動 1, 2 共に方法は同じ）。

- ①各舞踊運動の 1～3 回目に書かれた感情語の数を回ごとに集計する。
- ②集計した感情語の中で、類義語は整理し一緒にする（例：「やわらか」と「やわらかい」等）。
- ③さらにそれぞれの感情語の 1～3 回目の総計が 1 である語、すなわち 1～3 回目を通して 1 人しか挙げていない感情語を除き、残った感情語を各舞踊運動において主として体感された感情語とする。
- ④舞踊運動が回ごとにどのように体感されたかを統計的にみるために、コレスポンデンス分析をおこない、図にあらわした（図 2, 図 3）。この分析により、各舞踊運動 1～3 回目における感情語のばらつき（表 2, 表 4）を舞踊運動と感情語の近さ（親近性）であらわし、質的にとらえた。

#### 3.1.2. 舞踊運動 1

##### (1)感情語の変化

表 2 : 舞踊運動 1 から得られた感情語の出現頻度

感情語	1 回目 (人)	2 回目 (人)	3 回目 (人)	総計 (人)
楽しい	1	6	3	10
気持ちいい	3	4	2	9
穏やか	3		4	7
のびやか	1	2	3	6
ふわふわ	2	1	3	6
さわやか	1	1	3	5
ゆったり	4			4
解放感	4			4
嬉しい	1		2	3
幸せ	1		2	3
大らか			3	3
やわらかい		1	2	3
落ち着く		1	1	2
すいすい	1		1	2
のびのび		1	1	2
ほがらか		1	1	2
軽やか		1	1	2
広々とした	1	1		2
不安	1	1		2
明るい		1	1	2
優しい		1	1	2
優雅	2			2
流れるような	1	1		2
感情語の種類数(種類)	15	15	17	23

感情価「大きい」を想定して作成された舞踊運動 1 を踊った後の感情語の変化を、上記の方法によって処理した結果を示す。

1～3 回目の後に挙げられた感情語の種類数は 1 回目＝38 語，2 回目＝28 語，3 回目＝45 語であった。これらを整理し，集計したものが 23 語（表 2）である。この表から，1 回目では 4 名が「ゆったり」，「解放感」の 2 語を挙げていたが，2 回目ではこれらの 2 語はなくなり，「楽しい」を挙げた者が半数近くいたことが分かる。また 3 回目には 4 名が「穏やか」を挙げたが，とくに多くの者が集中して挙げた語はなく，語彙にばらつきが見られた。

次にコレスポネンス分析をおこない，これらの感情語と舞踊運動の近さをみた（図 2）。

この図をみると，1 回目（図 2 の M1-1）には「ゆったり」「解放感」「優雅」の 3 語が，2 回目（M1-2）には「楽しい」が，3 回目（M1-3）には「伸びやか」「さわやか」「やわらかい」の 3 語が

図 2 : 舞踊運動 1 と感情語の親近性

それぞれ近くに位置していることが分かる。また，舞踊運動の 3 回目（M1-3）の近くに位置する感情語が多いことから，被験者が体感した感情は 3 回目に至ってやや広がりを見せていると考えられる。

## (2) 特記事項の記述内容について

表 3 は，舞踊運動 1 を行なった後に記録された特記事項の記述を，先述の 3 つのカテゴリ（+，±，-）に分類したものである。（以下，文章中の「 」内の記述は被験者によるものである。）

表 3 : 舞踊運動 1 についての特記事項の記述

回	記述内容	記述例（被験者 15 名）	記述数	記述総数

①	+	緊張していたが、やり始めると気持ちよかった。・動きがなめらかで、とくに手を伸ばす動きが気持ちよかった。	3	21
	±	水と一体になっているようだった。・何かを求めている感じ。・水中遊泳をしている気持ち。・手先から足先までがどこまでも伸びていくように感じた。	12	
	-	呼吸がしにくかった。・体がギクシャクした。・足がつりそう。・動きがまだまだなので、力が入りすぎた。・グラグラして気持ち悪い。・思ったよりふわふわ感が少なかった。	6	
②	+	ターン、タタン、ターン、タタンとリズムが身体の中のできてきた。・流れるようにできると気持ちよくできた。・動くのに力がいらぬ感じ。・爽快感。・気持ちよい	6	21
	±	流れるように・大きく・浮いている感じ・身体がのびていく・遊泳している感じ	15	
	-	(記述無)	0	
③	+	一連の動きをひとつの流れとして行なえた。・途切れた感じがしなかった。・動きと動きのつながりがスムーズになってきたように思う。・伸び伸びとしていて、気持ちが前向きになるのを感じた。	8	22
	±	体がふわっと浮くような感じ。・安らかな感じを体感しながら踊ることができた。・やわらかいイメージで踊れた。・神聖な雰囲気のできた感じがする。・優しい大きな感じがする。	13	
	-	自分の中ではもう少しやわらかい動きをしたかった。	1	

これらの結果を見ると、まず練習を重ねるにしたがって「～ができない」等の『-』記述が減り、逆に「気持ちよくできた」などの『+』記述が増えていることが分かる。記述内容は、1回目は動きが「気持ちよくできた」「どこまでも伸びていくように感じた」「ギクシャクした」というように、舞踊運動をおこなった際に身体がどのような状態であったかという内容であるが、2回目、3回目では「流れるように」「動きと動きのつながりがスムーズに」という記述にみられるように、単一の動きの羅列ではなく、流れをもったひとまとまりの踊りとして舞踊運動を意識していることが分かる。さらに「身体がふわっと浮くような感じ」「優しい、大きな感じがする」という記述のように「大きい」と同様の時性、力性、空間性を動きの上に体感していることを示す内容がみられる。

### 3.1.3. 舞踊運動 2

#### (1) 感情語の変化

舞踊運動 2 の1回目から3回目の後に得られた感情語の種類数は1回目=27語、2回目=40語、3回目=42語であった。これらを整理、集計した結果、表 4 の11語になった。この表からはいずれの回も被験者のおよそ3分の2が「楽しい」と体感していることが分かる。

また、これらの感情語と舞踊運動の親近性をコレスポネンダ分析により表わしたのが、図 3 である。この図を見ると「楽しい」は、いずれの回にも体感されているので、1~3回目のどの回にも近接せず、3つのプロット(M2-1, M2-2, M2-3)の真ん中あたりに位置している。また、1回目(M2-1)には近接する感情語がない。つまり、「楽しい」以外に、被験者の体感は特定されないことを示している。2回目では(M2-2)「軽やか」「さわやか」「ふわふわ」「躍動感」、3回目(M2-3)では「弾む」「嬉しい」が体感されている。

表 4：舞踊運動 2 から得られた感情語の出現頻度

感情語	1回目 (人)	2回目 (人)	3回目 (人)	総計 (人)
楽しい	9	11	9	29
軽やか	1	7	7	15
うきうき	4	1	4	9
弾む	1	2	4	7
嬉しい	1	1	3	5
わくわく	2	1		3
明るい	3			3
さわやか		1	1	2
ふわふわ		1	1	2
るんるん	1		1	2
躍動感		1	1	2
感情語の種類数(種類)	8	9	9	11

(2)特記事項の記述について

表 5 は舞踊運動 2 を行なった後に記録された特記事項の記述を先述の 3 つのカテゴリ（+，±，-）に分類したものである。

この舞踊運動では、『+』記述は2回目で増加するが3回目では減少している。『-』記述は2回目で増えて、3回目はそのまま変化がない。記述内容をみると、回を重ねるごとに運動そのものの難しさに直面しており、ひと流れの動きとして踊るところまではなかなか到達していないことが読み取れる。とくに最初の回転とジャンプのつながりや、1フレーズ目から2フレーズ目への移行の部分がうまくできないという記述が多い。これらから、ひと流れの動きとして踊るためには、動きから動きへの移行部分が大切であることが認識されてはいるが、実際そのように踊るのは困難であったことがうかがわれる。また、記述全体から、設定した舞踊運動の難しさ、とくに腕と足の動きの協応が困難であったことが、舞踊運動の感情価（楽しい）をとらえ難くしたのではないかと推察する。

図 3：舞踊運動 2 と感情語の親近性

表 5：舞踊運動 2 についての特記事項の記述

回	記述内容	記述例（被験者 14 名）	記述数	記述総数
①	+	弾むような感じで、爽快！！	1	15
	±	はねるように・軽い感じ・嬉しい・ランラン・くるくる・清々しい	13	
	-	動きが難しくて、まだ不安。	1	
②	+	初めて踊ったときよりも一連の流れとして踊れたと思う。・身体が少し軽くなり、余計な力が抜けて踊りやすくなった。少しぎこちない気もするが、なめらかになった気がする。	5	15
	±	スタカートで音符が跳ねているような。・つま先でピョンピョン跳ねる感じ。・心が弾む	4	
	-	1回目と2回目のつながりがうまくいかない。・動きと動きの間で止まってしまって、つながりがない。・足の動きに意識が行き過ぎて、手の動きが小さくなる。	6	
③	+	ひとつひとつの動きをバラバラにしないよう、一連の動作として感じれた。・動きのことを考えすぎずに踊れた。	2	19
	±	アルプスの少女ハイジみたいだ。・地面に長く着かないように、それほど上へ上へと気持ちが行く感じ。高く飛ばば、それだけ感情が表現されそう。弾む気持ちが動きを楽しそうにする。ボールが弾むような感じ	11	
	-	あまりリズムに乗れていなかった。・今日はいつもと違い、身体がすごく重たく感じた。・1回目と2回目のつながりの部分が難しかった。・ジャンプの動きが最後までしっかりマスターできなかったのが残念だ。	6	

3.2. 踊る技術（舞踊運動）の評価

先に示した表 1（踊る技術の評定尺度）を用いて、被験者が踊った舞踊運動を筆者である 4 名の舞踊研究者で評価した。

3.2.1. 舞踊運動 1

表6は、舞踊運動1の1回目から3回目の評点を示したものである。また図4には、舞踊運動1の1回目と3回目の評点の散布図を示した。これらより、1回目から3回目にかけて評点を下げているのは1名のみで、そのほかの被験者は、回を重ねるにしたがって評点が同じか上がっていることが分かる。

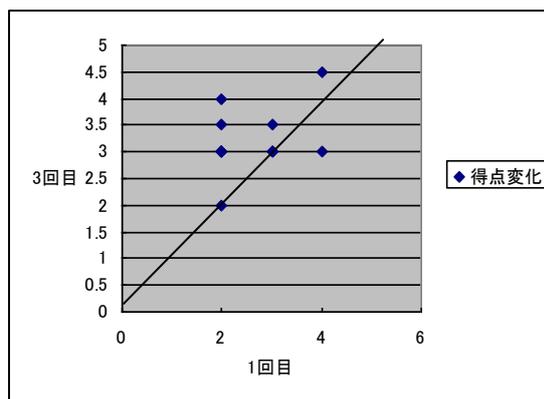


図4：舞踊運動1の評価点変化の散布図

4名の評価者によって、動きの上で変化してゆくと認められた点は以下の通りである。

- ①最初の腕の動きに伸びと広がりが見られるようになっている。
- ②①に続く、動きと動きのつながりとなる足運びが、練習を重ねるにつれてスムーズになり、ひとつの流れをもった踊りとして遂行されている。とくに1回目では、この足運びと①の腕の動きは別々におこなわれる2つの動きであったが、3回目では2つの動きが一連の動きとしてつながり、次の動きの準備部分となっている点が認められた。
- ③さらに次の、脚を回す動きからターン・ポーズへと続く動きも、1回目は単一運動の羅列であったが、2回目では足の重心の移し替えが自然にできるようになり、流れをもった一連の動きとして、まとまりを見せるようになっていた。
- ④3回目になると動きの上で独自の間を持ち、長く伸ばしたいところを十分に伸ばして踊る者や、最後のポーズに自分なりの工夫を加える者もいた。

評価者4名は、被験者の舞踊運動に以上のような変化をとらえた。そこで、多くの被験者が練習を重ねるに従って「大きい」というこの舞踊運動の感情の性質（感情価）を、より体感して踊ることができるようになっていくと判断した。

### 3.2.2. 舞踊運動2

表6：舞踊運動1の評点の変化

被験者	1回目	2回目	3回目
M1	4	4	3
M2	4	4	4.5
M3	2	3	3
M4	2	3	3
M5	2	3	3
M6	3	3	3
M7	2	1	2
M8	3	3	3
M9	2	3	4
M10	2	2	3
F1	2	2	3
F2	2	3	3.5
F3	3	3	3.5
F4	3	3	3
F5	2	3	3

\*Mは男性、Fは女性をあらわす

舞踊運動 2 の評価点の変化を表 7 と散布図 (図 5) に示す.

1 回目と 3 回目の変化を見ると得点が下がった被験者はいなかった. ただし, 2 回目

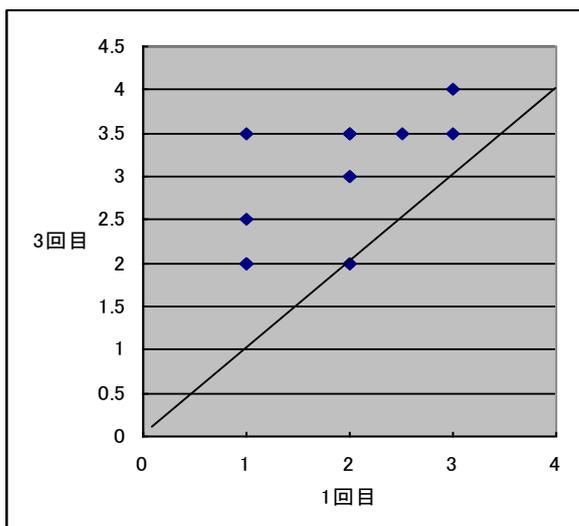


図 5 : 舞踊運動 2 の評価点の変化散布図

で一旦評点が上がり, 3 回目で再び 1 回目と同じ得点に戻った者が 2 名いた.

以下は, 評価者 4 名が動きの上に認めた 1~3 回目における変化である.

①この舞踊運動の最初の動きはスキップであるが, 回転しながらスキップすることと, 腕の動きを伴うことが難しく, 脚 (スキップ) と腕の連動が滑らかでないのが被験者の全体的な傾向である.

②①のスキップに続くジャンプの動きのリズムがとれていないことから, 1 回目はほとんどの被験者が 3 点に達していない. しかし, 練習を繰り返すことでジャンプのリズムはつかめるようになっていた.

表 7 : 舞踊運動 2 の評点の変化

被験者	1 回目	2 回目	3 回目
M1	2.5	3	3.5
M2	1	2	2
M3	2	3	3.5
M4	2	2.5	2
M5	2	3	3.5
M6	1	2	2
M7	2	3	3
M8	2	3	3
M9	1	2	2.5
F1	1	2	2
F2	1	3	3.5
F3	2	3	2
F4	3	3	4
F5	3	3	3.5

\*M は男性、F は女性をあらわす

③3 回目になってもスキップの際の腕の動きに不自然さが

表 8 : 授業後の振り返りの記述

残るために, 全体として自分の間で踊るところまでは達していないと考えられる.

したがって, 舞踊運動 2 では腕の振りとジャンプのリズムの習得にさらなる練習が必要であり, 練習によって脚と腕の動きの連動が十分に身につけば, ひとまとまりの流れをもって, 自分の間で踊ることができるであろう.

### 3.3. 授業の振り返り記録

授業後の振り返りとして記録された自由記述 52 を, KJ 法にて分類・整理した結果, 表 8 のような項目を挙げる事ができた. (以下, 「 」内は学生の記述通り. ()内は記述者をあらわす. 『 』内は KJ 法で分類をした結果出てきた各項目のキーワード (表 8) をあらわす.)

項 目	記述数
踊りを運動として認識（動きがバラバラ）	5
動きの流れを意識（動きがスムーズに、自然になる）	6
イメージを動きにすること	4
「身体」「身体の延長（空間）」を感じる	4
自分の気持ち・感情を表わす	6
呼吸への意識	7
独自の動きの発見から楽しさへ	2
練習による自己の変化、発達	3
自分を表現することの楽しさ	9
身体による感情表現=自分自身を知る作業	6
記述総数	52

最初は「踊りを動きとして身につけることに重点を置き、動けるということで精一杯だった（F3）」というように、舞踊の動きはあくまでも『運動』として認識され、それらをひとつずつ習得するという取り組みが為されていることがうかがえる。しかし、練習を重ねていくにつれて、「踊りの動きができるようになってくると、余計な力が入らなくなり、体にも心にも余裕ができてくるので、流れるような

動きに近づけられるようになった（F3）」や「一連の動作がスムーズになり、ギクシャクとした感じがなくなった（M5）」という記述のように『動きの流れ』に意識が向けられている。また、「初めはイメージがあってもそのイメージで身体を動かすことはできなかったが、（練習を繰り返すことによって）頭の中で考えていること、感じていること、イメージしていることが、動きに現れてくるようになった（M8）」や「実際の身体よりも伸びている、縮んでいる“身体の延長線”を感じられるようになった（M9）」という記述があるように、練習の積み重ねによって『イメージ』をもって動いたり、実際の身体が有する以上の『空間』を感じて動いたりすることができるようになった者もいる。

さらに、「動きによって呼吸が変わっていくように感じた（F4）」、「何度も繰り返し練習し、呼吸を整えていく中で、自然と初めに感じていた感覚が消えていき、だんだん心地よくなってきた（M5）」と、動くときの『呼吸』を意識し、「自分の動きと呼吸がピッタリ同調しているのが自分でも分かって、動いているのが気持ちよく感じた（F5）」というように呼吸を感じながら動く気持ちよく踊れることに触れている。そして「リズムや動作に強弱がついてくると、自分の中で楽しさが出てきて、動きをどんどん変えていくことが楽しく、また一番自分に合っている動きの発見があった。（M7）」という記述があるように、動きの中に自分らしさを出そうと試みていることが分かる。

以上のように学習者は、練習を繰り返すことで動きがスムーズに流れるようになると『イメージ』や『空間』、『呼吸』を意識するようになり、最初の動きをより自分らしく、独自のリズムを持った動きに変化させていく方向に向かうと推察される。

さらに、練習を重ねたことに対しては、「自分の中にある感じが変わっていくことが分かった（F2）」「球技などでも初めは単にゴールにシュートが決まればよいという段階から、1本のパスに意図を持って攻撃するようになる。舞踊にもそのような発達段階があるのだと感じた（F2）」と『練習の成果や自己の変化』を認め、その上で、「こんな風に動いた方がもっとその感情を表わせるというのを考えるようになった（M1）」や「練習の積み重ねによって自己表現ができるようになることは、同時に自分の感情に素直に耳を傾ける作業であると感じた（M8）」というように『身体表現は自分自身を知る作業であった』と述べてい

る。

以上のような被験者の記述から、練習の積み重ねによる動きの習熟は単なる動きの獲得ではないと推察される。被験者は『イメージ』、『空間』、『呼吸』という表現に関わるものの認識とともに独自のまとまりをもって、動きを自己のものとすることに楽しさを感じていることがうかがえる。そして身体による自己表現、すなわち舞踊は『自分を知る作業』であり、舞踊に取り組むことを通して『自己に変化・発達』があったことを認めているといえよう。

### 3.4. 踊る技術の向上と体感獲得との関連

#### 3.4.1. 踊る技術の段階的向上と体感の獲得

以上にみてきた結果より、体感の獲得と踊る技術の向上の関連について、まず踊る技術の向上は、次のような3段階を辿ると仮定した。

- ①舞踊運動を覚えて、動きのひと流れをつかむ段階
- ②流れをもって、呼吸や空間を意識して踊ることができる段階
- ③動きに自分なりの工夫を加味する段階

これらの段階を体感の獲得との関連でみていくと、以下のようなになる。

❶被験者は師範のVTRで舞踊運動を見、それを覚えて踊るため、十分に舞踊運動を覚えきれていない場合（上記の①の初期段階）は、「みえ」の影響が感情語を左右することは避けられないと思われる。ゆえにこの段階では、運動の大まかな特徴を理解して踊るに留まり、体感もまだ浅いと推測される。

❷2回目になると完全に動きを覚え、ひとつの流れをもって動きを遂行するとともに、呼吸や空間を意識するなど、身体の使い方がある程度自分でコントロールして踊ることができるようになる。そこで、舞踊運動1,2ともに2回目で多くの被験者が体感した『楽しさ』は、舞踊運動のもつ感情価を体感したというより、踊ることに対する「楽しさ」ではないかと推察する。ただし、本研究では「悲しい」「小さい」など、「楽しい」「大きい」とは明らかに質の異なる舞踊運動を取り上げなかったので、踊る『楽しさ』を体感する過程を通過することが、今回の2つの舞踊運動に固有の現象であるという可能性は否定できない。

❸コレスポネンス分析の図2と3から、3回目ではよりよく踊ることへの欲求と相まって、体感自体が1回目、2回目よりも自由に、広がりを持って為されていると推察する。この段階における“よりよく”踊ることの意味は、被験者の振り返りの記述等から、次の二点が考えられよう。すなわち一点は身体技術的にうまく踊ることであり、もう一点は各人がそれぞれの体感を深めつつ、自分らしい動き方、表現の仕方を探求することである。

以上より、踊る技術を深める過程において体感は重要な要因であり、また体感の獲得のためには踊る技術の向上が必要であるというように、両者はともに被験者の舞踊表現を独自のものに導く重要な柱になっているといえよう（図 6）

図 6：舞踊運動習熟の仮定モデル（\*図中の曲線が習熟の過程を示す）

#### 4. おわりに

本研究で設定した舞踊運動は、「大きい」を想定した舞踊運動 1 と「楽しい」を想定した舞踊運動 2 であった。これらを踊ったときの体感について、コレスポンデンス分析によると、回を重ねるにしたがって舞踊運動の周辺に位置する感情語が多くなっていた。これはすなわち、舞踊運動を繰り返し練習することにより、動きを体感するという行為そのものが、よりはっきりとおこなわれていることを示唆しているといえよう。また、動きの面では、単一運動が羅列された踊りからひとつの流れを持つ踊り、そして空間や呼吸を意識して独自の表現を探求する踊りへとの変化が見られた。これらより、動きを体感し、深めていくこと、あるいは広げていくことは踊る技術の向上にとって重要な要因であり、また体感の獲得のためには踊る技術の向上が必要であるというように、両者はともに被験者の舞踊表現を独自のものに導くための重要な柱であると考えられよう。

今後の課題として、今回は舞踊運動が 2 種類であり、その 2 つの感情価が大きく異なるものではなかったため、さらに別の舞踊運動における踊る技術の習熟と体感の獲得についても実験をおこない、舞踊表現における体感の働きをより明らかにしたい。また本研究で用いた舞踊運動の評価基準を検証するとともに、舞踊研究者による評価だけでなく、舞踊運動の動作分析をおこない、分析の上からも踊る技術の向上をとらえることが必要であると考えられる。

筆者らは、身体を実際に動かすこと、とくに何らかの感情価を持った舞踊を行なうことが人間の感情を豊かにするという点と、頭で考えるだけではなく確かに身体を通して体験された感情、すなわち「体感」こそが、その個人に深く息づいて、日常においても豊かな感情を持つことにつながるであろうという点を強く意識し、舞踊運動における「体感」につ

いての研究を継続中である。

〈注〉

- 1) 動きの体感には「深まり」と「拡がり」があると考えられる。つまり、「深まり」は本研究のように、提示したある感情価を持つ舞踊運動、たとえば『楽しい』を行ない、練習の回を重ねるにつれて「楽しい」という体感がより明確になることである。一方「拡がり」は、練習の始めのうちは「楽しい」だけしか感じられなかったものが、踊る技術の向上（独自の動きの間や動き方など）と相まって「嬉しい」や「弾むような」といった同じような表現質を持つ感情が体感されることを意味する。筆者らは、ある動き A から体感 A が得られるという一対一の正解に留まるのではなく、さらに動きを通して様々な感情を体感することができるようになることが、豊かな舞踊表現につながると考えている。
- 2) 中村は、「体感」を体性感覚の略称として使っている。
- 3) ①でいう「一定の体感」とは、今回のように舞踊運動「大きい」をおこなうことによって、他の感情価を持つ舞踊運動たとえば舞踊運動「悲しい」とは異なる感情価が体感されるということの意味している。すなわち、先行研究で取り上げた舞踊運動のそれぞれにおいて、体感された感情があったことを指している。
- 4) 舞踊系運動方法論実習 I の内容は以下の通りである

＜授業内容＞

1. オリエンテーション (VTR 鑑賞)・ダンスウォームアップの創作
2. 舞踊運動課題 <捻る- 回る- みる>×《流れるような》
3. 小道具を使つての表現 『ゴムを使つて』×イメージ課題 <星座>
4. <移動- 伸びる- 崩れる>×《寂しい・悲しい》
5. イメージ課題 <火山>
6. 叩く- 踏む>×《楽しい》
7. <振り上げる- 回る- 滑りこむ>×《鋭い》
8. 群構成の課題 <8人での隊形の変化>×イメージ課題 <都会>
- 9~10. 舞踊課題の作成と、その課題での指導を実習する
- 11~13. グループ作品の創作 《Seven motives》を課題として
14. グループ作品の修正・踊りこみ、発表
15. グループ作品を VTR で鑑賞し、自己評価と相互評価を行う

- 5) 31 種類の舞踊運動とは、先行研究において松本 (1984) が作成した 7 つの舞踊運動 (7 Motives) と柴による 24 の舞踊運動 (表情語 (柴 2003a) から 7 と先行研究 (柴 2003b) から 17) を加えたもの。運動の原型は松本の 7 Motives が「移動+その場での腕の上下開閉」、柴の舞踊運動が「移動+その場での伸-縮-回」であり、いずれも可能な限り原形を保ちつつ、感情価の各特性を表出するように変形され作成された、以下の感情価をもつ舞踊運動である。1. さりげない, 2. 楽しい, 3. 流れるような, 4. 寂しい, 5. 厳かな, 6. 鋭い, 7. 躍動的な (以上, 松本による), 8. 力強い, 9. 美しい, 10. 悲しい, 11. 激しい, 12. 明るい, 13. 重い, 14. 速い, 15. 大きい, 16. 静か, 17. 強い, 18. 楽しい, 19. 暗い, 20. なめらか, 21. 嬉しい, 22. きれい, 23. 怖い, 24. 軽やか, 25. 悲しい, 26. 恐怖, 27. 嫌悪, 28. 驚き, 29. 幸福, 30. 怒り, 31. 喜び (25~31 は表情語)。本研究の舞踊運動 1 「大きい」は 15, 舞踊運動 2 「楽しい」は 18 を使用。

6) 本研究でいうところの「感情語」とは、感情を表す言葉を意味する。被験者には、「踊るという実体験を通して身体に受ける感じ、自分が踊ることによって身体で感じ取った感じを、感情を表す言葉で記述しなさい」と指示した。但し、「感情を表す言葉」の解釈は個々の被験者に拠る。

7) 踊りの間について郡司正勝氏は次のように述べている。

「いくら美しい動きがつぎつぎと続いても、それだけでは舞踊とはいえない。これらは流れる生命感の上に表出されてこそはじめて真の舞踊といえるのである。これを司るのが律動である。日本舞踊ではむかしからこれを「間拍子」という観念でいい現わしてきた。「ま」は動きと動き、形と形の空間であり時間であるわけだが、それはたんなる機械的な空白な空間や時間のことではなく、いわゆる芸術に置きかえられた時空にはかならない。

すなわち「間」とは個人の中で創造される、個に特有のものであるといえよう。そこで、この評定尺度では自分の「間」をもって踊ることを、踊る技術向上のひとつの段階であると考えた。

#### 〈引用・参考文献〉

- 1) 濱治世・鈴木直人・濱保久(2001) 感情心理学への招待. サイエンス社.
- 2) コーネリアス, ラドルフ.R. 齋藤勇監訳(1999) 感情の科学—心理学は感情をどこまで理解できたか. 誠信書房
- 3) 小林宏(1990) 直感から直観へ 感性学入門. p. 140, pp. 148-153, 産能大学出版部.
- 4) 群司正勝(1979) おどりの美学—間・移り 現代のエスプリ 141(いき・いなせ・間 現代に生きる日本人の美意識): 181-184, 至文堂.
- 5) 松本千代栄(1972) 動きの感情価に関する研究. 東京教育大学体育学部紀要(11): 66-75.
- 6) 松本千代栄編著(1982). ダンス 表現学習指導全書(第3版). 大修館書店.
- 7) 松本千代栄・中村乙女・栗原知子・藤山恭子(1984) 舞踊の構造・機能と要素化Ⅲ—運動の質と感情価— 第35回日本体育学会(演題No. 1118)発表資料.
- 8) 松本千代栄(1987) 舞踊研究: 課題設定と課題解決学習Ⅱ—運動の質と感情価. 日本女子体育連盟紀要 '87(1): 53-89.
- 9) 中村雄二郎(1979) 共通感覚論. 岩波書店.
- 10) 中村雄二郎(1992) 術語集 - 気になることば-. 岩波書店, pp. 16-20.
- 11) ポラニー, マイケル 佐藤敬三訳, 伊東俊太郎序(2002) 暗黙知の次元. 紀伊國屋書店.
- 12) 柴真理子(1996) 感性情報の抽出に関する基礎的研究: 体感による運動の感情価—舞踊熟練者を対象に— 平成8年度ATR受託研究報告書, pp. 1-14
- 13) 柴真理子(1997. a) 感性情報の抽出に関する基礎的研究: みえと体感による舞踊運動の感情価—舞踊熟練者と未熟練者を対象に— 平成9年度ATR受託研究報告書, pp. 1-12
- 14) 柴真理子(1997. b) 体感による舞踊運動の感情価—舞踊経験の浅い学生を対象に— 映像メディア学会技術報告 Technical Report 21(28): 37-42.
- 15) Shiba Mariko(1998) “Extraction of Kansei Information in Dance Movements” ATR Workshop on Virtual Communication Environments -Bridges over Art/Kansei and VR Technologies-, ATR Media Integration & Communications Research

Laboratories, pp. 70 -85.

- 16) 柴真理子・阪田真己子・坪倉紀代子 (2001) 顔の表情語に基づいた舞踊運動の表現特性－顔の表情と身体表情の関連をみるために－. 神戸大学発達科学部研究紀要 8 (2) : 269-282.
- 17) 柴真理子・魚住和晃・菊地雅春・宇津木成介・小高直樹・米谷 淳・萱のり子 (2003a) 異なる感性表現に共通する基本感情の検証と異文化間比較. 平成 12 年～14 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (研究課題番号 12610081) 研究成果報告書.
- 18) 柴真理子 (2003b) 体感による動きの感情価－舞踊経験者と未経験者の比較－. 神戸大学発達科学部研究紀要 10(2) : 173-181.

附記：本研究は平成 15 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B(2) 「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」(課題番号 15300213, 代表・柴真理子) の援助を受けている.

平成 16 年 6 月 22 日受付

平成 17 年 3 月 2 日受理